

●国際連合大学 2012-2013年/2013-2014年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告

北京市・貴州省貴陽市・上海市

2014年5月18日(日) — 5月25日(日)

国際連合大学

[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

2012-2013 年 / 2013-2014 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告

北京市・貴州省貴陽市・上海市

2014 年 5 月 18 日(日) — 5 月 25 日(日)

はじめに 2

1. 実施概要 4

2. 表敬訪問 8

3. 学校訪問 16

4. 歴史と文化訪問 40

5. 情報共有会 42

6. 成果 44

7. 今後の活動予定 60

資料 64

(写真、実施概要、日程表、参加者リスト・関係者リスト、過去のプログラム実績)

国際連合大学

[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

はじめに

国際連合大学(UNU:United Nations University)は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)へ委託し、広く展開しています。

2002 年からはじまった「国際教育交流事業」では中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに述べ 1,364 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣していました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたびの「中国政府日本教職員招へいプログラム」は、2014 年 5 月 18 日から 5 月 25 日に実施され、北京市、貴州省の各教育機関と学校を訪問し、上海市を経て帰国しました。今回は中国からの招へい枠が増え、2012-2013 年度事業参加者として 21 名、2013-2014 年度事業参加者として 29 名の合計 50 名の日本教職員訪問団が中国を訪問しました。

構成としては 2013 年 10 月から 12 月にかけて中国教職員が訪問した自治体や学校の教職員、2014 年 10 月から 11 月にかけて中国教職員を受け入れていただく自治体の教職員と、公募で選ばれた教職員です。参加者は中国教育部で中国の教育事情や制度について説明を受けたのち、北京市と貴州省貴陽市での学校および教育文化施設等を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、文部科学省、外務省、及び、貴州省教育厅、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2014 年 7 月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1.

実施概要

今回の国際教育交流事業中国政府日本教職員招へいプログラムは、2014 年 5 月 18 日から 5 月 25 日の 8 日間にわたり実施された。

今回のプログラムでは、中国教育部と貴州省教育厅の協力を得て、北京市内で 1 校、貴州省で 5 校の学校訪問をした。各訪問地では、中国教育部表敬訪問、貴州省教育厅表敬訪問、学校訪問に加え、学校関係者との意見交換や文化施設の見学を通じて教育交流を行い、そこから多くを学び取り帰国した。

今回の訪問団の参加者の構成は、以下のとおりである。2013 年 10 月から 12 月に中国教職員が訪日をした際の受入自治体と学校として、熊本県荒尾市教育委員会、岡山県総社市教育委員会、長崎県長崎市教育委員会、和歌山県教育委員会と東京近郊の訪問学校から選出された教職員、そして、2014 年 10 月から 11 月にかけて中国教職員招へいプログラムで受入れ予定の自治体の教職員も、交流の基盤づくりのため参加した。2014 年秋に訪問予定の自治体は、東京都多摩市、熊本県荒尾市、長崎県長崎市である。またこのほか、一般公募で選出された参加者が加わり、合計 45 名が参加者となった。このほか、国際連合大学と文部科学省の代表者、および内閣官房参与、ユネスコ・アジア文化センターの計 5 名が同行し、合計 50 名が日本教職員訪問団として中国へ向かった。なお、今回の日本教職員訪問団の団長は、福岡県大牟田市立天領小学校校長の坂本智典氏、副団長は熊本県荒尾市立中央小学校教頭の友田俊司氏と、東京都江東区立八名川小学校副校長の濱方弥生氏の 2 名である。

出発前日の 5 月 17 日、参加者は東京渋谷区にある国際連合大学のエリザベス・ローズホールに集合し、事

前オリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、国際連合大学大学院事務局長の秋葉正嗣氏、文部科学省初等中等教育局国際教育課国際理解教育専門官の菊池智之氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター人物交流部部長の佐々木万里子があいさつをした。

つづいて文部科学省生涯学習政策局参事官付専門職の新井聰氏より、中国の教育概要、初等中等教育概要、多様性から見る中国の教育についてなどの講義があった。参加者がそこで得た知識は、中国訪問中、現地での見聞を深めるための基礎知識として大いに役立つものとなった。

その後、前年度プログラム参加者を代表して神奈川県横浜市立永田台小学校校長の住田昌治氏と公文国際学園中等部高等部教頭の米山宏氏から前年度の経験に基づいた見所や諸注意などのアドバイスが、今回の参加者に向けて発表された。

オリエンテーション終了後に招かれた中華人民共和国駐日本国大使館主催の夕食会では、公使参事官の白剛(BAI Gang)氏をはじめとする大使館関係者らの話やあたたかい対応で、参加者たちは、中国に対する親近感を更に深めてプログラムに参加することができた。

プログラム第 1 日目の 5 月 18 日の早朝、訪問団 50 名は羽田空港から北京首都国際空港にむけて出発した。飛行機は約 2 時間遅れて北京に到着したが、空港では、主催側の担当者の中国教育部国際協力交流司アジアアフリカ処の王禹耕(WANG Yugeng)氏が出迎えてくれた。王禹耕氏と合流した訪問団一行は、専用バスで中国教育部近くの宿泊ホテルに向かい、昼食をとったあと、第一回情報共有会を行った。

第一回情報共有会では、参加者の自己紹介のあと、プログラム期間中の時間を有効活用するための自分の役割やプログラムの進め方などが確認された。

第 2 日目の 5 月 19 日午前、中国教育部への表敬訪問を行った。中国教育部では、今回は 2014 年 3 月に退職された国際協力交流司の司長の劉宝利氏に代わって、副司長の陳盈暉(CHEN Yinghui)氏により中国の教育事情について、制度と現状が詳しく説明された。同司アジアアフリカ処の王禹耕氏が通訳として同席した。陳氏の説明の後、日本教職員訪問団から活発に質問が出された。

参加者はそれらの質問一つひとつに対し、中国教育部からの丁寧な回答を得、各種学校や教育施設など、現場訪問をする前に、中国の教育事情や教育方針の正確な情報と知識を得ることができた。



この日の中国教育部主催の昼食には、表敬訪問で対応頂いた陳氏のほか、中国教育部国際協力交流司アジアアフリカ処の副処長の李旭東(LI Xudong)氏、同処の鄭晗(ZHEN Han)氏、昨年同プログラムで同行頂いた马力(MA Li)氏らが主催側ホストとして出席し、訪問団と歓談し交流した。

その日の午後、訪問団一行は北京市内にある北京市趙登禹学校を訪問した。北京市趙登禹学校では児童らの大きな拍手に迎えられ、講堂で児童の司会・進行による歌や踊り、演奏などの歓迎セレモニーが行われた。

セレモニーの後、徐唯(XU Wei)校長から学校紹介と教育内容についての説明を受けた。その後、4グループに分かれ、授業や学校の設備、児童らの作品を見学した。見学の後は学校の特色ある取り組みに対しての教職員の意見交換が行われた。

第3日目の5月20日から24日の期間、訪問団は貴州省で特別支援学校を含む5校の初等中等教育学校と教育文化施設を訪問した。

貴州省は中国南西部に位置し、今回訪問した貴陽市はこの省都である。市の面積は17.61万km²で日本の面積の半分弱に相当する。市の人口は約3475万人。省

《中国の教育に関する基礎データ》

◆中国の総人口 135,404万人

	学校数	生徒数	教員数
小学(小学校)	241,200	99,264,000	5,605,000
初中(中学校)	54,100	50,668,000	3,525,000
高中(普通高等学校)	13,688	24,548,000	1,557,000
特別支援学校	1,767	399,000	41,000

* 2012年度データ。

出典:文部科学省「諸外国の教育動向 2011年度版」

◆訪問都市の人口と面積

北京市(2012年統計)

面積	16,410.54 km ²
人口	2,069万3千人

貴州省貴陽市(2012年統計)

面積	17,610.00 km ²
人口	3,475万人

出典:JETRO中国エリア別情報、

在重慶日本国総領事館 管轄区域情報

の人口の約 38%が少数民族であり、苗族(ヤオ族)、布依族(ブイ族)、侗族(トン族)など、漢族を除く中国の 55 の民族のうちの 17 の民族がこの貴州省に住んでいる。料理は中国八大料理のうちの湖南料理系に分類され、料理の多くには唐辛子が使われており非常に辛い。また、天候は雨が多く、「天無三日晴(天に三日の晴天なし)」と呼ばれるほど晴天が貴重な存在であり、訪問中にもたびたび雨に見舞われることが多かった。

5月20日朝、訪問団一行は北京首都国際空港から空路で約3時間の貴州省の貴陽龍洞堡国際空港へ向かった。空港では、貴州省教育厅のスタッフと貴州省教育厅が手配した通訳らの出迎えを受けた。貴州省教育厅スタッフには、昨年 10 月に中国教職員招へいプログラムで来日した葉學士(YE Xueshi)氏もいた。

訪問団一行はそこから約 12km に位置する省都の貴陽市にバスで移動した。訪問団一行は街の中心部にあるホテルに着いた後、昼食会場へ向かい、貴州料理を味わった。

その日の午後、訪問団は貴陽市盲聾啞学校を訪問した。学校では訪問団は 2 グループに分かれて授業や生徒の作品や教室・設備などの見学をした。同校は全寮制であるため、生徒たちの寄宿舎も見学した。

同校は、卒業後の就職にも力を入れており、按摩の授業やコピーライターの養成の授業、ピアノ調律師になるための授業やダンスの授業に力をいれていた。実際に、生徒たちにダンスを教えていた教員はこの卒業生であり、按摩をならう生徒達は市内の按摩店に働いていたという。

次に訪れたのは、貴州省教育厅である。貴州省教育厅の庁舎では副庁長の楊勇(YANG Yong)氏、葉氏ほか、通訳を含み 7 名の教育関係者らが出席し、訪問団を歓迎してくれた。表敬訪問では、楊氏のあいさつと出席者の紹介に続き、訪問団を代表し、団長の坂本氏があいさつをした。

貴州省の文化と教育について、ビデオや映像とデータを使って説明があった。楊氏からは、「一衣帶水の中國と日本、教師や学生の交流によって学びあいたい。現在は教師の質にバラツキがあるため、基本方針は“バランスよく”である。そのため、学校間での教師の交換など質の向上を目指している。」と教育目標を述べた。

続いて、中国教育部から王禹耕氏が訪問団受入に対しての感謝と本プログラムの紹介・目的について述べ、本プログラムでの日中相互学習が、両国の教育が共に向上し、両国の友好を促進するものとして有意義である

と述べた。

その後の質疑応答では、参加者らから多くの質問が出たが、来席した各教育関係者から、それぞれの質問に対して詳しく回答を得ることができた。

その後、市内のレストランで行われた貴州省教育厅主催の歓迎夕食会では、苗族の民族衣装に身を包んだ店員の歓迎と演奏を聴きながら、名物料理などを味わい、貴州省の文化に触れた。

第4日目の5月21日の朝、訪問団一行は、バスで貴陽市実験小学校を訪問した。校長の鐘海燕(ZHONG Haiyan)氏に導かれて校舎の講堂に入ると、たくさんの児童たちの笑顔と拍手で迎え入れられた。

歓迎会では児童らのドラム演奏、英語の歌や中国の歌、古箏(中国の琴)演奏、ラテンダンスなど多岐にわたった演目が披露された。その後、苗族の民族衣装を着た児童らが踊りを披露した。

その後、児童らは、観覧席にいる日本教職員らの手を引いて、参加者らを苗族の歓迎の踊りの輪へ導き、全員で手をつないで踊った。歓迎会を終えた後、参加者らは 2 グループに分かれて国語、書道、工作などの授業見学や校舎、校庭、図書室、自習室、児童のためのカウンセラーサー室などの施設見学をした。工作の授業見学では児童らに授業内容を聞いたり、また、料理の授業では児童らの手作り餃子を食べたりした。

貴陽市実験小学主催での昼食後、訪問団一行は貴陽市の中心部から離れた花溪区に位置する貴陽市花溪青岩小学へバスで向かった。

貴陽市花溪青岩小学に到着すると、校長の王主國(WANG Zhuguo)氏に迎えられた。講堂でしばしの休憩をとった後、訪問団は児童らの龍舞、扇子群舞や苗族や布依族など少数民族の踊りなどを見学した。龍舞、扇子群舞では、広いグラウンドを有効に使ったダイナミックな踊りを披露してくれた。児童らはみな元気に規律正しく踊っていた。踊りの見学の後、一行は学校の設備と授業見学をした。その後、再び講堂に戻って学校説明を聞き、記念品交換を行った。

貴陽市花溪青岩小学を後にした訪問団一行は、同地区にある青岩古鎮に向かった。この地域は、現在、道路や広場等を整備中であり、参加者らは農村部の中国の発展過程の一部を目のあたりにした。また、昔ながらの田畠と城壁に囲まれた古い街並みが続く青岩古鎮では、参加者らは貴州省の歴史文化にも触れることができた。

その夜、訪問団一行は、貴陽大劇場で毎日公演される貴州少数民族踊り「多彩貴州」を鑑賞した。これは、貴州省に住んでいる少数民族の伝統や文化に再着目して紹介しているもので、訪問団は貴州省の無形文化にも触れることができた。

プログラム第5日目の5月22日は貴陽市を出て、アジア最大の滝「黄果樹の滝」を擁する黄果樹風景名勝区へ向かった。この地域は環境に配慮されており、訪問団はバスを降りて、徒歩またはこの地域の専用バスに乗りかえて目的地へ向かった。黄果樹風景名勝区の豊かな水と緑に包まれて、参加者らは環境学習をするだけでなく、リフレッシュもすることができた。

プログラム第6日目の5月23日の朝、一行は北京師範大学貴陽市附属中学の高中(日本では高等学校に相当する)を見学した。校長の沈連柱(SHEN Lianzhu)氏は、中国教職員招へいプログラムで昨年11月にBグループの副団長として来日している。日本教職員訪問団一行が到着すると沈氏は昨年の来日時の感想を述べ、笑顔で参加者らを校舎の中に招き入れた。

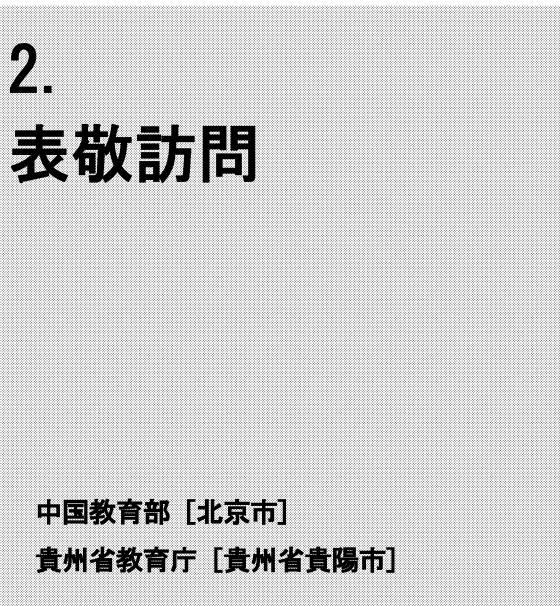
同校では、校長のあいさつに続き、記念品の交換が行われ、その後学校紹介が行われた。訪問団は2グループに分かれ、校内見学をした。校内には、来日時の記念品も飾られており、今回の日本教職員訪問団に対してのあたたかいもてなしの心が感じられた。校内見学のあとは授業見学の時間が設けられており、「高1古文」と「数学」の2つの教室に分かれ、それぞれ授業の最初から最後まで、1時間通じて見学することができた。また、質疑応答の時間では、教職員とのフリーディスカッションの時間が設けられた。そこでは、参加者らと学校の教職員らがそれぞれに英語や中国語、通訳を交えた日本語で自由に意見交換を行うことができた。

その日の午後、訪問団一行は最後の訪問校となる貴陽市第一中学の高中部を見学した。同校は大型寄宿制の学校である。訪問日は金曜日だったため、授業後に帰省する生徒たちのスーツケースや鞄が、校内の一角にたくさん集められていた。学校では授業見学はできなかつたが、学校の広いキャンパスや寄宿舎、教室や設備などの校内見学を行った。見学のあと、校長の周進(ZHOU Jin)氏から、歓迎のあいさつと学校の説明が述べられ、質疑応答の時間が設けられた。

第7日目の5月24日の朝、訪問団は、教育施設のひとつである貴州孔学堂を訪問した。2012年に建てられたばかりのこの施設は、教育交流、育成訓練、研修等に活用されているだけでなく、広く一般の貴陽市民の交流の場としても開放されている。訪問団一行は、文化・教育向上のための中国の大型公益施設を見学することができた。

貴州孔学堂の見学を終えた一行は、空路で上海浦東空港に向かった。上海では、上海教育国際交流協会・上海ユネスコ協会副秘書の竺炜(ZHU Wei)氏が日本教職員訪問団を出迎え、夕食は、全員でとる最後の食事になるため、参加者が中心となって、中国教育部と国連大学とスタッフへの感謝が述べられた。また参加した感想や中国での気づきなどを、笑顔を交えながら発表される和やかな食事の時間となった。

最終日の5月25日の早朝、各帰国地に合わせてホテルにて解散し、中国教育部の王禹耕氏と竺氏に見送られて、上海浦東空港から成田、関西、福岡の3か所の各空港へ向かつて帰国の途に着いた。



訪問団は首都の北京市にある中国教育部と貴州省の省都・貴陽市にある貴州省教育庁にて表敬訪問をした。教育庁からは中国の教育概要と教育方針、さらに中国の初等中等教育の特色と、最近中国で導入された制度などについても説明があった。

中国教育部

[北京市] 5月19日(月)

中国教育部は1998年3月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中国の中央政府の組織である。教育全般を総括し、日本の文部科学省にある。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

北京到着翌日の5月19日、日本教職員訪問団一行は中国教育部で表敬訪問を行った。

中国教育部では、最初に国際合作交流司副司長陳盈暉(CHEN Yinghui)氏から歓迎のあいさつがあり、その後、日本教職員訪問団を代表し、大牟田市立天領小学校校長坂本智典氏が歓迎の謝辞を述べた。その後、基礎教育一司総合処長ワン・ダイ (WANG Dai) 氏より中国の基礎教育(日本での「初等中等教育」に相当する)について詳しい説明があり、質疑応答があった。次に、国際協

力交流司アジア・アフリカ処副處長李旭東(LI Shudong)氏より歓迎のあいさつがあった。通訳は、期間中、訪問団に同行してくれた中国教育部同処プログラム官員王禹耕(WANG Yugeng) 氏が務めた。

陳氏あいさつ:

中国教育部は日本教職員訪問団の訪中を歓迎している。2008 年中国戦略的互恵関係を確認しており、日中友好は 15 億人のアジア人にとって政治・経済・文化の発展に有効である。中国にとっても重要な交流である。東京の大蔵館公使参事官白剛教授からもぜひよろしくと電話をもらったところである。

団長の坂本氏あいさつ:

歓迎に対する謝辞で次の 3 点について述べた
1.2008 年以来の招へいプログラムを今年も実施できたことに対して、今回も日中の子供たちのために大きな成果をあげたいと考えている。
2.今年度は中国への招待人数を 50 名と倍増して貰い、大変嬉しいと思う。メンバー全員日中友好を望んでいる。
3.日本での白氏による歓待、昨夜遅く王さんによる天安門案内など温かい歓迎に感謝する。

次に今回の訪問の目的 3 点

- 1.現場の教職員が直に中国教育制度の良さを学ぶこと。
- 2.学校において子供たち教職員の方々と交流を深めること。
- 3.「黄果樹の滝」観光などを含め、中国の理解を深めること。

今回より友好関係を築き、相互交流の発展、充実を図りたい。また秋の中国教職員招へいプログラムにおいては日本側も温かく迎えたい。

陳氏の説明:

日中交流について 6 点

- 1.政府間の合意により、教職員、生徒の交流が始まり日本の文部科学省が 2002 年より 2000 人の校長、教員を招へいし、中国政府 300 人以上を招へいしてきた。その成果は大きい。外務省との協力で中国青少年交流事業も行われてきた。
- 2.教育機関との協力により日本語教師招へい事業が 21 年続いている。600 名以上の中国教員が日

- 本訪問し、東京大学、北京大学学生フォーラムも
2002 年から 8 年目、30 校の校長が参加
3. 大企業連携プログラム、電通広告教育、トヨタ専門教育など
 4. 他国との協力、日中キャンパスアジア。アジアにおけるエリート教育を目的に
 5. 留学生交流増加。2013 年中国での日本人留学生は 1 万 2,322 人で 4 位(2000 年までは 1 位)、日本への中国人留学生は 10 万 6,000 人強
 6. 日本における孔子学院。2005 年立命館大学を皮切りに現在 13 の大学、7 つの学院。1991~2012 年までの中国語能力検定受験者は日本で 8 万 2,046 人にのぼる。

基礎教育一司総合処理長ワン氏より、基礎教育の説明と日本から事前に出しておいた質問に対しての回答があつた。

- ・中国の基礎教育は就学前教育、9 年間の義務教育、3 年間の高校教育からなる。
- ・基礎教育理念は生徒の能力、質の向上教育(実践能力を含む)。生徒の興味のあるもの、芸術、スポーツ、語学を学ばせる。高等中学から専門的な学校がある。公立学校の 4 分の 1、小中一貫校。
- ・道徳教育は大、高、中、小、一貫に行われる。小学校ではよい習慣マナーを身につける。
- ・職員養成システム。全国 6 つの師範大学、各省

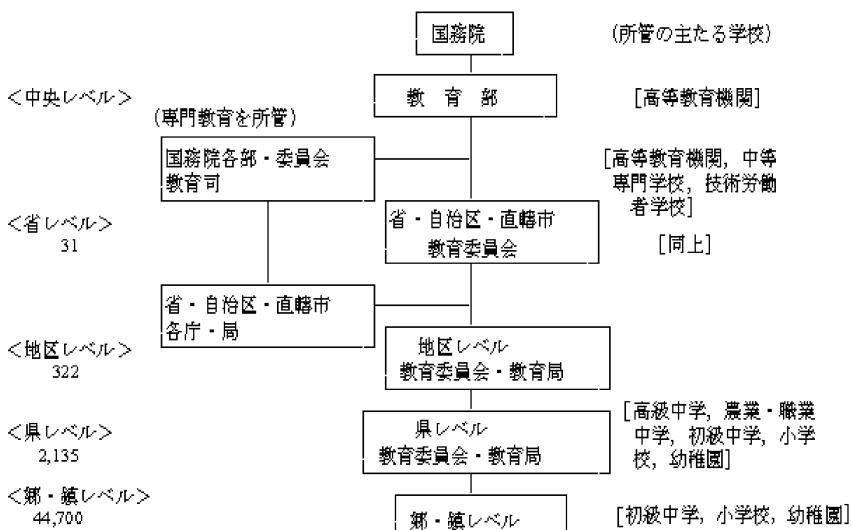
立師範大学、市立師範養成専門学校、県立研修センターがある。

- ・県統一免許試験がある
 - ・公務員と同じ待遇
 - ・評価は校内評価年 2 回
 - ・特別教育
- 普通クラスに入るものの…知能に障害がない専門的学校に行くもの…1800 養護学校に 38 万人(総数の半分)。30 万人以上の県に 1 ケ所設置が目標

質疑応答:

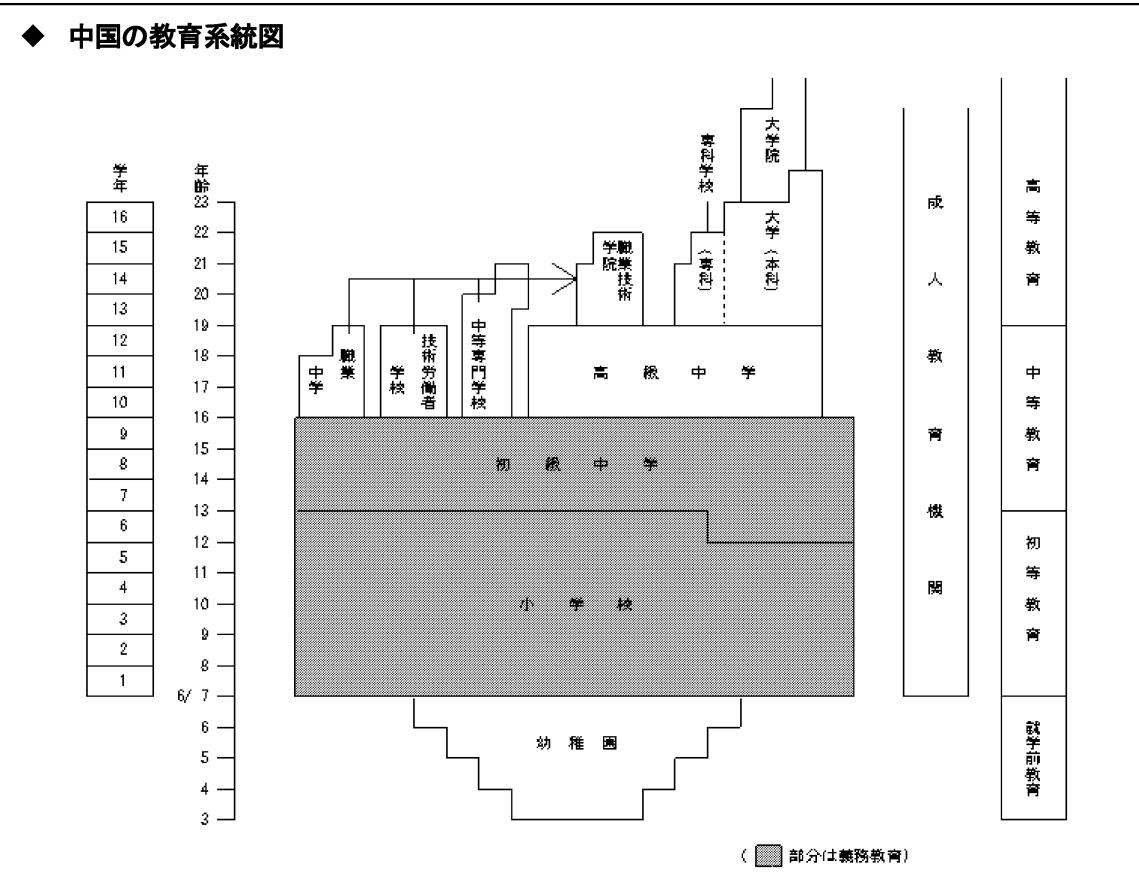
- Q. 小中一貫校の入試は? (松山)
- A. 小中は義務制で近くの学校に試験なし。高校入試は試験があり、各市で成績の良い順に入学するので、大学入試と同様重要。
- Q. スクールカウンセラーのシステムはあるか。悩みの相談は日本では専門家にするが? (山名)
- A. 心のケアは道徳教育の内である。非常勤だが専門の教師がいる。相談は学校の心理の教員にする。特別な場合は医師に相談する。
- Q. ESD への取り組みは? (廣松)
- A. 生態文明教育(循環教育ともいう)がある。
- Q. 多民族国家において互いの文化尊重についての取り組みは? (光行)
- A. 地域で民族の文学、言語を使ったバイリンガル

◆ 中国の教育行政について



- 教育など。宗教の自由もある。
- Q. 資質教育における創造性、人間性教育への取り組みは？(堀川)
- A. カリキュラムに実践教育、校外研究教育含む。
- Q. 法律での健康診断が日本では定められているが、中国ではどうか(村田)
- A. 年一回ある。ただし地域差があつて都市部では校内医がいて健康ファイルもあるが農村部にはない。
- Q. 教師の海外ボランティア派遣制度はあるか？自分が小学校教員派遣制度で海外へ行った際に、中国から支援された建物を使った。(大田)
- A. あるが少人数。孔子学院の中国語教員とボランティアで実施、言葉がネックになる。
- Q. 小3からの英語教育が近年入試激化で生徒の負担減のため緩和されたと聞く。日本は増加させようとしているが具体的にはどう変わったのか？(北谷)
- A. 基礎教育課程標準での学習時間などは変わっていない。大学入試の配点比率が減じた。自国語を重視してきた。700 万人の留学生は少数で他の者は無駄になるので。

- Q. 中国留学生を受け入れているが同じ学力の日本人学生と比べるとパワフルだと思う。そのパワーはどこから来るのか。また、パワーのない生徒はどうしているのか。(藤野)
- A. 子供を重視しているので、親の影響が大きい。親が就学前教育に力を入れたり、妊娠中の胎教をしたりする親もいる。
- Q. 奈良県は世界遺産について、それを守る人の営みを学習させているが、中国での取り組みは？(大平)
- A. 教育部伝統文芸部があり、名所での学校外教育センターとなる。
- Q. 中国のICT教育の取り組みはどうか？(相浦)
- A. 全国の学校の 77% がインターネットを使用できる。2020 年 100% を目指す。指定教育校がある。農村地域では音楽、美術、英語の教師が不足しているが、オンライン教育で解消しようとしている。
- Q. 日本でも所得格差が教育格差につながっているが、中国の教育の平等についての取り組みは？(秋山)
- A. 1. 学校施設の標準化
2. 教員交流:



- 有名校とそれ以外での人事交流
3. 「チェーン校」の形でそのグループ内で交流
人事実施する。
4. 質の高い高校にそれ以外の高校の学生があ
る程度の割合で入学できる
5. 都市部と農村部で姉妹校になり、人事異動
をする。
- Q. 教員の数は日本ではクラスの数+2名と決めら
れているが、ある学校では半数が非正規教員
という例もある。教育の質の維持が難しい状況
もあるが、中国では教員の人数、資質の向上
をどう図っているか？（井上）
- A. 生徒との比率が1対20と定められている。農村
部は少人数でも1クラスに1人。中国では1000
万人以上の教師がいる。
- Q. 逆に質問だが、中国では小学校に女性教師が
多く、体育授業や男子教育で男らしさが育たな
い。支障をきたすこともあるが日本ではどう
か？（中国教育部）
- A. 日本でも小学校の教師は女性が多く、中学校
での女性教師は小学校の数より少ない。高校
ではさらに少ない。中国と同様だと思う。しかし、
男性教師が受け持つ授業を女性教師に変更
する交換授業などをしたりして、体育授業の研
修を行っている。（井上）
- Q. 中国では小学校の給与が少なく、男性がなり
たがらないので、女性が90%以上だが、日本
は？（中国教育部）
- A. 2013年で女性教員の割合は小学校65.5%、幼
稚園96%、中学校43.3%、高校30.3%、特殊
教育61%である。（文科省菊池専門官）
- Q. 心の教育について中国の道徳教育ではどのよ
うに取り組んでいるか？（星野）
- A. 1. 授業で教科書を使って。
2. 実践教育で校外活動中センター見学の機
会に。
3. 学校文化として文化祭などで。
小学校はマナーの養成、中学校は社会科
目として道徳と社会、高校は道徳と政治、
大学は政治を扱う。一貫に正心教育（正
直）を行っている。
- Q. いじめ、不登校、暴力、自殺などの問題はある
か、また対応策は？（秋山）
- A. 教育部間と警察部門で協力。大規模校には警
察詰所がある。

- Q. 学校と保護者で解決できない問題は？
- A. 省の行政部門、教育委員会、専門的担当者が
おり、学校に連絡先を提示し、生徒も相談でき
る。

団員らの熱心な質問が相次ぎ、意見交換の時
間はあつという間に予定時間となった。

最後に中国教育部の李旭東氏のあいさつで締
めくられた。

（石橋明子）

《参加者の感想》

彦坂 秀樹…………現在、中国の教育
で力を入れているのが、①教育の平等 ②教育の
質の向上 の2点であると説明を受けた。近年、
「平等」から「質の向上」に力点がうつっていると
のこと。今回視察した学校は、まさに「質の向上」のモ
デル校なのである。この表敬訪問の、特に質疑
応答を経て、視察した学校が中国教育の全体像の
どのような位置づけにあるのか理解できた。

櫻井 英子…………中国の基礎教育の
現状を知ることができた。就学前、義務、高校教育
計17年の公教育を受けることができる。教員免許
取得については、統一試験を実施する。教育の平
等・公平を目指し、具体策（都市と農村の教員交流
など）を出している政府の動きを知ることができた。

星野 和江…………中国の教育事情に
について、話を聞くことにより具体的に理解するこ
とができた。中国では、2010年に9年生の義務教育
の完全実施を達成したこと、広い中国では、都市
部と農村部の教育格差が問題だが、全国の77%
の学校でインターネットが使用でき、農村部の地域
では、音楽・美術・英語の教員が不足しているため、
ICTで学習していることなどを知った。公立校の
1/4が小中一貫校で、生徒の学習能力や実践能
力などを生かし、質を向上させるための教育をして
いることなど知ることができた。また、教育の平等化
を図るために、学校の設置の標準化や教員の交
流、チェーングループ内の移動など工夫しながら、
誰もが、より高い教育を受けられるように工夫して
いることを知った。

松山 美彦 中国の教育制度の概要を分かりやすく説明して貰ったので大変参考になった。また、自由に質問できる時間を十分に確保して貰い、真摯に回答してくれたことに感謝したい。質疑応答をとおして、中国の教育制度について日本と同じだろう、日本と違うだろうと自分自身で決めつけていたことが、大きく異なることがあり、勝手な先入観を持つてはいけないということを改めて認識した。「生態文明教育」をとおした ESD に関する教育や少数民族に関する教育をとおした異文化理解教育など日本より進んでいる面があると感じた。

大田 孝 中国教育行政に関する全般について説明を受け、子どもの教育に対する考え方は日本も中国も同じであると感じた。子どもが素直に成長し社会に貢献する人材を育成すること、個性を伸ばすことを意識している。また、中国の海外ボランティア派遣の有無について質問することができた。海外派遣が終了して 7 年が経過した後、気になっていたことが解決してよかったです。

友田 勝司 中国教育部の説明を受け、改めて日中間の歴史と交流について考えることになった。特に現在は、子どもたちの交流や教職員の交流、企業間の交流など強い結びつきも見られることもあり、今後につないでいかなければならぬと感じた。中国の基礎教育についての説明では、「教育公平(不平等改善)」という言葉が印象的であった。13 億人という人口の中で、公平への取組は、必然で有り課題である。一つの解決手段として、現在全国の学校の 77% がインターネット使用可能であるが、2020 年までに 100% にして、オンラインを使った学習システムを導入し、農村部の教育の充実を図ることなどは、今の中国の経済発展の中では十分に達成可能な取組と思われる。どのように全国土にわたって教育の公平を実現していくのか、今後の動きに注目したい。

更科 幸一 中国が目指している教育を理解することが出来た。質の高い教育というものを、『知識偏重ではなく、実践の能力を身に着けさせること』と定義づけていることは素晴らしいことであった。また、教育公平(平等)として、貧困地域の生徒がレベルの高い学校に入れる制度をつく

る取り組みや、農村部の施設改善と教職員の充実に関しては地道な努力がみられた。受験偏重の教育から脱却し、社会で実践できる力を教育で育もうとしている点は、日本も同様である。お互いに受験偏重の価値観から抜け出し、本質的な教育を行うことは大変であるが、交流する中で解決が出来る事もあるのではないかと感じた。

谷口 和弘 日中関係は現在、政治的には様々な課題を抱えているが、教員の招へい数は倍増するなど人的交流については重要視されていることがわかった。中国教育行政のトップである教育部を訪問し、中国における教育の現状と課題について総合的に知ることは、その後の学校訪問の事前研修として大いに役立った。

中国は現在教育改革を行っている最中であり、基礎教育の質の向上、国際化への対応、広大な国土内の教育格差、国内民族への配慮等の課題解消のために、教育の発展の方向性として、公平(平等)、資質向上の教育を掲げ、急速に教育改革を行っている印象であった。

相浦 太 日中間の関係についてさまざまな報道がなされている中で、中国教育部国際合作交流公司副司長の陳氏より、中国と日本の交流の重要性とこれまでの成果が語られたことは意義深い。陳氏の言葉は中国政府の意志を代表して述べられている。教育を通じ副司長た日本との交流に予算を計上してきたことからも、それが真意であることが伺える。国家間の緊張が高まりつつある今だからこそ、お互いのことをもっとよく知るための交流は必要である。教育分野での交流は将来への重要な投資であり、2 国間の溝を埋める大切な取組であると感じた。私もこのプログラムに加わった以上は中国で見聞きしたことをできるだけ正確に日本の子供たちや教職員に伝えていきたい。

中国の ICT 整備状況について確認するのが私の今回の目的であった。現状として、中国のインターネット接続率が 77% であることと 2020 年までには 100% を目指していることが語られた。中国の国土の広さを考えると日本よりも時間は必要であろうから、国を挙げて着実に教育の ICT 化が図られていることがわかった。

中国の教育の問題点として、農村部の音楽・美

術・英語の教員不足が語られた。その解決策として、インターネット回線を用いた TV 会議システムの導入を検討しているということであった。私が勤務している長崎市でも、離島部学校の過疎化により教職員の定数が減少し、免許外の指導を余儀なくされる事態が発生している。そこで、離島部学校の教科指導充実のために今年度 TV 会議システムを導入し、離島部学校の生徒が本土部学校の授業を受けることができるようになる予定である。つまり、中国政府と同じ発想である。いずれ、日本と中国の学校が、そして世界中の学校がテレビ会議システムでネットワーク化され、手軽に交流できるような時代が来る事を願う。

新井 崇矩 日中両国が連携して教育交流を行っていることが分かった。交流の方法として、①政府プロジェクト(両国の教師・子供の交流促進)、②日本の教育機構との交流、③企業提携、④キャンパス交流、⑤留学生数の増進、⑥総合連合教育などがある。中国では、日本語が英語に次ぐ外国語として学ばれている。中国の教育の方向性として、「教育公平(平等)」と「資質教育」の2つが挙げられた。都市部・農村部の教育格差を是正するために、都市部の教師を農村に派遣するなどの施策を行っている。また、子供が興味のある方面へ進めるよう、中学から専門学校を設けたり、課外活動を充実させたりするなどの施策を行っていることが分かった。

井上 滌 経済だけでなく、教育分野においても、日本と中国は相互に重要な交流相手であることを再認識した。

中国の各学校の教職員数は、一校あたり「教員1:生徒 20」を基本の比率としているらしい。教職員の男女比はやや歪で、小学校では女性が 90%。教職員のレベル維持のために研修を積極的に行っているのは、日本と同じであった。

中国でもいじめ、不登校、暴力、自殺等の問題行動については深刻で、教育部門と公安警察とが連携し対応しているそうだ。

北谷 美希 中国の教育制度の柱である、基礎教育について詳しい説明を受け、理解を深めることができた。道徳教育では小学校において良いマナー・習慣を身につけることを目

標とするなど、日本との共通点も多く、子どもたちの教育でめざすところは両国同じであると感じた。

また、英語科教員として一番関心のあった中国の英語教育事情について質問させてもらった。小学校3年生から始まる英語教育が受験競争を激化させているため、大学入試の配点を下げるなど、緩和されている方向であることや、留学生の英語教育を重視しており、それ以外の生徒には中国語や数学などに力を入れさせている点は、日本の英語教育とはまた違う方向、さらに1つ上の段階に進んでいると感じた。今後、自分なりにさらに詳しくこの点を勉強してみたいと思っている。

光行 泰子 中国の教育の現状、加熱する受験競争への対応など、今の中国の教育行政が取り組んでいる問題がよくわかり、その後の学校訪問へ向けての基礎知識が得られ有意義であった。また我々の質問に対する丁寧な回答で、日本との差異がよく理解できた。

森川 直美 中国の教育制度、今後の教育の方向性を理解できた。国際社会で通用する一流の人材育成(エリート教育)と都市部と農村部の教育格差を是正し、教育の機会均等の実現のための施策を国家プロジェクトとして推進しておられる姿を伺うことができた。併せて、少数民族も含めた、伝統文化の継承発展も大切にされ、尽力されている姿を学ぶことができた。

村田 聖子 中国の全般的な教育事情の概要を知ることができる機会となった。最初の訪問先であり、この後の学校訪問の参考となつた。

中国がどのような方向性を目指しているのかを知ることができた。

吉井 進 中国教育部の代表者からの教育施策を聞き、わずかながらではあるが中国の重点的な取組と課題が理解できるとともに、このプログラムの重みを再認識できた。

中国では、①基礎教育において、就学前教育、義務教育 9 年間、高校教育 3 年間を推進していること。②理念は、児童・生徒の資質・能力の向上(実践能力)であること。③芸術・スポーツ・語学は、中学から専門的に学ぶことができる制度があること。

その他、小中一貫校は公立学校の 1/4 であり、道徳教育は小中高大まで一貫して行っていること等である。その中において、基礎教育の充実及び教員養成は、中国全土での教育の平等と均等を図る上で重要な取組であることが理解できた。都市部と農村部での教育の格差を是正し、教育の質を確保して、知徳体のバランスの取れたグローバルな児童・生徒を育成しようとする意図が読み取れた。

視点を内に向けるのではなく、外つまり諸外国に向けることで中国の教育の質を高めようとしている。我々も中国のよさや特徴を学び、より一層の中の友好発展と互いの教育の質の向上に結びつけていく必要があると考える。

貴州省教育庁

[貴州省貴陽市] 5月 20 日(火)

貴州省では、貴州省副庁長の楊勇(YANG Yong) 氏より、貴州省の教育と最新の中国の教育政策などの説明があった。併せて、その背景となる貴州省の歴史・文化・地方の特色についても詳しい説明が加えられた。

1. 貵州省教育庁あいさつ(紹介)

副庁長楊勇氏、他 8 名

2. 日本側のあいさつ(団長)

日本教職員訪問団長の坂本氏が貴州省教育庁に対し、歓迎と心くばりに対するお礼と、訪問に對しての抱負を述べた。

・空港への出迎え

・学校訪問設定

・貴州省料理の招待、演舞鑑賞等の企画

* 貵州省で学びたいこと

・中国の教育制度

・子供たちや教師との交流

・中国の歴史、自然

・訪問後も交流を続けたい

3. 貴州省紹介ビデオ鑑賞(15 分)

・自然、文化、歴史を織り交ぜた紹介ビデオ

4. 副庁長あいさつ

日中両国の交流は千年以上前から続いている、大きな成果をあげている。貴州省にとって日本からの使節団を受け入れることは大変光栄である。

このプロジェクトは貧しい子供たちをかかえるアジア諸国にとって有意義であり、教育分野の交流に留まらず、国と国との交流へと発展するものである。

現在中国は義務教育(特別支援を含む)においてほとんどの子供が見合った教育を受けている。しかしながら農村部における教師の質についての問題を抱えている。日本の教育の質の向上が今回の経済発展に寄付していることは自明であり、中国も今後教師の質の向上を目指していきたい。このプロジェクトを通して日本の教師の優れた技術を中国に伝えて貢うことも願っている。貴州省の自然に触れ、交流を楽しんでほしい。

5. 中国教育部王禹耕氏より

中国教育部を代表して、貴州省の教育への取り組みへのお礼とこのプロジェクトの成功を願う挨拶を行う。

6. 質疑

Q. 中高における第二外国語(日本語教育)について

A. 貴州省では第二外国語はイタリア語となる。一校だけ日本語を教えている学校がある。

Q. 貴州省の自然、文化を守るための教育について

A. 貴州省の自然の素晴らしさを世界に広めるとともに、小さいころから国際感覚を身につけさせるために外国語活動を取り入れている。

Q. 貴州省と交流するための窓口は?

A. 私たち(貴州省教育厅)へ連絡下さい。

Q. 貴州省の義務教育の重要点施策は?

A. 農村部の人材育成。日本のアドバイスや協力を希望する。

(相浦太)

《参加者の感想》

中司 康彦……………貴州省教育厅を訪問し、貴州省の教育について次のような説明があった。「①このプログラムは貴州省の教育にとっても有意義であること」「②貴州省は最近、経済が急速に発展し、貧困地域の子ども達も平等に教育を受けることができるようになったこと」「③10 年間の義務教育に向け努力を続けていること」などである。また、貴州省の教育の課題についても話を聞くことができた。教育の質のバランスが非常に悪いことである。それは、都市部と農村部の子ども達の学力差もあるが、教師の質の差が深刻なのだ。後者は都市部と農村部の教師の交流で解決しようとしているが、抜本的な解決策にはなっていないようだ。さらにこの課題解決に向けて、日本人のボランティア活動を期待していると言われていたが、第二外国語で日本語を選択している学校は一か所のみであり、貴州省の学校と日本の学校との交流にはいくつもの障害がありそうだ。

高橋 篤……………義務教育の充実のために、2014年に10年制、2020年までに15年制への延長を実行すべく、計画を進めている点が印象的であった。貴州省は非常に大きい省であり、農村部と都市部の格差が問題となっているが、この

点についても ICT 機器を活用し、農村部の教師不足を解消する試みを行うなど、中国が直面する教育格差の是正に努力していた。ICT 機器の活用についてでは、大画面のモニターや、ソフトなどが充実している学校とそうでない学校があり、テレビ会議システムなどの導入を行い、サテライト式の授業や、研修を行うことにより、農村部の教師不足や特定の教科の教師不足の解消につなげることができると考える。

吉井 進……………中国教育部の教育施策を受け、貴州省ではどのような教育施策で児童・生徒を育成しようとしているのかが、関心となつた。事前に調べたところでは、中国唯一の内陸省で、人口 4200 万人。そのうち 30 以上の少数民族が 40% を占めている。基礎教育も全国と比べて遅れているとのこと。

貴州省教育厅副所長からの説明では、9 年間の義務教育は整ったが、都市部と農村部で同じ教育ができるように努力していること。そのため、都市部と農村部で教員の交流人事を進めるとともに、研修も進めていること。また、日本の教育水準は高い。貧困地域の教員へ日本のよさを伝えてほしいとも発言された。貴州省の課題解決に向けての意欲を感じ取れた。

山田 枝里子……………日本と中国は 1000 年以上の教育交流があるので、今後教育の交流だけではなく、国と国の交流や世界平和にも貢献していきたいという言葉が印象に残つた。そのように中国側が思ってくれていると分かり嬉しく思い、今後中国との学校交流をはじめる上での手がかりになるのではないかと思う。

貴州は外の文化を知りたいと考えており、また、貴州の素晴らしい文化を外の世界に紹介し、素晴らしい景色は世界の「みんなのもの」という認識にしたいと教育庁からの見解が述べられた。積極的に交流しようとする姿勢は見習うべきものであると思った。日本の素晴らしいものを世界でシェアしようという考え方方が今までなかったので、この考え方で、日本の何を世界の「みんなのもの」にしたいか考えていきたい。

3.

学校訪問

北京市趙登禹学校
貴陽市盲聾啞学校
貴陽市実験小学
貴陽市花溪青岩小学
北京師範大学貴陽市附属中学
貴陽市第一中学

北京市趙登禹学校 (小中一貫校)

[北京市] 5月 19日(月)

学校長:徐唯 (XU Wei)

設立年: 1951 年年創立

児童・生徒数: 約 2,160 名 / 教員数: 約 214 名

北京市にある九年制一貫学校である。2008 年からは北京市教育委員会認定の「芸術特長校」となり、京劇を学校教育に導入する実験校となった。特に芸術面で積極的に活動しており、世界大会に参加するなど積極的に国際化を目指している。

1.児童、生徒による演出(発表)

- ①舞踊(小学生女子) ②合唱(中学生) ③フルート(小学生独奏、赤とんぼ) ④舞踊(中学生) 雨竹林
- ⑤独唱(小学生) ⑥二胡演奏(中学生) ⑦金管アンサンブル(小学生) 鉄腕アトム ⑧古琴演奏(中学生)
- ⑨ダンス(中学生) ⑩合唱(小学校) 浜辺の歌
- ⑪齊唱(小学生 + 中学生…日本に行ったことのある) 幸せなら手をたたこう(日本語)

2.日本教員齊唱 ふるさと、まつり花(中国語)

3.記念撮影

4.学校紹介、教育内容プレゼン(校長徐唯氏)

・学校の位置、キャンパスの概要紹介

・学校の歴史、規模(生徒数、教員数)

・育成目標 「一人ずつに全面的な教育をし、能力を發揮させる」

・施設紹介 図書室、音楽室、科学教室、物理、生物室、PC 室、地理教室、レクチャールーム(ホール)

・芸術教育に特徴のある実験校で、学校に対する評価では数々の高評価を受けている。

・生徒の一日の生活

8 時に始業し、1 単位時間 45 分の授業を午前中 4 コマ、午後 3 コマ行う。

08:00 始業、朝会

・午前:全校体操 目の保護のためのエクササイズ

12:00 休憩、昼食

13:30 午後授業開始

15:30 部活(課外活動)

・興味のあることについての特別なプログラム(School Based Course)が 28 用意されている。

(スポーツ、芸術、科学など)実践を含めたものもあるこのプログラムが本校の大きな特色

・スポーツについては大きな成果をあげている

・成績について、学力の向上が大切と考えている。中 3 の生徒の進学実績がとても良い。半分以上が良い高校に入っている。

様々な活動への取り組み

・文化活動…防災教育、ボランティア活動など

・ボランティア・バザーをして、その収入をあまり裕福でない学校に寄付している。

・学校外でのボランティア。駅での安全活動。老人施設への訪問。

・異文化教育…中国と海外の休日を利用したイベントなど。

社会実践活動

・法律教育。模擬裁判など

・世界文化遺産の発掘への参加。愛国心の養成。

・グループ別学習。文化財についてそれぞれのテーマにしたがって調べたり、インタビューしたりしてその成果を発表しあう

・博物館学習、自然体験

・修学旅行(上海、蘇州、杭州へ)

・科学技術に関する教育

・初步的技術を学ぶ

・外部の専門家による講座

・コンテストへの参加など

・芸術教育

・様々な発表会への参加

・年に一度の芸術祭あり

国際交流

・ドイツ、アメリカ、日本などに生徒がいっている

・アメリカ、オランダ、ベトナム、マレーシアなどから
の訪中国を受け入れている

・今年はじめに日本へいっている

5. 質疑

- Q. ランチルームがあつたが昼食のとり方は？
A. 給食
- Q. 課外活動のやり方は？指導者は？
A. 3:30～クラブは週に1回のみ。スポーツ活動は別に行っている。指導は本校教師、非常勤講師等。
- Q. 一人ひとりの興味関心を伸ばすことと学習意欲との関係はどうか？
A. 28の様々なプログラムが子どもの授業以外の補修（もっとやりたい部分）になっている。授業では音楽は2時間だが、もっとやりたい子は課外で選んでいる
- Q. 海外の学校との交流について、その期間や内容、方法、コミュニケーションのとり方など？
A. 提携校とは長期的に交流しており、1、2年で終わるというものではない。生徒は訪問先では家庭にホームステイし、その後もEメールなどで交流している。教師を派遣して交流することもある。中国語教育に1名派遣、大学で学ぶ（4～5名等）。

6. 校内見学

音楽室、美術室、技術室、PC室、校庭（グラウンド）、一般教室、ホール等。

（中村昌子）

《参加者の感想》

彦坂 秀樹今まで、中国の教育は、能力のある子を画一的に指導しているイメージがあつたが、子どもの興味関心を追究できる時間をしっかりと保障していることに驚きをもつた。子ども達の歌、演奏、踊りの発表を見学した。その技能・能力の高さにすばらしさを感じただけでなく、歌を歌う前の子どもたちの自信に満ちた顔、演奏を終えた時の満足感溢れる顔、踊り一つ一つのオリジナリティに感銘を受けた。これは、単に技能・能力が優れているという「教育の質の向上」ではなく、子ども達の興味関心を大事にした上での「質の向上」に力を入れているからこそ、伝わってくる子ども達の姿なのだろう。このカリキュラムは、スタンダードなカリキュラムではなく、北京市教育委員会の許可によるこの学校独自のカリキュラムのようである。日本も子ども達の興味関心を中心としたカリキュラムは、ごく少数しかみられない。両国にこのような実践・カリキュラムが広げていけるよう、現場で実践を積み重ねていくことが大切であると痛感した。

廣松 隆広子ども達のパフォーマンスが大変すばらしかった。海外との交流による異文化理解の教育や、子どもの興味・関心に応じた28の課外学習を通じた、専門性を高めるプログラムに取り組まれており、見習うべき部分の多い学校であった。

石橋 明子最初の訪問校でもあり、その歓迎ぶりに感激した。歌や踊り、楽器の演奏などどれも見事なものであった。日本から来た私たちのために、ずいぶんと時間や労力をかけて準備をしてくださったのだろうなど、訪問校の先生、生徒の皆さんに感謝する気持ちでいっぱいであった。これは、それ以外の学校に対しても同様である。日中友好を支える温かい気持ちを強く感じた。

坂本 智典低学年の児童から高学年の中学生まで、自国・自校の誇りをもって合唱や演奏、演舞等を披露しており、教育活動の充実が伺えた。それと同時に、外国との交流も推進しており、国際交流のレベルの高さと幅広さにも驚きを感じた。

学校長のリーダーシップと教職員相互の連携、協働実践の重要性を改めて感じた。

相浦 太訪問前に中国の小中学校について膨らませたイメージが、実際に訪問してみて全く間違いであることがわかった。まず驚愕したのが、充実した学校設備環境である。日本の学校にはない電光掲示板や巨大スクリーン、子どもたちの煌びやかな衣装、広大な敷地にある全天候型のグラウンド。そのどれもが、日本の設備を凌駕していた。それにも増して驚嘆したのは、子どもたちの表現力の高さである。大勢の前でも堂々と演技する子どもたちの姿に目を奪われ、ただただ感激した。日本からの使節団への歓迎の意を、歌や踊りをとおして表現していることが十分伝わった。二胡の素晴らしい演奏をした男の子とすれ違う際、「Excellent！」という言葉を送ったところ「Thank you！」とうれしそうな表情が返ってきた。この子達が未来の中国を支えていくのだと感じた。

日本の子どもたちはどうだろうか。あれほど個性を輝かせて生きているだろうか。日本の教育について考えさせられた。

秋山 满代歓迎式典の演奏や演舞は、どれもすばらしく、私たちを歓迎してくれている

ことを直に感じることができ、感動した。舞い踊る小学生たちや英語の歌を合唱する中学生たちの表情は、皆生き生きしていた。特に二胡を独奏した中学生は優れた技術を習得しており、見事だった。それぞれの個性を伸ばす教育が行われていることを実感させられた。

趙登禹学校は小中一貫学校で、三つのキャンパスを持つ。訪問したのは、そのうちの一つ、中学部であった。校舎内をまわると、各教室から歌声が聞こえてきた。生徒主導の下、クラス全員が起立し、簡単な振りをつけて歌っていた。その声の大きさ、真剣さに、圧倒された。日本の中学生が果たしてここまでできるだろうか？と考えさせられた。

濱方 弥生 進んだ教育をしており、教師の質も高い。海外との交流もあり、優秀な人材がそろっていると感じた。そのため、児童の活動についても、中国の伝統文化だけでなく、欧米の文化を取り入れた非常に幅広いもので、質の高さが伺えた。学校は、とにかく規模が大きく、児童・生徒数にしても教員数にしても、桁が違った。いろいろ話を伺う中で、午前と午後に1回ずつ目の体操を行うことや、午前に30分程度全校体育を行うこと等を聞き、子ども達の健康面に配慮したカリキュラムが組まれていると感じた。また、午前に4コマ、午後に3コマ授業を行っていて、日本よりも確実に勉強していることが分かった。

井上 岳 特徴的だったのは、「眼保健操」という目の健康を目的とした体操(Eye Exercises)が1日2回行われていること。小学校で水泳を取り入れている他、女子サッカー、陸上競技等で各種大会へ参加するなど体育にも力を入れている学校であった。部活動が28種類(文化、芸術、科学、スポーツ等)あり、放課後に行っている。

その他、座学だけでなく社会実践学習を行っている点は、日本の総合的学習の時間に近いと感じた。

ICT環境が整っており、普通教室には壁吊プロジェクターとコンピュータが常設されていた。課題等を大きく映して提示する授業スタイルが日常のようだ。

川本 静 芸術特長校と言われるだけあって歌、踊り、演奏、どれをとっても圧巻であった。子どもたちの自信溢れる表情や声の大きさ、テキパキとした行動がとにかく印象的であった。「児童や生徒、そして何より教師一人一人も自分の能力をさらに

発展させ、發揮していくなければならない」という学校の考え方にも感銘を受けた。また、28種類もの独自の教育課程の中から、自分がもっと学びたいと思うものを選び、さらに理解を深めていくというシステムも興味深かった。子どもたちのもっと学びたいという意欲につながると思った。

北谷 美希 「芸術特長校」の名の通り、子どもたちの個性に合わせて多種多様な芸術教育を推進している学校として深く印象に残った。小学生から中学生まで、その発達段階に応じた演目が披露されたが、どれも完成度が高く、中国の子どもたちの表現力の高さに驚いた。特に、中学生男子による二胡の演奏がすばらしかった。技術面に加え、表情も豊かで、日本の子どもたちに見られるような恥じらいではなく、堂々としたパフォーマンスであった。文化行事を通して道徳教育を進めているという中国教育部の説明にあつた通り、伝統芸能の継承、技能の習得というだけでなく、人間教育の大きな柱として芸術を取り入れ、子どもたちの個性を發揮させていた。また、電光掲示板やホールなど、設備も充実しており、日本よりも進んでいると感じた。また、放課後のグラウンドでの子どもたちの様子を見学させてもらったが、女子生徒が2名、笑顔で「おはようございます。」と話しかけてくれた。好奇心旺盛で、素直な子どもの姿はどこの国でも変わらないと感じた。

光行 泰子 最初の訪問校だったこともあり、設備の充実と生徒の表現力の高さに驚いた。また、小中学校段階で海外姉妹校への訪問が行われていたこと、3キャンパス編成の学校規模の大きさなど、予想外のことばかりであった。

森川 直美 ステージでの多数の発表からスタートした訪問であった。本校は、「北京市教育委員会」の許可により「芸術特長校」となっている。一つ一つの発表内容の質の高さには驚かされた。訪問受入れのために練習してきたものではなく、日頃から練習をしてきているものを披露したことだった。中でも、ダンスについては、衣装や化粧、子どもの取り組む姿勢に、なかなか日本の学校では見ることがないすばらしさを感じた。また、子どもたちのコミュニケーション力や説明力の高さを感じた。

村田 聖子 自由に校内を見て回る

ことができる時間があり、要望をすると参加者のニーズに応じて校内を案内してもらえてよかったです。コースが決められて回る学校は紹介される特別教室などが似通っていたので、希望する部屋を案内してもらえ、またそれに応じた説明を聞くことができてよかったです。

桜井 英子 ······ 昼食を含む休憩時間が 90 分あると聞きゆとりを持って子どもたちが学習している印象を受けた。年二回のスポーツ大会、文化祭、芸術教育にも早期から取り組み、子どもの持っている力を引き出すのに一役買っていた。充実した施設、職員室に感心した。

高橋 篤 ······ 学校の教育目標の実現に向けて、通常の北京市のカリキュラムに加え、博物館や、ボランティア活動、模擬法廷、バザーなどといった体験的な活動を多く取り入れ、事後に活かしている点が魅力的であった。214 名の教員について、この学校への異動後に、学校の特色や他校との違いを確認したり、校種による違いを把握し、お互いのよさを取り入れていこうとしたりするといった研修を充実させていることは、日本的小中一貫校でも取り入れていくことができると考える。

星野 和江 ······ 「芸術特長校」として、歓迎会では、児童や生徒の踊りや合唱、演奏などを披露してくれ、どれも質が高く素晴らしいものであった。一人ずつの能力や創造力を發揮させることを目標に教育していることが理解できた。児童や生徒の発表は、2012 年から世界音楽教育大会に参加していくことも頷ける見事な演奏であった。児童や生徒のひた向きな姿や自信に満ち溢れた意欲的な姿に日頃の教育の成果を見ることができ、感銘を受けた。

松山 美彦 ······ 小・中一貫校であったが、キャンパスが小学 1 年～3 年、4 年～6 年、中学 1 年から 3 年の 3 つに分かれているということに先ず驚いた。歓迎セレモニーでの児童、生徒による合唱や楽器の演奏をとおして芸術教育の充実ぶりを目の当たりにした。放課後の課外活動も盛んなようで選択できる内容が 28 もあるということであった。何よりも子どもたちから私たちを歓迎する好意的な気持ちが伝わったことが嬉しかった。

西山 啓子 ······ 踊りや芸術面での発表

のすばらしさに感動した。合唱、独唱、二胡の独奏の音色が美しく響き渡っていた。一人ひとりの表情が豊かで、音楽と技術と心が調和された演奏ばかりであった。聴かせて頂き、心が豊かに広がっていくのを感じた。「赤とんぼ」「浜辺の歌」を聴いて、情景が浮かび、心地よい気持ちになった。「ふるさと」と「まつり花」のピアノ伴奏をさせて頂き、思い出に残る貴重な経験となつた。世界音楽教育大会で音楽披露もされ、芸術活動でも国際的な発表を目指し、積極的に活動されていることが伝わってきた。校長先生からの教育内容の説明で学校の様子がよくわかった。各階のフロアが広く、音楽や科学というテーマに合った図書の本、クラシックの演奏、天体や各国の国旗が興味深く掲示しており、とても学ぶ意欲が高まる空間だった。学校内の教育施設がとてもすばらしかった。

野村 健太郎 ······ 近年、日本でもさかんにいわれている小中一貫校で、とても興味深かつた。芸術重点校という点からも、中国では日本のように特色ある教育が求められているように思えたが、教育の目的はあくまでも生徒の持つ潜在能力を開花させるという、地に足の着いた考えには好感が持てた。会場ではたくさんの歓迎プログラムが用意されていて、踊りや歌など 10 を超える発表にくぎ付けになった。芸術という日本の感覚とは少し違う「芸」の披露を重んじているようで、どの発表も小学生や中学生とは思えないほどの完成度の高さであった。

大田 孝 ······ 芸術鑑賞をさせてもらい大変によかった。生徒達は堂々と演技している姿はとてもすばらしいものであった。

伝統楽器の演奏も心に残った。数分であるが生徒と会話することができた。「初めまして」「よろしく」と日本語でいさつのできる生徒と出会い、言葉が通じた時の笑顔がすばらしかった。話しかけるときはとても勇気がいったことであろう。

これからは、少しでも多くの外国語に触れながら交流を深めていきたいと思った。

大塚 基嗣 ······ 中国全体の印象にも通じるのですが、大きい!多い!!広い!!! 小学部だけで 42 クラス、およそ 60 人の児童が教室のなかで規律を守り学習に取り組んでいる。ICT や科学、芸術分野の特別教室のハードの充実はもとより、相談室を設けるなど心の教育にも取り組んでいることがよくわかった。

澤田 美樹 小中一貫校である北京市趙登禹学校では、芸術教育に力を注いでおり、その生徒たちによる多彩な歓迎の演目にただひたすら驚きを覚えた。生徒たちがここまで技能を習得するためには、教員の方々の生徒の個性を伸ばそうとする気概を感じた。また、日本の曲を演奏してもらい、そこに歓迎の気持ちが感じられ、大変嬉しく思った。日本でも、生徒が興味・関心を持てる分野の才能を伸ばし、自分たちの国の伝統や文化を伝承できる教育が必要だと強く感じた。

友田 傑司 热烈歓迎！まさにこの言葉につきる。訪問してすぐに、子どもたちの舞踊や合唱、フルート演奏、二胡の演奏、ダンスなどで私たちを迎えてくださった。最初の訪問学校で少し緊張していた私たちも緊張が取れ、和やかな雰囲気となつた。校長先生の学校の概要説明では、児童生徒数 2160 名、教職員 214 名、小学部 42 クラス、中学部 24 クラスと日本と比べられない程の大きな学校であることに驚くこととなった。特に「一人ずつに全面的な教育を行い、能力を発揮させる」という教育目標の下、学力と能力の向上を図ることで、学校の評価も高くなっているということであった。興味深いのは、部活動（課外活動）であり、28 のプログラムが用意され、スポーツなど大きな成果をあげており、歓迎の舞踊や演奏などもその部活動のことであった。また、国際交流にも力を入れており、ドイツやアメリカ、日本への留学、アメリカ、オランダ、ベトナム、マレーシアからの留学生の受け入れ、教職員のイギリス研修など視点を世界に向けた取組が充実していると感じた。子どもたちとの交流の時間はほとんどなかつたが、部活動の中で、流行の歌を歌っていたり、グラウンドでサッカーをしていたりしている姿は、日本の子どもたちと一緒にいた。

貴陽市盲聾啞学校 (特別支援学校) [貴州省貴陽市] 5月20日(火)

学校長:但琪琳(DAN Qilin)
設立年:1967 年
児童・生徒数:約 292 名 / 教員数:85 名

耳の不自由な学生と目の不自由な学生のための、就学前教育・義務教育・職業教育を提供している

十五年一貫制の寄宿制の特別支援学校である。文化知識のほか、労働技能の育成も重んじている。服装デザイン・工芸美術・調理・鍼灸按摩・美容とネイリストなどのコースがあり、企業と連携して、専門技術のある人材を提供している。生徒たちが障害者として「社会進出」・「生存発展」・「社会貢献」・「生まれてきた自身の命の価値感を創造する」ための支援と教育を提供している。

楊校長から学校概要について説明を受ける。

注意事項の説明、生徒たちの顔を写さないことを参加者全員に説明

学校の特色として、全寮制であることが説明される。

学校校舎内を見学

- ・食堂…食堂には2つの窓口がある。左の窓口は視覚障害者用であり、右の窓口は聴覚障害者用となっている。テーブルや椅子が整然と並べられていた。思った程、広くない感じだった。

- ・料理教室…聴覚障害者の生徒たちが主に調理を勉強。先生も聴覚障害者の一人であり、調理師の有資格者である。生徒達はここで 2 年間学び、中華料理の作り方を学ぶ。その後、調理師の資格を取得し、その分野に就職している。

- ・学生棟寮見学…聴覚障害者が 1、2 階、視覚障害者が 3、4 階となっている。今回は、1 階の男子生徒の部屋と 4 階の女子生徒の部屋を見学。部屋はいずれも 4 人部屋となっていて、ぐつは全部自分達で整然と並べており、整理整頓されていた。4 階の壁には絵が描かれており、自分たちで描いたものであるとのこと。意図的に視覚障害者にとって難しい 3、4 階に部屋があるのは、社会に出た時のことを考えて行われているといふ。

- ・総合ビル…職業訓練のためにいろいろな部屋が設置されたビルである。下の階には美術室がある。小、中、高等部の生徒達の作品が展示。中国風の絵、水墨画などが見られた。そのとなりには写真の展示。子どもたちが自分で撮ったもの、CG を使って作った写真の展示も見られた。聴覚障害者の生徒のみによるもので、弱視の生徒は色を並べることを行ったりする。貴州の能面をモチーフにした作品や大学入試に向けた作品も展示されていた。80%の生徒が特別な大学に進学。就職もあるが、進学が多い。調理師以外では、工芸品の工場に入社して活躍する子もいる。絵を描き続ける生徒が多い。また広告会社に入ってからの印刷機の訓練を中2より始める。中学生は週2コマ、高校生は週 6 コマの学習を行っている。壁には「技

術は人間の生きる源」という文字が見られた。

- ・図書館…以前、視覚障害者専用の図書館があつたが、閉館して、普通の図書館となっている。
- ・按摩室…マッサージを勉強する教室。この技術を身につけたら生活できる。また会社を設立して、金持ちになる子もいるとのこと。ここを出た生徒たちは人気がある。週4コマ授業がある。5人の参加者がマッサージを体験。
- ・視覚訓練室…中国の伝統的な楽器があり、弱視の子たちの訓練に使われている。
- ・楽器室
- ・聾者撮影室…掲示がピンインの点字で表記
- ・心理カウンセラー室
- ・コンピュータ室…20台のPCは古いもので、20台のPCは新しいものが導入されている。
- ・聴覚障害者の子どもたちの授業見学
- ・ダンス室…高校生約20名によるダンスを見学。彼女たちは耳がきこえないため、指示は床をたたくことで出す。お互いに手話による合図で動いている。リズムがよく、教師がリズムよく鏡の前で行って指示を出していた。中国の音楽に合わせて先生も楽しそうに行っていた。とても素晴らしい先生自身もこの学校の卒業生。
- ・ミシンの教室…子どもたちが自ら作った作品を展示。主に中学生がここで勉強。またバザーで作品を販売して、その利益を材料費に充てている。

全体会

学校案内を配布。校長による学校紹介。

訪問団によるあいさつ。子どもたちが社会に出て生きていける教育に感動した。

障害があつても訓練でそれを乗り越えている生徒たちに感動した。

記念品交換、記念撮影

(佐々木郁夫)

《参加者の感想》

堀 亜希子…壁に書かれた「技能是人的生存之本！(技能は人の生存の源である)」が印象的だった。卒業後を見据えた職業教育と、その目的をきちんと生徒に伝えようとする先生方の姿勢は素晴らしい。

就学前教育の実践や企業との連携等、学校の特色がよく出ていた。また、生徒の作品を見学し、芸術性の高さに驚いた。

整理整頓された寄宿舎も見学でき、日常の生活に

も教育が行き届いていることがよくわかった。

町田 恵理子…子どもが手に職をつけさせ、個性を伸ばして生きていけるような様々な授業が設定されていたことが印象に残った。盲目の生徒がマッサージの技術を身につける授業では、実際に訪問団に施術体験をした。また、耳が聞こえない生徒に対する先生方の教え方にも興味を持った。振動や身振り手振りにしたがって、一糸乱れず自信を持った表情で踊る生徒の表情に魅了された。出会った生徒の表情はみな生き生きとしており、日々の学校生活で自信をつけているのだと感じた。また、生徒が生活をする施設は思っていたより段差なども多かった。そのような環境の中で生活しているからこそ、卒業後社会でたくましく生きる力が身につくのだと思った。

中村昌子…障害をもつ生徒たちが、将来の自立のために真剣に学んでいる姿に心を打たれた。マッサージを指導されている先生の自信に満ちあふれたお話ぶり、そして生徒さんたちからのマッサージの実演。また特別な設備(バリアフリーなどのような)のない寮で、当たり前に生活する力を身に付けさせようとしている学校の姿勢に大変感銘を受けた。貴陽市教育局の直属の管理下での15年一貫制のカリキュラムを実現していることは大いに学ぶ点であった。また特別支援教育における職業教育に対して、企業と連携し社会人となっている障害者にも職業教育と就職の機会を提供している点は、日本でのキャリア教育にも参考になることだと感じた。

坂本 智典…身体に障害を持つ児童生徒が、今どんな力を付けるとよいか、また一人一人の障害の程度に応じた、より実践的な教育活動が実施されおり、とても参考になった。

校長として、児童生徒の社会での自立に向け、地域社会の特質に応じ柔軟な学校経営の重要性を学ぶことができた。

谷口 和弘…職業教育を中心とした教育課程で、日本における盲学校・聾学校とほぼ同じ目的(社会参加)に向けて学習が行われていたようだ。視覚障害者向けの按摩・針・きゅう師養成に関しては、実際に実習の場面をみることができ、日中の視覚障害者の職域の共通性を確認できた。

一方、聴覚障害者の職域には、文化の違いを感じ

るものがあった。中国固有の食文化を基礎とした調理師養成のコースや、中国の伝統工芸の基礎コースなどがあり、中国における聴覚障害者の社会参加の現状がわかった。しかし、日本においては盲聾教育においても、大学進学等のニーズが強くなってきており、教科教育を中心とした教育課程を採用する学校も多い。そのような課題は中国では聞かれず、視覚聴覚障害者の社会参加の範囲はまだ狭いのだろうと感じた。

新井 崇矩 美術工芸分野や按摩などの技術の習得に重点を置いていた学校であった。驚いたことは、視覚障害をもつ生徒の教室が校舎の3.4階にあるという点だ。貴陽市は、町全体としてバリアフリー化が進んでいない。そのため、学校の中でも、あえて階段を昇り降りする機会を多くすることで、生徒が自立できるようにしているそうだ。按摩は教員の指導のもと、実習が行われていた。実習で習得した技能は、貴陽市やほかの地域にある按摩店で活かされることがわかる。実際、貴陽市自体、按摩店が多くあるように感じた。

濱方 弥生 障害をもっている子ども達に対して、優しい環境を作るのではなく、学校卒業後に困らないよう、敢えて一般社会と同様な厳しい環境の中で教育することにより、自立への道を歩ませていた。学校は、幼稚園から高等学校までが一緒になっていて、しかも、盲と聾が一緒の学校で、どのようにカリキュラムを組んでいるのかと不思議であったが、この学校の卒業生だったり、同じ障害をもった教員が大勢いたりなどして、それぞれの障害に応じた授業が整然と行われていた。将来は、8割が大学に進学し、確実に皆、就職していると聞き、キャリア教育が進んでいることを実感した。

浜中 真希 生徒は寮生活を通して、ハンディがあっても社会に出たときに困らないように生活を行っていた。例えば、3.4階に視覚障害者の部屋をおくことにより、日々の生活の訓練も兼ねるようになっていた。共生という視点での生活は大変有益だと感じた。

また、それに向けた学校のカリキュラムも編成されていた。例えば、料理教室やミシン室、あんま室などを活用し職業人として自立することができる確かな技術を得るために実践が行われていた。

このように計画的に将来を見通したプログラムにより、生徒は目標を持ち、生き生きと学んでいることが大変印象的であった。

大西 敏之 特別な支援を要する人たちに対し、バリアフリーな社会を築くことは大切であるが、教育においてはそのことを前提にするのではなく、実社会に即した教育が大事であることを再認識できた。貴陽市盲聾啞学校では、子どもたちが社会に出た時のことを考え、あえてバリアフリーにしていなかった。また、労働技能の育成においても、実社会で即戦力になるように、機材等を多数用意し、指導をされていたことが印象的であった。

山 理武和 まず目に付いたのがグラウンドでの体育の授業であった。学年が違ったのかかもしれないがバスケットボールとバドミントンの授業が行われていて、とても活気があり、楽しんでいる姿が印象的だった。教室等の施設見学をしていると、針灸按摩の授業が行われていて、そこで生徒が夢を語り、技能を身に付けていた。生徒の障がいや進路に応じた細やかな職業教育が行われていて、先生方の生徒への姿勢や教育カリキュラムについて学ぶことができた。

山名 和樹 施設の充実も感銘を受けたが、何よりも、障害を持つ人に生きる力を身につけさせ、独力で一生涯生活できる技術を教えることは大事なことだと感じた。日本の障害者教育は、守るというよりも囲うという面が強いのではないかと改めて考えさせられ、障害者の生きる可能性を奪っているのではないかと感じさせる学校訪問であった。

樋上 睿夫 障害児童一人ひとりを大事にし、社会に出てもたくましく生きていけるように個に応じた技術を身につけさせる教育を熱心に行っているところに感動した。日本にいても、特別支援学校を訪問し、授業等を観る機会があまりない。そんな中で、いきいきとダンスや歌を一生懸命に習っている子どもたちの姿が印象的であった。作曲・作詞を先生自らが行い、教材として活かしているところも参考になった。

宮地 溫美 「職業教育」を中心とした教育方針に魅力を感じた。自分の手に職を付ける

ことで、社会で生き抜いていく力を身に付けています。社会貢献に繋がる。子どもたちの自信にも繋がっていると思う。自分自身の価値を考えることのできる教育が提供されている。

櫻井 英子…………先生方の熱心な指導に感心した。視覚障害者に作詞作曲した歌を歌わせていたり、聴覚障害者にダンスを教えていたりしていた。特にダンスの授業では、先生の大きな振り、大きく足踏みをして、振動で伝える、壁一面の鏡など、生徒が一人一人生き生きとしていた。

高橋 篤…………盲・聾啞者の卒業後の就労を第一の目標に掲げ、幼稚園段階から一貫してマッサージや絵画など様々な資格や技術を得るような指導を行っていることは、日本の特別支援教育には見られない一面であった。また、社会に出てからの本人の余暇活動や、友人関係の構築が日本では課題となっているが、この学校では、ダンスやバスケットボールなど、一人ひとりの意向や特性を踏まえて取り組み、活動の機会を確保していることが大変参考になった。

山田 忠弘…………特別支援学校の生徒の活動を実際に見るのは初めてだった。視覚障害の生徒たちの按摩の授業と、聴覚障害の生徒たちのダンスの授業、ともに生徒たちの目が輝いていて楽しそうだったのが印象的だった。自分の勤務する筑波大学附属学校グループにも各種特別支援学校があるので、今後何らかの形で関わいたら良いと思った。

秋山 誠…………盲聾学校も町中にある。15分程度で到着した。盲聾学校の生徒は全校で294人いて、教員は85名いる。最初に聾学校の工作室に行き、児童・生徒の作品を見学した。どれも素晴らしい作品が多くいた。次にいろいろな特別教室を見て回った。途中聾学校の小学部4年生の音楽の授業をみせてもらった。担任の先生が作詞・作曲した歌を大きな声でのびのびと歌っているのに驚いた。たった5人程度だったが、みんな大きな声で歌い、教室いっぱいに歌声が響いていた。非常に感動した。次に盲学校の中を視察した。盲学校の生徒の多くは、あんま士になるということを聞き、その訓練をしているということだった。数名の先生が実際に先生や生徒に肩をもんでもらった。視覚障害があつても少しは見える子ど

もの機能訓練場を見学した。いろいろな色の光が上下に動いたり、広がったりする施設だった。教職員で考えて作成したということだったが、どこの国でも試行錯誤しながら子どものことを考え頑張っている姿がうれしかった。

その後、聾学校の中等部の体育の授業を見学した。女の子約20名がダンスを披露してくれたが、みんな音が聞こえていないとは思えないほど音楽に合わせてリズムよく踊れていることに驚いた。さらにどの子も笑顔いっぱいに生き生きと体育の授業に参加し、踊っていることにびっくりした。校訓に「超越自我」とあつたが、聞こえないというハンディなど微塵も感じさせない立ち振る舞いにこの学校の取組の素晴らしさを感じた。講堂で校長先生から学校について説明を受け、運動場で記念撮影をした。運動場では大人や高校生が混じってバスケットボールに興じていた。みんな楽しそうにプレーしていた。きっと寄宿舎に住んでいる子たちだろうと思う。

本間 洋一郎…………今まで日本でも盲学校や聾学校を訪問したことがなかったが、耳の聞こえない生徒は高い集中力を活かして絵画や手芸などの才能を磨き、目の見えない生徒は聴覚や触覚の敏感さを活かして指圧や楽器の調律などの才能を磨くなど、一人ひとりの特性に合わせて、社会的自立ができるレベルまで力を高めている教育実践に感銘を受けた。

堀川 利洋…………教育カリキュラムは、生徒自身が自立するためを考えて計画されており、生徒も教師も真剣にそして全力で取り組んでいる姿に感銘を受けた。授業についてお話を聞いていく中で、整体を指導されている先生が「学校を卒業すれば自らの手で人生を切り開いていかなければならない。手に職を持つことは未来開拓の一つである」とコメントされた言葉が頭から離れず、以降の授業見学箇所では、子どもたちや教師の真剣さに改めて胸を打たれた。

特殊学校といった先入観で、施設はバリアフリーがある程度整っていると思った。が、ドアサッシ等足元でつまずくことがあった。「必ずしも世の中がバリアフリーとは限らない。(外に出てもバリアフリーといった設備はこれから整えていくといった印象を持った)」といったメッセージを子どもたちなりに感じながら、自分自身で生活をしていく準備をしていることを感じた。

松山 美彦…………全寮制の学校で希望すれば幼児から 15 年間、一貫した教育を受けることができるということに驚いた。また施設は児童、生徒のそれぞれの状況に応じた配慮がなされていた。「子どもたちが社会に出て生き抜いていける力」の育成に全力を注ぎ、子どもたちも必死に勉強していた。按摩の授業、ダンスの授業を見学した。先生はともに卒業生だということであり、その熱心さが伝わってきた。ダンスは女の子だけ、20 人程度が取り組んでいたが、その表情の豊かさ、ダンスをしていることの喜びが伝わり感動した。

西山 啓子…………校舎内には、図書室、按摩室、音楽室、美術室、コンピュータ室等たくさんの職業訓練のための教室があった。心理カウンセラ室も設置してあった。一人ひとりの教育的ニーズを把握し、持っている力を高め、生き生きと社会で活躍できるような教育実践を重ねられていた。中国の伝統的な楽器や、弦の振動を伝えるピアノ、工夫された視力回復の手作りの機械、すべて子どもたちが伸びることを想定して作られていた。絵や写真をはじめ、すばらしい作品が展示されていた。ダンス室での練習では、指導される先生方の細かい要求もきちんと表現し、高度な技術や表現力は、個人的にも全体のまとまりとしても、心をひとつにして表現力を高めていた。

大田 孝…………職業訓練校として機能していることがよくわかった。「自強」という言葉が印象的だった。「自分の手で、人生を切り開き、作っていく」という意味の歌はとてもすばらしいと思った。最近では見ない子どものたくましさを感じることができた。また、先生の児童に対する愛を感じることができた。

大塚 基嗣…………「熱心な指導」に感動した。「生命尊重・人道的配慮・融合共有・価値創造」の理念をもとに、潜在能力の開発と欠けている能力の補てんを行っていた。「特別体育・芸術人材の育成」が確実になされていることは、訪問先だけでなく様々な場面で感じた。

- ・街中にたくさんある按摩の店。
- ・帰国便の中でダンスマッチューム優秀賞の記事掲載を見た。

澤田 美樹…………貴陽市の盲聾啞学校

では、しっかりと技能を身に付けさせ、卒業後の就職に役立つような授業を行っていた。たとえば、目の不自由な生徒たちは按摩としての技能を身につけるなどである。その他にも、耳の聞こえが不自由な生徒たちのダンスの指導があり、驚きと感動を覚えた。音のない世界で、生徒たちが踊りのリズムやタイミングを図れるように教員が工夫をしており、その生徒たちの踊りは、貴陽市の大会で優勝するまでのレベルであることに感動した。先生方の工夫を凝らした指導に、見習うべきところがたくさんあった。

貴陽市実験小学校 (小学校)

[貴州省貴陽市] 5月 21 日(水)

学校長: 鐘海燕 (ZHONG Haiyan)

設立年: 1925 年

児童数: 5,000 名近く / 教員数: 179 名

前身は「貴州省立女子模範附属小学校」。1925 年に現在の名に改名され、共学となった。自然、音楽、美術、スポーツ、書道、マルチメディア教室、図書室、診察室、エレクトーン室、舞踊教室などの専用教室と多機能のイベントのホール等の設備が整っている。1997 年、中国教育部により貴州省の貴陽市実験小学校となった。

* 欅歓セレモニー(学生才芸展演)

- 1、ドラム演奏
 - 2、歌とダンス
 - 3、英語による挨拶と歌
 - 4、合唱
 - 5、社交ダンス
 - 6、歌
 - 7、ダンス
 - 8、民族舞踊(アケボシ合唱団)
 - 9、鐘校長挨拶
 - 10、訪問団による合唱
 - 11、記念品贈呈
- プログラム 8、民族舞踊は、貴州省の少数民族の無形文化遺産を広く知らしめるために、アケボシ合唱団で取り組んでいる。

* 質疑応答

- Q. 学校の理念に「互いの相違を尊重する」とあるが、学校には、いろいろな子どもが在籍していると思う。そこで、どのような取組をしているのか。(廣松)
- A. 貴陽市には、少数民族は多くない。多くは漢民族である。少数民族の子どもは人数が少ないのと一緒に学習している。社会科等で少数民族について学習していく。
- Q. 今日の歓迎会の歌やダンスは素晴らしい。今

日のためにどの程度練習し、その練習時間の確保はどのようにしたのか。(佐々木)

A. 特別に準備したものではない。訪問団について知られたのは一週間前である。普段から取り組んでいることである。今月は月曜日の午後に芸術の練習ができるようにしている。また、保護者が子どもの興味関心を高めるために学校外で取り組ませている場合がある。なお合唱団は2つあり、普段から力を入れて取り組んでいる。また、苗族の合唱団は毎週木曜日に練習している。

Q. 子どもの能力が高い。そこで保護者に期待することは?特に小学校入学前に保護者にお願いしていることは?(高橋)

A. 公立の義務教育である。校区の子どもが入学でき、入学試験等の基準はない。

Q. ドラム演奏等のパフォーマンスに驚いた。高い力量を備えた子どもたちの卒業後の姿はどのようなものか?(藤野)

A. 子どもたちが成人したときの具体的なことはわからない。しかし、中学校では本校の子どもたちの入学を歓迎している。

Q. 子どもたちの歌が素晴らしかった。高音を発声させる練習をしているか?(西山)

A. 教育課程の中に音楽科があるので、その授業時間の中で指導している。音楽に興味のある子どもは部活動で指導する。

*校内見学

校舎は3つあり、1つには1、3、5年が、1つには2、4、6年が、1つには音楽科などの授業ができる教室が配置されている。特別に部活動の授業参観をした。

- ・料理室では3年生が餃子作りをしていた。
- ・陶芸室では陶芸の部活動がされており、指導は大学で陶芸の勉強をした教師が指導していた。
- ・書画室では毛筆の練習。水墨画にも取り組むということであった。
- ・美術室ではボタンを用いたデザイン(作品を作成していた)。ビニールで服を作成していた。
- ・展示室では長期休暇中の課題作品を展示。課題は学年毎に設定(3年以上)
- ・カウンセリング室ではカウンセリングについて研修をした教員(現在は国語科教員)が行う。2時間目以降、カウンセリングを受けることができるが、授業中は不可。カウンセリングを受ける子どもは少数である。

る。

- ・音楽室では3年生の音楽授業参観(子どもは55人)、2年生も音楽科の授業をしていた。
- ・工作室では模型制作活動(部活動)をしていた。
- ・生物科室では理科の授業
- ・ロボット製作の部活動の見学
- ・1、3、5年生のいる校舎は各階にホールがあり、テーマに応じた展示がされている。なお、ホールは授業で使われることではなく、子どもたちが休憩時に遊んだりすることができる場である。また、展示のテーマは民族の生活用品、科学、天文、楽器である。
- ・2、4、6年生のいる校舎には各階に季節のテーマがあり、飾り付けがされていた。1階から春夏秋冬の順である。
- ・貴陽市をテーマにした展示がされている場があった。
- ・学級の廊下壁面には木の絵がある。これは「木のように育つ」ことを意味している。
- ・学校に近いところに住んでいる子どもは自宅で昼ご飯を食べ、昼寝をする。午後の授業は14:30から開始。
- ・学校の清掃は業者がする。子どもは教室清掃のみである。
- ・午前中は40分授業、午後は30分授業
- ・2時間目と3時間目の休憩は30分あり、体操をする。
- ・職員室は学年担当毎にある。職員への連絡はパソコンを使って行う。週に一回全職員が集まる機会がある。
- ・教員は学年を持ち上がっていく。3年生までは変わらない。

(大西敏之)

《参加者の感想》

廣松 隆広…………漢民族がほとんどである中で少数民族への理解を促し、大切にしようとする取り組みが大変すばらしいと思う。美術や家庭科、書道などの授業の様子を観察することができ、和やかな中にも子どもの集中する姿があり、非常にレベルが高い学校であった。

堀 亜希子…………歓迎パフォーマンスに、民族舞踊・歌唱と英語のロック・ポップス調のダンス・歌の両方が入っていたことで、文化に対する姿勢が伺えた。

木製の机や椅子が配されたオープンスペースや、英語の色・形・月・天候等が自然と覚えられるような床の模様等、校舎の隅々にまで配慮の行き届いた設計だった。その充実した設備を遊ばせることなく、存分に活用している先生方の努力と生徒たちの勤勉さを強く感じた。

校内見学の際、教室の後ろの黒板にトロの絵があったこと、休憩時間に生徒たちが駆け寄ってきてくれたことが純粋にうれしかった。

町田 恵理子……………歓迎式では、ミヤオ族の踊りを訪問団も交えて行ってくださり心の距離をぐっと縮めることができた。出演している生徒と訪問団の座席も近く、入退場の際に子どもたちが笑顔で積極的に挨拶してくれ、握手ができたことも印象に残っている。学校の施設では、各フロアにテーマ設定された部屋があり学習意欲を促進すると感じた。

ゼミ形式の授業では、生徒が主体となって課題解決に取り組む様子をみて大変感銘を受けた。縦割りで自分の興味関心に沿った総合の授業を選択しており、夢中になって学習に取り組んでいた。

中村昌子……………生き生きとした子どもたちの活動に直接触れることができたことが大きな成果であった。歓迎セレモニーでの様々な発表はもとより、日常的な授業場面をたくさん見学し、中国の教育現場の実際の様子を目の当たりにして、日本での教育活動へのヒントをたくさん得ることができた。真剣に少人数のグループ学習に取り組む姿、実験の成果を自信をもって伝える姿、おいしい餃子をたくさんごちそうしてくれた姿など、活動に明確な目的意識を持たせ、自分たちの力で自ら課題に立ち向かう姿勢を本校の子どもたちにもしっかりと身に付けさせたいと思った。

中司 康彦……………まず、集会場に案内され、教師や多くの子ども達から大歓迎を受けた。その後、歓迎セレモニーがあった。「①ドラム演奏」「②歌とダンス」「③英語によるあいさつ」「④合唱」「⑤社交ダンス」「⑥歌」「⑦ダンス」「⑧民族舞踊」である。どのパフォーマンスも質が高く、子ども達が慣れているように思われた。その中の民族舞踊で、子ども達と手をつないで一緒に踊れたことが何よりも楽しかった。また、管理職のあいさつの際、全員が女性であることに驚いた。5月19日の中国教育部表敬訪問の時の説明で、小学校教師の約90%が女性であることを思い

出した。校内見学もでき、施設・設備がかなり整っていた。三年生の家庭科の調理実習では、皮から本格的に手作り餃子を作っていたのにも驚いた。その餃子の味が辛くなく日本人好みで、疲れた私の胃に優しい味であった。

坂本 智典……………この学校も北京市趙登禹学校と同様に、すべての児童が、自国・自校・民族の誇りをもって合唱や演奏、演舞等を披露しており、教育活動の充実が伺えた。

また、グローバルな視点からの校内環境の充実ぶりが校内各所に見られ、学校長の教育方針の徹底ぶりを感じるとともに、校長のリーダシップのもと複数の副校长体制の連携を感じた。

佐々木 郁夫……………生徒たちが自分の伝統文化をしっかりと学び、それを自分のものとして着実に身に着け、他人に発表できる力を身に着けていることに感動した。伝統文化の継承がきちんと行われていて、それを子どもたちが楽しんで学んでいる様子が、とても印象深かった。

相浦 太……………趙登禹学校訪問で受けた衝撃から中国の学校に対するイメージを再構築したおかげで、実験小学校の子どもたちの歓迎セレモニーを楽しむことができた。中国の教育は、国の文化を継承していくことに力を入れていると感じた。自分たちの国の歴史に誇りをもって、伝統を受け継いでいくサイクルが教育に確立されていた。

実験小学校では、多くの教室・授業の様子を見学できた。そこには、日本と変わらない、生き生きとした子どもたちの活動する姿があった。通訳の説明により、指導にあたるのは学校の教員に加え、外部のプロの芸術家の場合もあるという。充実した設備で、適切な指導者のもとに育てられる子どもたちを大変うらやましく感じた。国や地域が変われば教育の方法も変わって当然だと思うが、中国の子どもたちが大切にされていることは十分伝わってきた。

濱方 弥生……………日頃の学習をしっかりとやっていれば、見せるための演技練習は不要。いかに日常の授業の積み重ねが有用であるかを実感した。(部活動の充実も含めて)

校長・副校長・教頭・副教頭と、管理職が全て女性で、皆さんのが第一線で活躍している姿を見ることで、

自分自身、非常に刺激となった。自分たちの興味あるものを集中して学習することにより、子ども達がいきいきと活動し、自信に満ちあふれていると感じた。楽器・歌・踊り等々、指導している教員の表情も豊かで、日本の教員はまだまだ表情が乏しいと感じた。図書の時間を参観させてもらったときに、6年女児が英語で話しかけてきてメッセージカードを渡してくれた。笑顔が素敵で、本校の児童も、このように笑顔で海外からのお客様に話しかけられるようにしたいと感じた。

井上 憲…………貴州省の1万校もある学校の中でナンバーワンと評価されているだけあって、教師・児童は規律正しく、学校環境設備も充実していた。公開授業は、いわゆる「部活動」の時間であったが、児童がそれぞれ興味のある活動に集中している姿が見て取れた。学校の雰囲気として「勤勉さ」が伝わってきた。

歓迎セレクションでは、児童が日頃から部活で取り組んでいる合唱や踊り等を発表してくれた。表現力の高さに圧倒された。

公立の義務教育小学校なので入学者選抜は行っていないが、この学校の高い(と言われる)学力と規範意識は、家庭の経済力が少なからず影響しているらしい。

川本 静…………近代的な校舎、整備された広いグラウンド、キャビンアテンダントのような先生方の制服、階段を利用したたくさんの英語文の掲示など、とにかく何を見ても思わずため息の出る施設であった。特に、広い廊下の一部に設置された、子どもたちの興味をそそる多分野にわたるワークスペースには驚かされた。見上げれば世界中の国旗と無数の星、その真下には大きな地球儀。思わず童心に返つていろいろな国を探してしまった。ただ何気なく見ているだけでも新たな世界が広がり、「もっと知りたい、もっと調べたい。」という意欲がわいてくる仕掛けがたくさん見られた。「強制」ではなく「自然」に学習意欲を高めている取組が非常に勉強になった。

大西 敏之…………歓迎セレモニーで子どもたちの普段の取組の成果を拝見した。自信に満ちた顔つきで発表する子どもたちを見て、継続的な教育活動の可能性と素晴らしいを改めて感じることができた。小学校のクラブ活動の時間数は10時間程度であるため、継続的に取り組み、子どもたちの興味関心

に基づいた力の育成が難しい。クラブ活動の在り方について考えるヒントを得た。

秋山 繁治…………全校を上げて日本の教職員の訪問を歓迎してくれていると感じた。児童の演奏、踊りなど指導が行き届いており、どの演目も非常に完成度が高いものであった。指導的な立場にある管理職はすべて女性であり、女性の比率が非常に高いと感じた。レベルの高い教職員によって、高いレベルの教育が提供されていると感じた。

樋上 習夫…………教育環境が非常に充実していること、また展示物等がきれいに整備されていることに驚いた。先生方もキリッとした制服を着用し、落ち着いた雰囲気の中で、子どもたちは伝統文化を大切にした教育を受け、そして効果的に世界に発信しているところに感銘を受けた。子どもたちと一緒に少数民族の踊りを楽しく踊れたことは、生涯忘れないであろう。

北谷 美希…………「子どもが楽しく学習すること」を学校方針に掲げている通り、子どもたちが主体的に生き生きと活動していた。英語によるパフォーマンスから少数民族の伝統的な踊りなど、歓迎セレモニーでの全校をあげての歓迎ぶりにたいへん感動した。子どもたちと一緒に踊ったり、訪問団からのお礼として歌を披露するなどしたりして、貴重な交流の時間をもつことができた。特に、「茉莉花」の歌唱披露では、中国の子どもたちや教職員の方々の反応がよく、会場全体が一体となつた。たいへん感動的な思い出として心に残っている。

また、教育活動を支えるハード面も質が高く、科学館に匹敵するようなオープンスペースが各階に設置され、各教室や階段には手作りの掲示物が充実しているなど、子どもの学習意欲を引き出す環境が整備されている点はたいへん参考になった。

光行 泰子…………この学校を見て、芸術教育に特別力を入れている学校でなくとも、表現力の育成が、中国の学校の中で重視されていることがわかった。校内の踊り場や階段下のスペースなど、様々な空間を使って教科展示のスペースがとつてあり、学校全体としての学ぶ雰囲気作りの工夫が見て取れた。また、今回同行してくれたガイドさんが、偶然にこの学校の保護者であったことから、生の声が聞け

て興味深かった。

宮地 溫美…………故郷の文化を大切にした教育がなされている。

- ・芸術指導に力を入れている。どの生徒も素晴らしい表現力を身に付けていた。
- ・校内の掲示物、設備が非常に整っていた。各フロアに設けられた、各教科の展示物などが子どもたちの学習意欲や関心に結びついているのではないかと感じた。

森川 直美…………今回訪問したどの学校も、共通していたのが入り口の守衛や校内巡視員等の配備、各フロア等の監視カメラ配備等のセキュリティ一面の高さである。中でも、小学校では、女性教師が9割くらいという話であるが、教師も子どもたちも、安心して授業に集中できる体制が整えられているを感じた。また、すべての教室、会議室等へのプロジェクト配備にも驚いた。ICT教育の充実を、国を挙げて確実に推進している姿をまのあたりにすることができた。

秋山 誠…………朝は生憎の雨模様だったが、着く頃には雨は上がっていた。最初講堂に案内されたが、ドラムの演奏やいろいろな民族衣装、ドレスを着た子どもたちに盛大な拍手のもと迎えられ驚いた。

席に着くと早速、ドラムの演奏を聴いた。3台のドラムを使った力強い演奏だった。次に民族衣装を着た女の子一人の歌、英語の歌とダンス、フォークダンス、そして苗族の踊りと多種多様なものでなしだった。どれも完成度が高く素晴らしい演技演奏だった。最後に日本教職員団から「ふるさと」と「まつり花」の歌をプレゼントした。「まつり花」は手拍子とともに一緒に歌つてくれた。その後みんなで苗族の踊りと一緒に踊って終わった。

その後、校長から学校の紹介をしてもらった。校長も教頭も研究部長もみんな女性だった。以前に聞いたとおり小学校には男性教諭が少ないと言うことを垣間見た感じがした。その後、学校の施設と授業の様子を見せてもらった。移動の途中「箏(そう)」という日本の琴のような楽器の演奏をしていた。クラブ活動の一環だと言うことだったようだが、非常にうまかっただ。

各階の階段にある広いスペースには、その階に開

連した内容の本と読書スペースがあった。その他の専門的な本は、図書室においてあり、そこにも広い読書スペースがあった。また、各階の階段スペースには図書以外にもその階の特別教室に関連した展示物が掲示してあった。内容は非常に難しい内容のものまで展示してあった。授業は、今日は担任が説明に出ており特別にクラスに2人先生がいると言うことだった。家庭科の学習では保護者も来て、餃子を作っていた。2つも貰ったが、非常においしくできていた。読書室では、新聞作成に向けたディスカッションと別の学年が自分の好きな誌や本の紹介を書いていた。中には日本語の詩を紹介している児童もいた。

クラス50人～60人ということで教室いっぱいだったが、どの子も一生懸命取り組む姿が見られた。ドラムやダンス、などは家庭で練習にも取り組んでいるようだった。家庭では学習にも一生懸命取り組んでいるが、その他にもいろいろな活動に積極的に取り組んでいることが分かった。どの子も自分の可能性を信じ、何事にも一生懸命取り組んでいる姿が印象に残った。観察中子どもから自分の気に入っている本の紹介文を貰った。他の観察団のメンバーもプレゼントされているようだった。また、帰りには子どもから話しかけてくる場面もあった。子どもたちの積極性に驚かされた。

本間 洋一郎…………校内の設備のすばらしさに驚いた。掲示や展示スペースにも随所に工夫が見られ、生徒の能力を伸ばすには教育環境を整えることが大切であることを学んだ。また、学力の向上だけではなく一人ひとりの個性の伸長を学校がバックアップしている姿勢が感じられ、どの生徒も自信をもっているように感じた。他者と積極的にコミュニケーションをとることのできる人材はこのようにして育成されているのだと感じた。

堀川 利洋…………学校の理念は「互いの相違を尊重する。全体に注意を払う。潜在的能力を開発する。和やかに発展する」である。学生を全面的な人材に育成させるために努力されており、「中国文化、民族の伝統と継承」を体現している。

校舎に入り、講堂までの移動時、児童が「こんにちは」と日本語で挨拶してくれた。驚きとともに胸いっぱいに嬉しさが込み上げてきた。

歓迎レセプションでは多彩なパフォーマンスを披露(最後は少数民族、ミャオ族の踊りを披露、日本の

教職員団も一緒に児童と手をつなぎ輪になって踊る仕掛けを用意、心から感激した)してくださいり、またパフォーマンス時の司会進行も児童が行っていた。児童たちの堂々とした立ち居振る舞いに感心した。

現地の子どもたちとの触れ合い、かかわり方(レセプションを企画してくれた学校はすべて小学校である。)が印象に大きく影響することを学んだ。民族踊りをレセプションプログラムに取り入れ、我々訪問団も子どもたちと手をにぎりながら一緒に輪を作ることで“仲間に入った”“距離が縮まった”という印象を持つことができた。“相手を知る”うえで“一緒に”ということは必要なことだと考える。

授業見学をした中で教科とは関係なく、学校理念を体現している印象をもった。自分の学校で行っているプログラミング授業もここでは展開されており、高度な教育を初期段階から実施している“教育の質の高さ”を感じた。

星野 和江 敷地面積 50666 m²という広大な土地の中に、普通教室 72、舞踏・音楽・書道・ICT 教室など 66 の特別教室があり、3000 名以上の生徒が在籍しており、その規模の大きさに驚いた。ドラムの演奏、英語の歌、ダンス、日本語での「さくらさくら」など、どの発表も見事で、日頃からクラブ活動が活発に行われていることが良くわかった。教室環境では、廊下には、英語の表示や環境について学ぶスペースや、各階のオープンスペースには音楽、科学、芸術、スポーツ、国際理解などの展示がされていて、児童の興味関心を伸ばすような工夫があり、教育環境が非常に整備されていたところが素晴らしい。

西山 啓子 「歓迎セレモニー」の内容は感動するものばかりであった。決められた時間内で練習をし、このように芸術的に高まった発表ができるということは、その時に集中して、表現力を高めようと意識をして、みんなが目標に向かって向上していくのだと感じた。合唱の高音部の響きの壮大な美しさに、特に感動が走った。リズム感のよさも身体の柔らかさも、日々のつみ重ねの賜物であった。展示室に飾られていた春節などの長期休暇中の作品も、テーマに応じてホールに展示されている作品も、作る過程を大切にして、きちんと完成させられたものであった。

大塚 基嗣 充実した設備の中での

びのびと成長していることがわかった。

歓迎レセプションに参加できない子どもたちが会場の裏に集まり、興味いっぱいこちらの様子をうかがっていた際に現地の先生方から注意を受けていたあたりは中国も日本も同じだと、微笑ましく感じた。訪問を終え、バスに乗り込む直前まで交流をしようと接し続けてくれた子どもたちの笑顔を、日本の教育現場でも活かしたい。

友田 傑司 この学校でも熱烈歓迎であった。小学生とは思えない程のドラム演奏や歌唱、英語での挨拶やダンス、民族舞踊(アケボシ合唱団)等どの発表もすばらしく、最後の民族舞踊には、我々も参加することとなり、子どもたちと手をつないで一緒に踊ることで、楽しい交流の時間となった。この学校は、児童数 4412 名、教職員 246 名と想像もつかないほどの大きな学校であった。

学校には、少数民族も在籍しており、「互いの相違を尊重する」という学校理念を掲げてあった。説明では、児童の多くは漢民族であるが、少数民族の子どもたちも一緒に学習しているとのことであった。

授業参観の中で子どもたちが、餃子を作ったり、陶芸に挑戦したり、毛筆の練習をしたりしていたが、どの教室も、非常に集中した姿が見られた。学ぶ姿勢の大切を改めて感じこととなった。

学校の教育環境については、掲示物の工夫が見られ、各階のホールには、民族や科学、天文…等テーマに応じた展示がなされていた。スペースにもゆとりのある校舎がうらやましくもあった。

山田 枝里子 各グループに教員がついてガイドして貰ったので、あらゆる面で質問がしやすく、より具体的な話を聞けたことが印象に残った一番の理由である。学校案内の中で、この学校が「環境保全」という一貫したテーマで進んでいるように感じられた。例えば、校内の展示物は環境保護に関するものが多かったり、美術では身の回りのいらなくなつたものでドレスを作る授業をしていたり、夏休みの工作は廃棄物をリサイクルして作らせているという。これは ESD の精神と結びつくものであり、それを「特別なこと」として取り組んでいるのではなく、学校内のあらゆる場面で感じることができたことこそが、持続可能な発展を示しているものだと思った。

さらに、歓迎のための出し物も、私たちのために準備を始めたものではなく、常日頃から訓練(練習)して

いるものなので、いつでも披露できるという話も驚きであった。いつも練習しているだけあり、子どもたちはいきいきと、自信を持ってパフォーマンスをし、そこで培われているのであろう自信は普段の授業中などでも見てとれた。常に何かに一生懸命取り組み、自信をつけさせることを日本でももっと行っていかなければと思った。

貴陽市花溪青岩小学 (小学校)

【貴州省貴陽市】 5月 21 日(水)

学校長: 王主国(WANG Zhuguo)

設立年: 1905 年

児童数: 約 1,178 名 / 教員数: 約 78 名

貴陽市郊外にあるこの小学校では、近年の均等な教育を推進するための教育管理を積極的に取り入れている。教育の質の向上に注意を払い、教師の交換制度などを活用したり、全町の教師を集めて情報交換や集団研修するなどのイベントも開催したりしている。また、農村少年宮(子ども用の公民館)を活用し、「小竜隊」「扇子舞隊」「模芸クラス(囲碁など)」「刺繡クラス」「書道クラス」などのイベントを通して生徒たちの学習意欲を高めて、生徒たちの特長を発揮させた多様な活動を実施している。

14:30 ・講堂にて約 10 分の休憩をとった

14:45 ・校庭にて歓迎のイベント

副校長の陳氏から日本教職員訪問団に向けて、歓迎の挨拶があった。校庭では民族衣装や伝統装束をまとった約 300 人の児童が整列し、舞踊を披露した。2・3 年生が太鼓と笙の演奏、4 年生が布依族の衣装で歌を披露、5・6 年生は 165 人の群舞で扇子の舞と龍の舞(苗族の衣装)を披露した。花溪青岩小学の教員によって各舞踊の説明を行った。

児童らの舞踊の振付に関しては全て同校の教員のオリジナルのダンスであった。龍舞の龍は北京の中央政府から特別援助金で購入したという。ダンスの衣装も無償で提供しているとのこと。ここでも中国教育部表敬訪問時に説明のあった「都市と地方の連携と所得格差・教育格差の是正」を試みる教育活動の一端が見られた。

15:40 ・校舎内視察

部活動は選択性で週 2 日。

碁、将棋部、書道部、手芸部、古典暗誦部などを見学。どのクラブも児童がまじめに取り組んでいた。

・講堂集合

副校長から説明。古い歴史を持つ地域であり、教育方針は自身の将来と村の歴史を結びつけること。伝統工芸のクラブもある。副園長濱方先生視察のお礼挨拶ののち、記念品贈呈、交換。記念撮影をしたあと、16:07 に学校を出発した。

(櫻井英子)

《参加者の感想》

町田 恵理子 ······ 少数民族も共に暮らす地域として、互いを認め合う姿勢を身につけるという点で興味を抱いた。まず身近な他者を認めることから、グローバル人材の育成は始まっていると感じた。自らの伝統や文化に対して誇りを持ち、継承していくことの大切さを児童の真っ直ぐな姿勢から教えて頂いたことが特に印象深い。また、都市部と比較すると自分の地域以外の人に関わる機会が少ないからであろうか、訪問団に対して少し距離を取ったところから興味をのぞかせている様子も印象に残っている。

佐々木 郁夫 ······ 中国の都市部の学校ではないにも関わらず、しっかりと指導が行われているのに驚いた。学校の周りは悪路にもかかわらず、多くの子どもたちが学校に登校しており、中国の子どもたちの教育に対する熱心さが伝わる。学校の設備も周りの建物などと比べて、格段に素晴らしいものを持っており、子どもたちによる広いグラウンドでの竜の舞は感動的だった。

川本 静 ······ 都市部の学校と比べると、規模も施設もやはり劣ってはいたが、子どもたちの生き生きと学ぶ姿には何も変わりはなかった。少数民族が多く存在するため、自分の民族に誇りを持つつ、他民族にも敬意を示す取組が多く見られた。刺繡や織物など民族の歴史と結びつけながら学ぶ授業もあり、とても興味深かった。

英語の授業では、男の子が恥ずかしがりながらも “Good afternoon! Nice to meet you. Please come in!” と声をかけてくれた。少しあしか見る時間がなかったのが残念だったが、ロールプレイをしながら楽しそうに英語を学んでいる子どもたちの姿を見ていると、日本

の子どもたちと同じだなと感じた。しかし、日本の子どもたちよりも声が大きく、みんなの前でも堂々と話していた。単語でのやりとりではなく、文章と文章のやりとりができており、見習わなければならぬと感じた。

山 理武和 貴陽市を中心部から離れた花溪青岩小学校に視察訪問をしたが、少数民族の伝統舞踊で熱烈歓迎をしてもらいたいとも感激した。学校の規模は地方にしては大きく、教育環境が整っていく状態であった。普段の授業ではなく、課外授業的な内容であったが、子どもたちの瞳が輝いていて、低学年の児童が黙々と視写をする姿に学習への並々ならぬ意欲を感じた。また、どの少数民族も共に学んでいて、目指している平等教育と伝統文化教育が確実に推進されていることを感じ、児童の個性や能力に合わせた指導について学ぶことができた。

村田 聖子 唯一の農村部の学校を見ることが出来てよかったです。建物は新しくても、設備のあり方が旧式であったり、教育部での説明にあつたようないい物などがあつたり、実際に見比べることができた。また、少数民族の児童が通っており、それぞれの民族での活動があることが見て取れた。その点について交流して深める機会が持てたらさらによかったです。

山田 忠弘 まだ開発の進んでいないエリアに近代的な学校がそびえ立つ風景が印象的だった。中高の教員として普段見られない、小学校の生徒の活動を見る貴重な機会となった。グラウンドでの一糸乱れぬ見事な演技、放課後のクラブ活動で全員が熱心に取り組んでいたこと、多くの生徒たちが人懐っこく手を振ってくれたことが今でも思い出される。

吉井 進 通常授業ではなくクラブ活動の参観であったが、児童の生き生きとした姿が印象に残っている。グラウンドでの、複数の民族舞踊の披露。少数民族でも児童の姿から自分の民族に誇りをもつていることが、感じ取れた。また、この活動を教育課程に盛り込み、年間を通して指導を進めている学校の運営もすばらしいと思った。また、校門をくぐるときに気付いたのだが、看板に教育委員会のような漢字が読み取れた。事前に調べたことや校長先生からの説明を合わせると、どうやら学校が教育委員会事務局の役割も担い、教員を農村部の小学校へ派遣し

て授業を行っているようだ。また、全町の教員を集め情報交換や研修を実施しているようだ。学校現場において、国・省・地域・学校現場がつながり、教育の平等と均等を図ろうとする具体的な取組を見ることができてよかったです。

別の観点では、学ぶことに児童も教員も熱心で意欲的である。わたしも、改めて見習い、元気を貰うことができた。

秋山 誠 花溪青岩小学校は地方にある小学校だった。到着するのにバスで1時間半ほどかかった。道路は建設中で、バスはまだできていない砂の道を長い距離走った。工事の様子を見ると、4人程度の組を作り、穴を掘ったり、石を積んだり手作業で行つたりしていた。あまり重機などは見られなかった。数キロにわたって一度に造成するようだった。驚いたことに女性の作業員が多く、4人組の全部が女性というところもたくさんあった。綺麗な外観になるように路側帯などにたくさんの木を植えていた。青岩小学校に到着した。非常に綺麗な建物で校舎は新しく、運動場も芝とアスファルトでできていた。民族衣装を着た子どもたちが準備をして待っていてくれた。

少し休憩をした後、運動場で子どもたちが民族舞踊を見せてくれた。銅鑼を打ち鳴らしながら龍が舞つたり、扇子や太鼓を使った集団演技など多種多様な民族舞踊をしたりしてくれた。練習を繰り返しおこなつてくれたのであろう。どの演技も素晴らしいものだった。

次に授業の様子をみせてもらった。クラブ活動だったようで、将棋やボードゲームをして遊ぶ子や習字や英語、孔子の教えを朗読するクラブがあった。週に2時間ほどそのような時間があり自分の趣味を広げるという趣旨らしい。

次に学校の説明を聞いた。歴史のある学校で、200年近くの伝統があるようだった。全校1173名、教職員は73名、29クラスある。他に分校が2つあるらしい。学習は他民族地域であるため、地域の歴史と結びつけて行っているとのことだった。

質問時間が無かったので、子どもたちはどこからやってくるのか分からなかった。周りにはあまり家がなかったので寄宿舎もあるのかと思われる。

非常に歓迎して迎えて貰えて嬉しかった。教職員もにこやかに話しかけられたり、案内してくれたりして心地よかった。子どもたちの民族舞踊や集団演技

は統一されていて素晴らしい。授業はクラブ活動の様子だったが、特に印象に残っているのは、中国式チェスを楽しそうに行っている児童や論語を大きな声で一生懸命唱えている児童たちが印象に残っている。丁度バスが出る時間と下校時間が重なり、まだできていない道路を友だちと一緒に楽しそうに歩いて家路に向かう子どもたちの様子に、どこの国も子どもは同じだと感じた。

澤田 美樹 青岩小学校では、とても暑い日であったにもかかわらず、色とりどりの民族衣装をまとった生徒たちがグラウンドで待っていてくれた。どの先生も生徒も、私たちの訪問のために、自分たちの学校の様子を伝えようと一生懸命に準備をしてくれたのが見て取れた。演技も素晴らしいが、学校を案内してもらった際に、各教室でふれあつた生徒たちの一生懸命で真っ直ぐな姿勢に心を打たれた。この学校でも、生徒の興味・関心を伸ばす教育をしており、中国の伝統や文化を継承しようとする教育が行われていたことに感心した。

山田 枝里子 周囲の整備されていない道路からは考えられないほど綺麗な校舎で、これからこの小学校を中心としてどのようにこの町が発展していくのだろうと想像するとわくわくした。児童は日差しの照りつける熱い中私たちの訪問を歓迎するための出し物の準備をして待っていてくれ、中国の伝統芸能を披露してくれた。その姿にも感動したし、その後、見学した課外活動での真剣な姿も印象的だった。課外活動も中国固有のものが多く、伝統文化を大切にする姿勢が見られた。

北京師範大学 貴陽市附属中学 (高等学校)

[貴州省貴陽市] 5月23日(金)

学校長: 沈連柱(SHEN Lianzhu)

設立年: 2011 年

児童数: 1,281 名 / 教員数: 126 名

北京師範大学貴陽市附属中学は「北京師範大学」と「貴陽市金陽区管理委員会」が連携して創設された公立学校である。中学部と高校部二つの部門がある。中国では少人数に当たる 1 クラスで

40 人弱の生徒数を保ち、少人数クラスは効率や教育の質の向上にとってメリットあるとの信念を持って教育に臨んでいる。

また、この学校の沈連柱校長は前年の 2013 年 11 月に本プログラムの対になる中国教職員招へいプログラムで東京を中心にした日本の学校と教育施設を訪問している。

1. 欅式

(1)毛東文先生挨拶 9:00~

・「友あり遠方から來たる」今日は特別な日、代表として歓迎。

・校長は昨年 11 月に日本訪問。日本人の姿印象深い

・中日の相互理解ができるよう祈っている。

(2)校長挨拶

・政府と連携して作った学校。

・校長は任期三年。北京師範大学から派遣。中 1 ~ 高 3 まで 37 クラス。

・男子ジェントルマン、女子優雅なレディを目指している。

・学習、特に考える力を重視。

・一流の子を育成するために中国の文化だけでなく東洋の文化も融合している。

(3)友田副園長挨拶

「優雅」日本の子どもにも身につけてほしい。どんな教育をしたら育つか見学したい。

(4)記念品交換

日本教職員訪問団からの記念品に対し、学校側からは蜡染め(ろうけつ染め)の掛け軸がプレゼントされた。

2. 授業見学 9:40~10:20

「高 1 古文」と「数学」の 2 グループにわかれて見学。数学の授業を見学。

<座標の授業>童加林先生

* 内容

X, Y 方程式を使った座標を考える。

・プロジェクターを使い問題提示

・自力解決

・グループで確認

・板書をさせて発表

・答え合わせ

・電子黒板(プロジェクター)にてまとめ

・練習問題→答え合わせ

* 教科書

・図形で一冊(空間、平面、直線座標)

* ノート

- ・自由(特に形式なし。問題集に書き込んでいる子も)
- *どの子も集中し、授業を受けていた。自力解決の後ペアワークで確認の時間を取りっていた。
- *床に荷物を入れるための収納ボックスがおいてあり、ロッカーはなし。

3.校内見学 10:20～10:55

(1)高1職員室(学年ごとに職員室がある)

- ・1学年12～17名の先生
- ・コンピュータ1台ずつ配置

(2)化学実験室

(3)物理実験室

(4)生徒2013年作品展スペース

(5)図書室

- ・入り口にセキュリティー
- ・バーコードで図書を管理
- ・図書冊数2万冊

(6)女子寮(4人部屋)

(7)食堂

- ・広いスペース、豊富なメニュー

4.質疑応答 11:00～11:30(小グループ)

Q.「探究」として話し合いの授業を取り入れていたが
どこの授業でもあるのか?

A.自主学習に力を入れている

Q.先生の1ヶ月の給料は?

A.公立と同じ、5000元程度

Q.寮生活の生徒をサポートするために行っていることは?

A.寮にすんでいる先生もいる。「德育導師」としてカウンセリングで相談にも乗るし、全年で心理学の授業もやっている。教師と生徒とがグループでサポート。

Q.「優雅男性」「優雅女性」の選出方法は?

A.教育活動全般において「優雅」を指導している。各クラスから代表を一名選抜→全校から一名選抜し代表になった生徒は学校の展示室にずっと飾られる。様々な観点で評価。

Q.寮の費用は?

A.全寮生 半年400元

Q.「優雅パパ」「優雅ママ」の選抜の仕方は?

A.教員はすべての親を知っている。親子活動ほぼ100%参加率。子が自分の親を推薦してクラス内で選ばれ、全校のトップが決まる。

所感

・環境、設備が整った素晴らしい学校。

・成績開示、優秀な生徒のコンテストを行うなど、競争

させながら高めしていく印象だった。

(星野和江)

《参加者の感想》

彦坂 秀樹……趙登禹学校と同様、「質の向上」のモデル校として位置づけられているのである。設置された場所もまさに開発された都市の中心にあり、施設にかけるお金は日本では考えられない規模であった。この学校も門に入つてすぐに「教師の履歴」が顔写真入りで掲載されており、他学校との比較に関する資料も多数掲示板に貼つてあった。教師間、学校間の競争が「質の向上」に貢献するという考え方なのであろう。日本では、このような競争は、「教育の平等」に反することになるとの意見が聞こえるであろう。ただ、すべてが競争競争とぎくしゃくしているのではなく、例えば、ジェントルマン、レディを募集する際は、自己申告で行う、選考会等は子ども達が運営していくという説明を受けた。子ども達の自己評価に関する事、自治的な運営に関する事について、もっと知りたいと思えた観察であった。

廣松 隆広……国語・数学の授業公開、優雅父母の選出という形での保護者教育や成績等様々な観点からの優良児の公開によって意欲を高める方法は、今の日本ではなかなかできない。先生方との直接の交流を通して、教育に対する考え方や、中国での取り組みについて、個人レベルでの取り組みや考えが分かり、大変有意義だった。

堀 亜希子……1時間の授業を最初から最後まで見ることができたこと、訪問先の先生方と小グループで意見交換できたことの2点が非常に良かった。

国語の授業では、日本の英語の授業と同じように、言語活動が重視されていた。スクリーンと黒板の使い分けが効果的であり、授業者は生徒たちの顔をしっかりと見ていた。ペアワークの後発表をさせて全体のものとし発表者にポジティブフィードバックを行つていたこと、発表者が全くメモ等を見ず、自分の言葉で伝えようとしていたことが特に印象的だった。笑い声と拍手が自然に出る和やかな雰囲気の授業には学ぶところがたくさんあった。

全体ではなく小グループでの意見交換は、一問一答で終わってしまわず詳細な部分まで聞くことができた。「儒雅・優雅」という観点で生徒の全面成長を促

す教育の在り方には感銘を受けた。

石橋 明子……………唯一、正規の授業を見ることができたことが有意義であった。中国語の古典で内容は理解できなかったが、先生の質問に対する生徒たちの返答が、かなりまとまった分量で、先生がさらにそれに追質問をしていた。いわゆる普通の授業ではあるが、ただ暗記したり、教えられたりしたことを吸収するのではなく、自分の頭でしっかりと考え、その考えを人に伝えることを大切にした授業がなされていると感じた。

中村 昌子……………国語の授業を 1 時間じっくりと参観し、生徒たちの実際の学びの様子にふれることができたことが大きな成果であった。デジタル黒板と普通の黒板を並行して効果的に使用する授業スタイルや、教師からの発問に対して少人数グループでの話し合いを 1 時間の中で数回設定し、しっかりと互いのコミュニケーションをとりながら自らの考えを構築していく学びの姿がとても参考になった。授業後の先生方とのディスカッションの時間も大変有意義であった。国語の授業での少人数グループでの話し合いに特に力をいれて、自主学習能力を育成しているというお話を聞くことができ、日本での取り組みとの共通点も見いだすことができた。現場の先生方とのディスカッションは大変意義深いものだと思った。

中司 康彦……………貴陽市の中に開発地域が 2 か所あり、その新しい街並みの方の高台に校舎が建てられている。校長から説明を受け、国語(古文)の授業見学をした。詩を生徒たちがお互い音読しあったりしていた。授業を担当する教員から生徒に向けられた課題 3 つのうち、2 つは 2~4 人で共同学習をしていた。また、校内見学の中で、実験室などの整った設備に驚いた。そして、この学校で最も有意義だったのが、小グループでの教師との質疑・応答であった。共同学習は力を入れていることのひとつであることも直接聞くことができた。

更科 幸一……………寄宿舎のある学校の特徴を知ることが出来た。特に学習環境整備は良く考えられていた。代表的なものとして 13:00~14:00 のお昼寝と夜の教室での補習授業は、高い学習意欲のある生徒たちにとっては成果ができるものであると考えられる。5 名の生徒に「あなたは学校をどの様に思

っていますか?」「なぜあなたは学ぶのですか?」という 2 つの質問をした。回答の多くは「とても楽しく、学ぶことが楽しい」というものであった。上位の大学に入りたいということもちろんあると思われるが、回答する姿からは学ぶことの楽しさを習得しているように感じた。

佐々木 郁夫……………この学校での授業見学はとても有意義だった。このプログラムを通じて唯一、中国の学校での授業を拝見できる機会でもあり、楽しんで見学することができた。中国の生徒たちのグループ学習の場面を見ることができたが、グループでしっかりと話し合う様子や、自分の意見をしっかりと話す様子を見て、日本とは違う様子に驚いた。自分の意見を伝える、発信するという力が着実に育っている感じがした。

秋山 满代……………寮の部屋の簡素な造りには驚いた。机とベッド、洗面所とトイレのみ。余分な物は一切ない。テレビやオーディオなどの娯楽用品はない。シンプルそのものだ。

ここで教員と交流を持つことが初めてできた。短いが貴重な時間だった。寮生活でさみしくて泣き出す生徒もいるのではないかと聞くと、それを乗り越えて生徒は成長するのだと言っていた。また、近所なのになぜ寮に入れるのかと質問すると、保護者がそれを望むからと答えていた。またスマホや携帯電話などは学校が預かるようである。静かに生活できそうだ。それに比べて、日本の中学生、高校生は、どうだろうか? 夜中までスマホにかじりつき、片時も放せない、依存症の生徒がいる。自律はできているだろうか? 精神的に成長がなければ、進歩がない。また、教員の話によると、勉強ばかりでなく、体力面にも重きを置き、一日一時間は走っているそうだ。健康を重視した政策が採られていることを実感した。

新井 崇矩……………政府と連携して作った学校である。数学の授業を参観した。「連立方程式」の単元であった。驚いたことは、授業開始直後、教員がまず解き方を教えていた。(日本では、既習事項をもとに自力解決して、最後に解き方を習得するという指導法をとることが一般的なので。) 数学の授業に限っていえば、ノートというものが存在しない。計算用紙のような扱いであった。「数学の問題を黒板に出てきて解く」という方法は日本でも見られると感じた。

藤野 明彦 授業に参加できたことと、現場の先生との直接的な話ができることが最高によかった。特に、少人数で直接的に教員との話ができることは大変参考になったし、また同じ「現場の教員」としての苦労や工夫・情報の交換をもっとしたいと思った。

浜中 真希 大きく立派な施設であった。高中的 1 年の数学の授業を参観した。黒板やプロジェクターの施設が充実し、先生がパワーポイントを使いこなしながら授業を進めていた。教室の各自の机の中には、テキストがぎっしり詰まり、机の横には大きなプラスチックケースがあり、そこにもテキストがぎっしり詰まっていた。

特に驚いたのは、生徒の積極的な学習姿勢である。次々に挙手し、発言を重ねながら授業が進んでいく。高等学校 1 年とは思えないほど、積極的に授業に参加している。表情も明るい。これまでの授業の積み重ねの結果であると思う。生徒の考えを聞いてみたいと思った。

授業後に話をしてくれた生徒も、大変明るい表情で、元気をもらつた。

山名 和樹 生徒と交流する時間がなかったのが残念だったが、教員とコミュニケーションがとれたところがよかった。そこで知り合った教員とは今でもメールで交流を続けている。各フロアに地理や歴史に特化した小スペース展示があり、本校で取り入れても良いのではないかと感じた。今後も交流を継続させ、具体的な学校交流まで発展させていきたい。

秋山 繁治 授業を実際に見学したり、同じ理科の教員と交流できたので嬉しかった。参観した日は 1 日に 9 時間の授業があり、夕食後も自習時間が組まれており、全寮制ということも考えるとかなり厳しく知育的な指導が行われていると感じた。

樋上 督夫 授業を 1 時間観ることができたこと、先生方と直接対話し、交流することができたことが何より良かった。国語の授業を観たが、ICT を使ったり、生徒どうし話し合いをさせたり、日本の授業の進め方とあまり変わらなかった。ただ、子どもたちは先生の発問に対して、しっかりととした文章で

答えているところがすごかつた。まさに、日本がいう思考力・判断力・表現力が身についているなという印象を受けた。

北谷 美希 人間教育として「紳士淑女」を育てるという独自の指導方針がたいへん興味深い学校であった。たいへん落ち着いた授業の雰囲気は、その学校文化によって培われているのだろうと感じた。参観した中国語の授業では、生徒が意見を臆することなく述べ、教師との対話を通じて授業全体が深まっていく過程を見ることができ、中国の子どもたちの表現力のレベルの高さを知ることができた。また、校舎を回っていると、一人の女子生徒が日本語で話しかけてくれ、英語で質問をすると、スムーズに答えが返ってきた。コミュニケーション能力の高い生徒であった。また、教職員との情報交換・交流の場があつたが、対応してくれた教職員は教科に関わらず、英語を使ってある程度の意思疎通ができる点も、すばらしいと感じた。さらに、図書館や実験室、セキュリティー付きの寄宿舎、学生食堂などの設備がたいへん充実しており、学習環境の質の高さを感じた。中国の基礎教育の理念が形となって実践に結びついでいる学校としてたいへん印象に残っている。

宮地 温美 目標とする生徒像が印象的。
・「古文」授業見学。生徒主体の授業。ペアで生徒が考え、意見交流時間をたくさん取っていた。全体での意見交流の時間も、積極的にいろいろな生徒の挙手姿が見られた。意見も、単語や短い文ではなく、自分の考えを持ったしっかりとしたものであった。

村田 聖子 実際の授業の様子を見ることができた。また、生徒と短い時間ではあったが関わることができたのは大変よかったです。

教職員の方との座談会形式で質疑応答できる時間を設けており、自由な雰囲気で実態を尋ねることができた。小集団になったことで、より具体的な質問が可能であった。

生徒の一日の過ごし方などを具体的に説明してもらえた中国の受験戦争の大変さを具体的に感じられた。

山田 忠弘 授業参観では生徒の授業に対する真摯な取り組みに驚かされた。受験事情や社会システムが違うため、必ずしも日本の生徒

だけが不眞面目とは言えない面があるが、日本の教育が学ぶべきところだと思った。最後の自由懇談の時間では、国語(中国語)の先生2名とお話しすることができた。お互い言葉に苦労しながらも、何とか英語与中国語で意思疎通ができ、久しぶりに異文化(言語)交流の充実感を得ることができた。

本間 洋一郎…………授業の様子を参観して、規律を重んじる姿勢は日本の授業形態と共通点が多いと感じた。また、教師も生徒も、保護者さえも互いに評価をオーブンにする姿勢は、厳しさとともに意欲の向上や自律につながっていると感じた。個人情報の保護や人権への配慮が行き届きすぎた日本の教育のデメリットについて考えることができた。

星野 和江…………中学部 24 クラス、高等部 36 クラスの学校で、1 クラス 40 名弱の少人数で教育の効率や質を高める工夫をしていることが学校の特徴である。「博雅」を教育理念にして、「優雅男性」「優雅女性」を目指し、学生や保護者をコンクールで選抜し見本として発表していることや掲示板に優秀な成績の学生の顔写真や点数を貼り出し、より高い目標を持って、生活するように競争をさせながら、意欲を高めていることが理解できた。また、学生一人ひとりに「德育導師」と呼ばれる教員を配備し、1 対 1 で学生を全面的にサポートしていることも参考になった。

松山 美彦…………北京師範大学と貴陽市が連携して作った学校だけあって建物が立派であった。何よりも 1 時間実際の授業を見学できたことが良かった。私は高校 1 年生の数学の授業を見学した。パワーポイントを使いプロジェクターを使う場面と黒板を使う場面を巧みに工夫していた。自力で問題を解くということを目標に、ペアワークやグループで話し合う時間を設けていた。教室にクラス全員のテストの点数や順位が張り出されていた。保護者の活動も盛んなようで優秀な生徒が選ばれて校内に掲示されるだけでなく、「優雅パパ・ママ」も選ばれるということを聞き驚いた。また、30 分ほど日中の教員で小グループに分かれての意見交換会があった。給与体系や生徒の寮費のことなど自由に気さくな質問もでき大変参考になった。

野村 健太郎…………まず、私たち日本教職員団を迎えてくださる態勢に感動した。最初に招か

れた会議室では、私たちに窓いほしいという理由で飲み物やお菓子などが用意されていたこともそうだが、当日の案内の予定を記したカラー版のパンフレットが作成されていたことには驚いた。私の勤務校でも何度か中国や韓国の一一行をお招きしたことがあるが、逆に恥ずかしくなる思いだった。今後の勤務校での招待の時には、この学校で歓迎された以上のおもてなしで、海外の先生方をお迎えしたいと思う。

北京師範大学から任期 3 年で教師が派遣されるという当校は、紳士淑女のエリート教育をめざすという、なかなか日本では見られない学校であった。確かに礼儀正しい生徒が多く、授業も非常に集中した様子で受けており、その勉強に対するモチベーションの高さには学ぶべきものが多いと感じた。聞くと、そのモチベーションを維持するものは、放課後の補習や家庭での課題などではなく、つねに成績が掲示され、順位が明確になるという評価方法にあった。生徒たちは毎週のように発表される成績を見ながら、自分が今どの位置にいて、あとどれほど勉強をしなければならないかがおのずとわかるのだという。私たちのグループは「数学」の授業を見学したが、洋楽のチャイムが長めに鳴ったあとに、40 分間の二次関数の授業を、生徒と教員のキャッチボールによって授業が構成されているという、非常に活発な様子を見る事ができた。どの生徒も積極的に発言をし、あつという間に時間が過ぎているような印象であった。

大田 孝…………直接、学校の先生と話す機会を持つことができてよかったです。英語で話し、交流することで先生の人間性を肌で感じることができた。私たちの質問に対して、丁寧に説明する姿に、お互いに交流したいという気持ちをもっていることが確認できて大変よかったです。

貴陽市第一中学 (高等学校)

[貴州省貴陽市] 5月 23 日(金)

学校長:周進(ZHOU Jin)

設立年:2009 年

生徒数: 5,481 名以上 / 教員数: 398 名

貴陽市第一中学は大型寄宿制の中学校、高等学校である。貴州省の基礎教育の中で一番長い歴史を持つ学校で、100 年以上の歴史を持っている。質

の高い優質な教育を求めており、「教職員と学生全体が全面的に社会生活に参加する」という環境を作ることに専念している。また、教師の成長にも注目しており、「国際視野を持つ学生の育成」が目標である。

今回の貴陽市第一中学訪問では、高等学校の方を訪問した。

1.学生寮等の施設見学

- 2.高校二年生用校舎見学等
- 3.座談会(会議室)

1.施設見学について

- ①小グラウンド(テニス、バトミントン等)
- ②大グラウンド(バスケット、サッカー等)
- ③ミュージカルホール
- ④スタジアム(水泳、バスケット、サッカー)
- ⑤図書館
- ⑥クリニック
- ⑦食堂
- ⑧学生寮
 - ・9ビルディングあり
 - ・1部屋 6人部屋
(シャワールーム、トイレ、ベッド、机)
 - ・男子寮と女子寮の比率 50:50
 - ・寮の掲示板に「中国のモデル都市を目指す！」
と学生が書いている。

2.高校二年生用校舎見学について

- ①理科実験室
 - ・実習助手が管理している。使用するときは利用許可が必要である。
 - ②各クラスの横に職員室がある。
 - ③自由に本を読むためのリーディングスペースがある。
 - ④コピー室があり、学生は有料
 - ⑤1学年 33クラス、1クラス 55名の生徒
 - ⑥毎週金曜日帰省し、日曜夕方に戻ってくる。寮に残る生徒は許可を取って学校に残る。食堂は土日オーブンさせる。

3.座談会について

- ①中国歓迎の言葉 ②学校紹介 ③日本側の挨拶
- ④記念品交換 ⑤意見交換

(1)教員紹介

校長、副校長、生徒指導、事務室、国際交流係

(2)学校状況

①日本と中国は清朝の時代より交流があり、縁がある。

当時日本に渡る人が多かった。現在、近代教育を取り入れ、学校の規範となる。2004年より現在の位置に移設された。30平方キロメートルある。

②本部と2つのキャンパスがある。オーストラリアと協力したキャンパスがある。他に小、中学校もある。

・100年の歴史があり、約10万人の卒業生がいる。92%は大学進学し、毎年100名が海外留学をしている。他にも香港、マカオの一流大学や北京大学等の国内有名大学へ進学している。

・学生の質を重視した教育を行っている。

・45のクラブ活動があり、自己管理を行っている。(ロボットクラブ等がある)

・海外留学の経験をさせ、世界各地に活躍できる人材を輩出している。

・高校生リーダーコンテスト賞をもらったり、数学オリンピック、科学オリンピックで章を得る。

・学力維持のための補習は高校1、2年生では行っていない。普通の授業と学生自身の努力の成果である。

・職業訓練を進めており、バザー、ボランティア活動を行い、得た収益は貧困地域に寄付している。貧困地域の脱却を目指している。

・約10名の外国人教師が外国語を担当している。

・最後に芸術、基礎体力、徳、思想、危機管理等日本から学びたい。

(3)日本側の挨拶

教員紹介、国際理解、社会貢献等、中国に学ぶことが多い。

(4)記念品交換

中国側より日中友好を願つて。ミャオ族の銀の工芸品。日本側より写楽の掛け軸

(5)意見交換

<教員からの質問>

Q. 寄宿舎で気をつけていること

A. 寄宿舎は基本的に休むところであり、勉強は教室で行っている。教師は教師寮にて宿泊している。

Q. 海外からの留学生はいるのか

A. なし

Q. 英語の授業はどのようにしているのか

A. アメリカ、カナダのカリキュラムに沿って英語教育を行っている。中国の教育内容は中国カリキュラムで行っている。

Q. 海外留学について

A. 親が留学させたいという思いから海外に進学させ

る。

- Q. 夢、希望を持たせる職業体験の工夫はどのようなものがあるか
A. 年度当初、生涯企画授業も行っている。一人ひとりが夢を持つことができるよう、今何をしたら良いか考え、実践する。
- Q. 学生の選抜方法について(中国教育部の政策によって行われている教育の公平を実現したい)
A. 共通テスト、特技を活かしたテスト。少数民族出身の学生のための特別試験。中学生 50% 共通テスト 50% 学校推薦など。教育を受ける機会均等を実現させる。
- Q. 海外留学の費用について
A. 各家庭からの支出または奨学金制度

(大田孝)

《参加者の感想》

石橋 明子…………何よりもその施設の立派さに圧倒された。日本の大学をしのぐ程の敷地、建物に中国政府が、教育にいかに力を注いでいるか如実にうかがえた。貴州のトップクラスの生徒たちに対して資金も人材も惜しみなく与えている。英語での授業を受け、留学をする国際コースの生徒もあり、グローバル化に対する意識が進んでいると感じた。世界に通用する人材を育てる教育がなされていると思った。

更科 幸一…………100 年余りの歴史の中で、「10 万人以上の優秀な生徒を輩出してきた」という誇りを、教員が持っているのが印象的であった。成績の悪い生徒に対して補習を行うことはしていない。「補習授業に頼るのではなく自分の努力で学びを得る」という発言に表されるように、自主的学習習慣のモットーが実現されている。更に、成績を上げるために学習に留まらず、社会活動に参加するプログラムも勧められ、貧困地域への活動も積極的に行っている。人間的土台づくりも同時に大切に扱われており、学ぶべきことが多くあった。

谷口 和弘…………貴州ナンバーワンの高校として、自信と誇りがあふれる校長の説明が印象的であった。中国国内の有名大学への進学率や海外留学率も高く、まさにエリートを養成する学校であるという校風が随所に感じられた。そのような目的が明確な学校においても近年は将来に夢を持てない生徒が

増えているとのことで、キャリア教育の一環として将来の目標を達成するために何をすべきか学ぶ学習(生涯計画)を実施しているとのことで日本との共通性を感じた。

秋山 满代…………まず、敷地の広さに驚いた。高校の校舎というよりは大学のようだ。音楽堂、体育館、図書館、どれも外観だけだが、その大きさに圧倒された。寮は 6 人部屋で、机とベッドの極めてシンプルな造りだった。訪問日が金曜日だったので、基本的に生徒たちは週末には家に帰るので、小型のトランクが学校の玄関脇にいくつも置かれていた。

100 年以上の歴史ある高校で、優秀な卒業生を多数輩出させた。優秀な生徒の育成は補習授業ではなく、生徒の努力によるものだと言う。勉強面ばかりではなく、社会貢献に力を尽くしていることに大変感銘を受けた。人間教育とは何かを考えさせられた。健全に心を鍛えた生徒は、やがて社会で活躍できる人間に成長できることを、この学校の教育が示している気がした。

藤野 明彦…………その学校の物理的規模といい、また生徒数といい圧倒的な“差”を感じたのは僕だけではないかと思う。しかし、何分時間的制約等もありできればもう少しじっくり話を聞きたかった。特に自分が関連してきた、欧米の大学への進学指導に関しては説明がされなかつたので残念である。

浜中 真希…………まず、学校の施設に驚いた。大学と見間違うような広い敷地に棟が立ち並び、全寮制で勉強に励む生徒の姿に圧倒された。大きな図書館や広大なグラウンド等を贅沢に使用しながら、充実した学生生活を送っている。

次に、生徒の目標は、国内を飛び越え外国への留学を目指している。一流大学を目指し、努力を重ねている姿に感銘を受けた。

正に圧巻の一言であった。いろいろな思いが頭を巡り、整頓が難しかった。参観した事を、少しづつ整頓しながら今後に活かしていきたいと思った。

大西 敏之…………学校と実社会の接続を日本においても図っているが、中国においても意識されていた。特に、貴陽市第一中学では、子どもたちに職業体験を勧めていた。それは学校が用意する職場体験ではなく、子どもたち自らが探してくる職業体

験であり、子どもたちの興味関心に基づいて選択されている点がよいと感じた。その具体例で挙げられた葬儀屋への職業体験はまさしく子ども自身が探してこなければ経験できないものである。また、ただ単に職業体験を促すだけでなく、「生涯」という授業時間を設定し、子どもたちに将来の自分を思い描かせることも取り組まれていることも日本の子どもたちにも必要なことだと感じた。

山名 和樹……………一部エリートを徹底的に育てる中国の教育方針を肌で感じることが出来た学校だった。高校レベルで大学並みの施設を揃えるというところは、日本では無いと思われ、今後も現れる事は無いだろう。現在日本ではグローバルエリートの育成を国をあげて目指しているが、ここまで水準で教育をする国はエリート達と果たして国際社会で対等になれるのか、日本の国策に対して少なからず疑問を感じた。

秋山 繁治……………貴州省の基礎教育でも長い歴史を持つ学校で、進学校の雰囲気が漂っていた。大きな建物が並んでいて大学のキャンパスを思わせるほど充実した設備であった。授業参観などで生徒を目にすることができなかつたが、中国の進学校では、国内の大学への進学だけを目指すではなく、アメリカやカナダなどの国外大学への進学を視野に入れて国際コースが設定されていることなど、中国の大学進学の現状を知ることができてよかったです。

堀川 利洋……………広大な敷地に寮や音楽ホール、屋外運動場などの施設設備といったハード面の充実さはもちろんのこと、海外留学の経験をさせ、世界各地に活躍できる人材を輩出し続けている教育といったソフト面でも充実している。
全寮制の学校ということでPM10時過ぎまで教室で勉強ができることや学力だけでなく、社会に尽力しながら“全人教育”を行うために、「学校オリジナルのカリキュラムとして生徒に職業体験、職業訓練を取り組ませながら、バザーやボランティア活動を通して、貧困地域への寄付、貧困地域の課題解決を目指している。」といった説明に質を重視した教育実践を垣間見た。

校長の学校紹介の中で「学力維持のための特別活動(補習等)は原則行っていない。日々の授業と学生自身の努力の成果である。」との自信とプライドに

あふれた発言に伝統と誇りを感じた。

授業の様子を見ることができず非常に残念であった。

野村 健太郎……………貴陽市でトップ校の全寮制中高一貫校で、施設の大きさ、学力のランキングなど、実際に校章に書かれていたようにNo. 1 の学校であろう。清朝末期創立で、近代教育の先駆けという伝統の上に建ち、名門大学への進学率も 9 割を超え、多くが欧米の大学へ進学するという点も驚きであった。いま日本では国内の大学への進学率で競い、どちらかというと海外への大学進学はあまり積極的ではないが、中国は優秀な若者をさかんに海外へ送っている印象を受け、世界に多くの中国人が活躍している実態を目の当たりにしたように思う。さらに、45 のクラブ活動もさかんで、補習授業がなく、授業の質で勝負しようという姿勢も学ぶべき点が多かった。つめこみ式の学習や暗記型の勉強方法からも脱しようとする傾向もみられ、とくにキャリア学習に力を入れているということであった。勉強の目的はあくまでも社会貢献であるという点が理由で、その点も感銘を受けたが、生徒にはバランスのとれた、心と体の発展をめざしているという、たんに受験のみを意識した教育ではないことは明確であった。

大田 孝……………全国から共通試験、特別試験、学校推薦で入学してきた学生の教育と施設には大変驚いた。図書館、ミュージアムやグラウンドなど学校の規模は大学のようである。中国は、優秀な人材の育成に力を入れていることがよくわかった。「学生は、お金がないから卒業できないということは絶対にない」という言葉が印象的であった。卒業生の海外留学後の進路が楽しみであると思った。

4.

歴史と文化訪問

青岩の伝統的町並み視察
貴州少数民族踊り鑑賞
黄果樹の滝見学
貴州孔学堂

貴州省貴陽市花溪区 青岩古鎮（青岩の伝統的町並み） [貴陽市] 5月 21 日(水)

貴陽市の南に位置し、貴州省の四大古鎮のひとつである（古鎮とは 100 年以上の古い街並や建物群のこと）。明代の洪武 11 年（1378 年）から軍事要塞として建て始められた。城壁によって「内城」と「外城」に分かれ、城内は約 3 平方 km。内城には明、清時代の建築や石畳が残され、今でもその土地の人々の生活の場となっている。

学校訪問を終えた日本教職員訪問団一行は、青岩古鎮にて約 1 時間の自由散策をした。

古い街並みと民芸品売店や飲食店の続く城内の街で、団員らは店員らと自由に散策しながら、土産物屋で買い物したり会話や文化を楽しんだりなどしていた。

貴陽大劇場「多彩贵州」 (貴州少数民族踊り鑑賞) [貴陽市] 5月 21 日(水)

「多彩贵州風」は、市内の貴陽大劇場で毎晩上演している。貴州省に古くから住む少数民族の歌や踊りなどの伝統文化に、最新の音楽や舞踊が加えられている。以前はあまり高く評価されていなかった少数民族文化が再評価され、貴重な「文化資源」として見直された。奥深

く多岐にわたった演目が披露され、国内外問わず人気がある。

- 貴州省の少数民族踊り鑑賞
《演目》
- 1.水のイメージ：滝を背景に青を基調とした舞台
 - 2.火のイメージ：力を表現。輪ぐり、ナイフマウンテン
 - 3.琵琶歌：侗族の民謡。春は愛、秋は収穫を表現
 - 4.葉笛：緑、自然を表現。お笑いを取り入れている
 - 5.苗族：銀の装飾と踊りの披露
 - 6.ビシャ人：Chante of life
 - 7.貴州のテーマ：希望と情熱、自然を表現
 - 8.民族の風俗：ある老人の若かったころの話
 - 9.フィナーレ：一般客を交えてダンスで締めくくり

自分の民族に誇りを持ち、愛、希望、情熱を表現したショーであった。「多彩贵州」を踊り、歌、楽器、映像で表現していた。はりのある歌声、美しい音色、芸術性の高い踊り、自然を表現した映像で「多彩な貴州」を体感した。

（大田 孝）

黄果樹の滝（アジア最大の滝） [貴州省安順市] 5月 22 日(木)

貴陽市から西南に約 140km に黄果樹風景名勝区はある。この景区は、黄果樹大瀑布景区、陡坡塘瀑布景区、天星橋景区、石頭寨景区、滴水滩瀑布景区、漏陵河渓谷三国古駅道景区などで構成されている。今回、訪問団が訪れたのは、幽玄な景色が続く天星橋景区と、アジア最大の滝を擁する黄果樹大瀑布景区である。天星橋景区は 黄果樹大瀑布景区から下流約 6km に位置しており、移動は環境保護のため専用車やエレベーターを使用する。

貴陽市から約 2 時間半、バスに揺られ、安順市の「黄果樹の滝」を見学に行く。午前中は①「陡坡塘の滝」、「天星橋」の見学を行った。

① 陡坡塘の滝

入り口から歩いて 10 分ぐらいで滝に到着した。滝の高さは 21m と、あまり高はないが幅は 105m と広く、滝は雄大である。また、川幅も広く、河はゆったりと流れている。

② 天星橋

「数生歩」を歩く。一つひとつの飛び石に 1 月 1 から

12月31日の日付が1日ずつ365日分刻まれている。日付のついた飛び石を踏み台にして進む。説明によると、看板には「山の間を行くと突然水の中に365の飛び石があることを発見し、一人ひとりが自分に属する生命の石を探すことができ、その上に立って周りを眺め味わえ…」と書いてあつたが、足元ばかり見ていて周りの景色を見ていなかつたことに気づき顔を上げるととても不思議な景色が広がっていた。蓮の花が咲いていて幻想的な雰囲気のある場所であつた。「長青峠」、「美女榕」、「高老莊」、「天星湖」と進み、自然を満喫した。

『黄果樹の滝』まであと10km』という看板に「中国最美地方(中国で最も美しい場所)」と書かれていた。中国のほかの場所は知らないが、本当に美しい場所であつた。

(秋山満代)

黄果樹風景名勝区内で昼食を食べた後、午後は専用バスに乗って黄果樹大瀑布景区へ向かった。

<黄果樹(大瀑布)の滝見学>

- ・盆栽園を見学した後、エスカレーターで下まで降り、しばらく歩くと大瀑布に到着。
- ・高さ77.8m、幅101m、アジア第一位の大きさ。
- ・前後左右上下の6方位から鑑賞できる。
- ・とても有名な観光地でたくさんの人でにぎわう。
- ・1年の中でも5~6月ごろが最も美しく、冬でも滝は凍らないらしいが、水の量が減り、他の季節に比べて景観が劣ること。

この日は、疲れたがたまつてくるちょうどなか日に当たっていたが、団員らは気持ちのよい霧のシャワーを浴びたり、大自然の濃い緑に癒されたりなどして、リフレッシュできたようであつた。

夕食は貴州省の少数民族のひとつである侗族の民族料理を味わい、食の異文化体験をした。また、この日は参加者のうちのひとりの誕生日であったため、全員でHappy Birthdayを歌い、祝った。

(川本静)

《参加者の感想》

藤野 明彦……………当初は単なる「観光地」を想像していたが、環境配慮型の工夫が随所に見られた。今回ESDに着目して参加しているため、この訪問先はよかつたのではないだろうか。

山 理武和……………世界第4位の国土の面

積を誇る中国の自然の雄大さを体感できたし、黄果樹の滝は圧巻だった。貴州省は日本と同じ温帯に属しているが、気候や風土が日本(九州地方)と違い、中国の華南地域と日本(九州地方)の自然環境の違いと特色を学ぶことができた。記録した映像を通じて、地理的分野の「中国」を学習する際に生かしていきたい。

貴州孔学堂（文化・教育施設）

[貴州省貴陽市] 5月24日(土)

2012年に建てられたばかりのこの施設は、貴州省と貴陽市の“文化・教育向上のための大型公益性プロジェクト”として、130ムー(1ムーは1/15ヘクタール)を超える敷地に、2万m²近くの研修施設等が建てられた。中国の優れた伝統文化を伝承し、更に高めるために、教育交流、育成訓練、研修等に活用されることを目的としてつくられた。また、この孔学堂では、祭り、礼儀、經典教育、国学フォーラム、観光、經典の音読、学習国学經典の音読など、文化・産業などの機能も一体化させ、貴陽市民の交流の場としても開放されている。

貴州省貴陽市最後の日の5月24日、日本教職員訪問団は、貴州孔学堂を見学した。その建物や展示物の一部は貴州省の通訳により、日本語で説明された。その後は自由時間となつた。団員らは広大な敷地内を見学したりなどした。当日の敷地内には小学生の囲碁大会も催されており、先生やPTAに引率され、孔学堂を会場とし、囲碁の試合に臨む子どもたちの姿も多く見られた。一部の団員らは小学生や教師、PTAらと話をしたり、ジャスチャーを使つたりなどして交流していた。

- ・孔学堂の案内:ビデオにて鑑賞
- ・孔子とその弟子らの彫像の見学
- ・孔子の教え、儒学についての展示物の見学
- ・陽明学についての展示物の見学
- ・儒学館入場
- ・無料のカルチャースクールもある

(櫻井英子)

5. 情報共有会

第一回情報共有会 5月18日（日）

日本教職員訪問団は、中国に到着した当日、宿泊ホテルの会議室で第一回目の情報共有会の時間を約1時間半持った。この会では、参加者のアイスブレイクを兼ねた自己紹介と、今回のプログラムを効果的なものにするために自分の役割の再確認やプログラムの進め方などを参加者全員で共有した。

1. 自己紹介
2. 各係で担当決め
3. 情報共有会進行係より：各訪問機関に質問するにあたって
 - ・事前質問内容はシェアしておく
 - ・質問を良質で効果的なものにする
 - ・積極的かつマナーあるコミュニケーションを目指す
4. 文化交流係より
 - ・各訪問機関で交流の機会があれば A. ふるさと、B. まつり花 を中国語で歌う。
 - ・情報共有会の時間を使って歌の練習。
 - ・その他、各自披露したいものがあれば係まで。
5. 訪問校での写真撮影の可否とデータの共有について。
6. 事務連絡
7. 団長より

(堀 亜希子)

第二回情報共有会

5月23日（金）

中国での6日目の夜、中国の学校訪問を全て終えた日本教職員訪問団は貴陽市の宿泊ホテルの会議室で約1時間半の情報共有を行った。ここでは、今回のプログラムで得た成果と、今後の活用について各グループ毎に話し合い、最後に代表者が各グループのまとめを発表した。

◆情報共有会の2つのねらい

1. 日本代表の一団として成果を主催者である国連大学、そして文部科学省に報告すること。
2. 帰国後の参加者報告書の提出にあたり、考えを深めておくこと。

◆4つのグループを更に2つに分け、8つのグループで成果と職場でどのようにこの経験を生かすかを話し合い、発表した。

A1①グループ

成果:

- ・中国に対するイメージが変わった。日本のマスコミが伝えているような国ではなく、子供や先生方との交流を通して実際に見ることでわかった。
- ・今回参加した仲間同士が同じことを経験したことによって関係が深まった。
- ・海外に出てみて、日本の良い点を再認識した。

活用:

- ・子供たちに地球人としての考え方を伝えたい。
- ・今回参加した方々とのネットワークを広げたい。
- ・職場に体験を伝えたい。

A1②グループ

成果:

- ・中国の素晴らしさ、子供たちの素直さに感動した。
- ・(日本で)中国の訪問団を受け入れる際の交流の仕方やきっかけのつかみ方がわかった。
- ・伝統文化を守る大切さと英語教育の大切さを改めて認識した。

活用:

- ・中国の学校や子どもたちの様子を日本の職場の同僚や子供たちに伝える。
- ・中国訪問団のおもてなしに生かす。
- ・メンバーの情報交換と交流した学校とのネットワーク作り。

A2①グループ**成果:**

- ・中国の素晴らしさがわかった。
- ・中国の先生方との交流が友好的にできた。
- ・中国の施設が整っている。ICTなど。
- ・中国は格差社会を認識していて、その格差を埋めようとしていることがわかった。

活用:

- ・職員や子供たちに現実を伝える。
- ・今回のプログラムをDVDにまとめたので活用してほしい。

A2②グループ**成果:**

- ・中国の人々の意識の高さ、上昇志向は日本にも必要なもの
- ・中国は文化を大切に継承しようとしている。自分のアイデンティティーは国際社会に生きるために重要
- ・これからアジアで生きるには中国語も必要。これからは英語と中国語が必要。

活用:

- ・特色のある教育をどのように行うか。
- ・日本の子供たちの自尊心の向上。

B1①グループ**成果:**

- ・実際に中国の人々と触れ合うことでいろいろわかった。
- ・公教育とは何かを考えるきっかけになった。
- ・都市部、農村部の交流を通して格差を埋める手法

活用:

- ・子供の表現力が素晴らしい。自分の意見をしっかりとといえる。日本でも行いたい。
- ・教室の環境づくり。
- ・中国のイメージ、新しいイメージを伝えたい。

B1②グループ**成果:**

- ・中国の教育を実際に見ることができた(教育格差の是正、全人教育など)
- ・教師、子供たちからパワーを感じた。
- ・グローバルは人材作りを進める手法。

活用:

- ・グローバルな視点を持って教育を行う。
- ・学校間の情報の交流。
- ・心のハードルを取り除けた。来日の際は温かく迎え入れたい。

B2①グループ**成果:**

- ・文化交流は積極的に関わる気持ちが大切。
- ・視察で話を聞くことができた。中国の人々の積極性を感じた。
- ・個性を伸ばすための教育の環境設備が進んでいた。
- ・日中が互いに刺激を受けることができた。

活用:

- ・中国の訪問団が来日したときのアンドレに生かす。
- ・学校で生徒たちに自分が体験したことなどを伝える。中国は今、とても発展している国であることを伝える。

B2②グループ**成果:**

- ・学校の施設を見て、中国の教育に対する期待度の高さが伺える。
- ・55名の授業(小学校)が成り立っている。秩序の高さを感じた。
- ・教師を敬う気持ちや規律の正しさ(あいさつなど)

活用:

- ・中国の子供も日本の子供も同じ。共通点を日本の生徒に伝えて、互いに理解しあう気持ちを育みたい。
- ・日本で「使える(話せる)英語」を進める。英語に限らず、語学を習得してコミュニケーションに役立てる。

(澤田 美樹)

6. 成果

A1 グループ

教育に対する価値観の違い

彦坂 秀樹

最も有意義であったプログラムは、各学校訪問である。そして、その前に、中国教育部や貴州省教育厅で全体像を説明頂き、質疑の時間もとっていただいたので、予備知識をもって訪問することができたことも有意義であった。実際に視点をもって子ども達の姿を見ること、充実した施設を目の当たりにすることで、中国が「教育に力をいれていること」がよくわかった。全民教育のために国を挙げて努力し、教育の質の向上と環境(人材を含めて)の平等性をどう考えていくのか、という点では、日本と価値観が違うのであろうという実感をもった。今回の視察で、中国の教育に対する価値観は一貫しているが、日本の教育に対する価値観は揺らいでいるのではないかと思えた。日本はもっと教育のことを考えていかなければならぬと感じさせられたことが一番の収穫であった。

交流による視野の広がり

廣松 隆広

中国の教育事情と取り組みについて、いろいろなお話を伺えたことと、実際に自分の目で見ることができたこと、そしてその中で、日本の報道では伝えられない中国の良い部分や、人々の日中友好への願いを感じ取ることができたことである。もちろん私たちが

視察した学校や言葉を交わした子ども達や先生方も、まだまだ中国のほんの一部でしかないが、人と直接関わることでこんなにも自分の世界や考え方、ものの見方が変わると驚いた。

中国だけでなく、その他の国々での教育はどうのように行われているのか、どんな人々がいるのか、これからもっと学んでみたいと思っている。

目で見て、感じることの重要性

堀 亜希子

中国の実情を知ることができた。これまで、アメリカ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドといった英語圏において、教育施設の見学や授業への参加、文化施設等への訪問を行ったことはあったが、出発前に持っていたイメージがここまで覆されたことはなかった。中国の教育・文化の程度の高さや、都市部と農村部の格差を認め解消していくとする態度、伝統を大切にしつつ新しいものを吸収するエネルギー等、初めはただただ驚くばかりだった。しかしプログラムが進むにつれて、圧倒されているだけではいけないと思い、日本の教育に生かせる部分はどこかという観点を持つようになった。今回訪問した学校はすべて、自校の特色が何であるかを校長先生はじめ先生方が共通に持ち、明確なビジョンのもと生徒を指導しているように感じた。一つ一つの指導にそれぞれの目的をはっきりさせておくことが大事であることを再認識した。

「外国を訪れるときには現地の言葉を勉強していくべきだ」とよく言われるが、本プログラムに参加するまでの渡航先では英語が通じたので、その言葉の意味を深く考えることはなかった。今回、英語が通じない場面が想像以上に多くあり、「英語ができればそれで世界中事足りる」と考えていた部分が自分の中にあったことを知った。慌ててACCUから出発前に送付された「Let's try 中国語会話」をひもとくものの、付け焼刃でどうにかなるものではなく、改めて語学教育の大切さを感じた。

現在、日中関係は良いとは言い難い状況にある。しかし今回、訪問先の先生方一人一人には、本当に良くしていただいた。先生方は、よく「一衣帶水」という表現を使いながら歓迎の意を表してくれた。時差も1時間しかなく、季節も同じ、飛行機では2~3時間程度というこの近さにも関わらず、新聞やニュース等、誰か他の人の意識を通した情報でしか中国のことを知らなかつた。「実際にその場に行ってみて初めてわ

かることや気づくことがある」ということを、毎日実感したプログラムだった。自分の目で見て自分自身を感じた、自分の意識で捉えた中国の実情をうまく伝える役割を担ったと自負している。

国を超えた人間関係の大切さ

石橋 明子

このプログラムに参加する以前は、中国に対していろいろな報道から来るイメージが先行しており、中国の方々の反応や、あるいは生活環境に関しての不安があつたが、実際に中国に行って、学校の先生や子供たちに接してみて、不安は杞憂に過ぎなかつた。どの学校でも歓迎を受け、子供たちは英語や日本語で気軽に話しかけてくれた。先生方との話でも、国の違いより、同じ教科を教える者の共通した意識や、問題があると感じた。この共通点を土台にして国を超えた人間関係を作っていくことで、日中友好の絆はさらに強まると思った。

また、中国の教育については、格差や、厳しい競争原理など問題点もあるようだが、先に述べたような子供たちは明るく溌剌としていた。ダンスや歌など自分の興味に対するものに取り組んでいるときの生き生きした様子は、どこでも同じなのだと改めて感じた。さらに、格差に関しても教員の移動や、生徒の移動など平等化への取り組みがなされているようだつた。また、将来の発展を念頭に優秀な人材を育成することに特化した学校の存在にも感銘を受けた。

地球市民として生きていくには

町田 恵理子

都市部・農村部といった異なる地域の多種多様な校種を訪問することで、中国の教育について理解を深められたことが最も有意義であった。実際に自分の目で見て歩くことで中国の教育部や貴州省の教育庁で伺ったお話しの理解を深めることに役立つた。特に、児童・生徒は想像していたよりもずっと生き生きと学習に臨んでいた。姿勢よく集中して学習にひたむきに取り組む姿勢に魅了されたことに始まり、個人個人の興味関心が大切に育てられていることに感銘を受けた。少数民族が多く住む地域を訪問できたことで、互いの違いを認め合い生きることが地球市民として生きるうえで必要不可欠であると実感することができ

た。そのためには自己のアイデンティティを確立することが重要であり、伝統や文化を重んじて継承していく素地を学校で養っていると感じた。

「潜在的な能力を開発する」教育

中村 昌子

多くの体験の中から特に有意義であったこととして以下の三点をあげたいと思う。

まず 1 点目は中国の教育現場の実際に触れられたことである。

確固たる教育理念のもと、特色あるカリキュラムで、多様な教育活動が展開されていることは大いに学ぶべき点であると考える。特に「潜在的な能力を開発する」という理念のもと、様々な課外活動に子どもたちが取り組み、それぞれが自分の能力を大きく伸ばし、その成果を生き生きと発表する姿には大きな感銘を受けた。同じレベル・同じ活動の中での中庸を目指すのではなく、一人一人が違っていても、子どもが目標に向かって明確な課題意識をもち、その目標を極めようとする姿に、「みんな違ってみんないい」を目の当たりにした思いだった。

2 点目に中国の国家としての教育に対する強い意志のようなものを感じ取ったことである。たとえば、国の伝統文化を大切にし、少数民族が多い地域ではそれぞれの民族の伝統を継承するプログラムを学校で実施している様子に触れ、グローバル社会に生きる人材にふさわしいアイデンティティを身に付けることの必要性を学ぶことができた。

一方で英語教育や科学技術に関する教育など教育環境を十分に整え、新しい分野でも高いレベルを目指そうとする中国の勢いがいい意味で子どもたちの学ぶエネルギーにつながっているように思えた。

日本の子どもたちが失いかけている夢に向かってがむしゃらに学ぶ姿勢や、外の世界に踏み出していこうとするエネルギーをどのように高めていったらよいか、もう一度自分たちの取り組みを見直すよいきっかけとなつた。

本プログラムで様々な校種の学校を参観し、また中国の教育関係者、現場の先生方と交流する機会をもち、このことがこれからの互いのネットワークにつながることを期待している。

そして 3 点目に、日本全国の多くの教育関係者の方々、先生方、またスタッフの皆様と共に過ごし、交流し親交を深めることができたことである。それぞれの自治体や学校での取り組みをお聞きして、学ぶべ

きことが本当にたくさんあった。すばらしい人たちに触れ、人として学ぶこともたくさんあった。心より感謝し、これからも交流が続くことを楽しみにしている。

未来の教育への大いなる遺産

中司 康彦

第一に貴陽市実験小学校で、子ども達とかかわることができたことがあげられる。言葉は通じなかつたが、一緒に踊ったり、一緒に餃子を食べたりすることにより、心が通じ合ったと思っている。

第二に北京師範大学貴陽市附属中学校で、直接管理職以外の先生方と話ができたことである。総社市全体で行っている「誰もが行きたくなる学校づくり」の柱になる取組の一つに、共同学習がある。実際、国語の授業の中で行われていることに驚き、質疑・応答の中で直接質問でき、この学習方法が中国での最新のやり方の一つであることの説明を受けた。

第三に中国教育部の王さんを含め北京や貴陽の教育関係者の方々と出会い、話を聞けたことである。バスの移動中や食事中に、学校見学の際に疑問に思ったことを直接質問できた。また、貴陽市の旅行会社の人とも話ができ、教育関係者以外の方の意見を直接聞けたことも大きい収穫だったと思う。

第四にこのプログラムに参加した多くの日本人と出会えたこと、全国から参加した先生方や教育委員会の方の意見を聞き、日頃の教育問題を討論できたことである。また、文部科学省やACCUの方のお考えや日頃の苦労話も聞けた。さらに、総社市から参加した他の3人の方と人間関係が深まつたことも、今後の自分の教育活動に大きな遺産となった。

第五に貴州省の訪問を通して、中国の格差社会を認識できることである。貴陽の町がそれを物語っていた。教育庁はそれを少しでもなくそうと努力し続けていることも認識できた。

第六に今回のプログラム全体を通して、訪問した学校の先生方、生徒・児童のみなさんすべて、日本人に対し友好的だったことを感じた。私自身このプログラム参加により、中国に対してのイメージが大きく変わった。

最後に訪問したすべての学校の子ども達が素直で純朴であり、先生方は教育熱心であり、教育行政もそれぞれが抱える課題解決に向けて努力を重ねている姿を視察できたことでは、私にとってすばらしい経験だった。

有意義な意見交換の場として

坂本 智典

中国の教育現場を直接訪問させていただいたことで、中国の学校(校長の経営力)から学ぶところが多くあり、大変有意義なプロジェクトだった。

また、このプロジェクトをきっかけに、それぞれの学校・地域で何ができるのかを、最終日に検討し情報交換をしたことは、若い先生方にとっては他の先生方の意見が刺激や参考になり、とてもよかったです。

熱き思いを持つ同志との出会い

更科 幸一

本プログラムには、『中国生徒との継続的な交流』を第一目的として参加をさせて頂いた。中国・日本の生徒一人一人が、社会の大きな問題を自分のこととして捉え、その改善のために身近なことから何ができるかを考え実行するプロジェクトを考え提案してきた。中国教育庁や学校の先生方と短い時間だったが、プロジェクトについてお話をさせて頂く機会が与えられ、貴州省教育庁のMI DAN 先生と滞在中にメールで活動を開始出来たのは最大の成果だった。今後は継続的にプロジェクトを行い、2015年3月を一つのゴールとして、両国の生徒が地球市民である自覚を持ち、互いに理解を深められるようにする予定である。

また、本プログラムは国、公、私立学校の先生方が参加されているので、日本の教育のあり方も見直すことが出来たことも有意義なことだった。所属は違うが、教育に対する熱い想いを同じくする同志として、深く長い切磋琢磨出来る繋がりが持てたことも、本プログラムの良い点であると考えている。以上より本プログラムは大変有意義なもので、今後末永く多くの教員が参加できるようお願いしたいと思っている。

教育における伝統と革新の融合

佐々木 郁夫

今回の中国の学校視察は、大変有意義なものだったと思う。このような機会がなければ、中国が取り組んでいる現在の教育事情を知る由もなかつただろうと思う。

中国が多民族国家であり、その民族に伝わる伝統文化の継承をきちんと行き、子供たちがそれを楽しんで学んでいる様子は本当に感動的であった。このような教育は日本ではあまり見られず、中国を手本に見習わなくてはいけない教育要素の一つだと感じた。

また中国政府が教育に多額のお金をかけ、学校施設のハードの面で資金を提供している点にも驚いた。日本ではスクリーンやプロジェクターを各教室に配置したり、体育館に巨大なスクリーンを配置したりする学校は稀であると思うが、中国ではどの学校においてもそのような設備が施されていることに驚いた。また、生徒たちのディスカッションスキルやプレゼンテーション能力にも驚かされた。

このような事情は実際に現地に赴き、実際に自分の目で見てみないと分からぬことであり、今回の訪問は大変有意義だったと感じる点である。

グローバル社会に向けた人材育成

谷口 和弘

最近の国際情勢から、日中の危機的な関係ばかりが報道される中、交流事業に参加するに当たり多少の不安を持っていました私であった。

しかし、中国教育部をはじめとした訪問する先々での友好的ムードに触れ、たくさんの教職員や児童生徒と交流することにより、不安は杞憂であったと実感した。「百聞は一見にしかず。」このように教育や交流を通じた相互理解は両国の関係のみならず、国際平和につながるものかもしれないと思った。

今回の訪問を通して強く感じたのは、めざましい経済的発展を遂げる中国教育の「勢い」である。今回訪問できた学校は、選りすぐられたエリート校ばかりだったかもしれないが、多様な民族と膨大な人口を持つ中国で戦略として取り組まれている、グローバル社会で生き抜くための人材育成に大きな力が注がれていることは十分理解できた。学校の教育環境にはさまざまな掲示や展示を効果的に用いて教育的成果を存分にアピールするとともに競争意識を促している。教職員は皆熱意にあふれており、自校の教育について自信を持って熱く語っていた。児童生徒は、全く臆することなく表現力豊かに私たちに語りかけてきたし、授業場面で目にした学ぶ姿勢の真剣さや目の輝きは驚くばかりであった。英語力に至っては、小学生とは思えないほどの実力であった。

これらはいずれも我が国では失われた、または弱まっている取組ではないかと感じた。

一方で、日本の調査で 6.5 パーセント存在する、

いわゆる通常学級にいるはずの、発達障害またはその疑いのある児童生徒たちの動向がまったく見えなかつた。また、特別支援学校でも、重度や重複障害のある児童生徒への教育的対応も見えなかつた。

今回の訪問交流をとおして、日中教育の共通性と相違について体験的に学ぶことができた。今後多くの教職員が相互に訪問しこのような体験的理解を深めていくことこそが、両国の発展的友好関係づくりにとても重要なことではないかと感じた。

A2 グループ

「未来への投資」としての教育

相浦 太

新聞やテレビでの報道によりイメージ化された中国が、実際に訪れた中国とはかけ離れており、大変友好的であることが実感できることは大きい。自分の目で見て肌で感じたことであるからこそ、中国という国について日本の子どもたちに語ることができる。

中国は、貧富の差について自覚して是正に向けて取り組んでいることもわかった。実際に街中を歩いてみても、生活の質のアンバランスさが伝わってきた。

教育は、国の「未来への投資」と考えれば、将来の中国はさらに発展する「伸びしろ」を持っている。日本の場合、未来への投資といえば「学力向上」にペクトルが向いており、何の疑いも持っていないかったが、今回の中国訪問によりそれが正しい選択か立ち止まって考える機会となった。

教育における格差と平等の移ろい

秋山 満代

まず第一に、学校訪問を通して中国の子供たちに接したことである。明るい笑顔と、力一杯の演技で私たちを迎えてくれ、本当にありがたかった。

第二に中国教育部で教育政策を伺ったことである。中国は農村部と都市部の教育の格差がある。それを認識した上で、「教育平等」を目標に掲げている。具体的な方策を聞けたことは大変有意義であった。施設の平等化、農村部と都市部の教員交流、質の高い高校への入学枠をそれ以外の高校生の入学を促す

など、さまざまな取り組みが挙げられ、教育の格差を是正する努力をしている。しかし、農村部と都市部の格差は教育だけに留まらない、根深い問題である。どうあるべきか、真剣に向き合う必要がある。

第三に、中国を丸ごと肌で感じられたことである。中国の方々は反日感情があるのかと思っていたが、そうではなかった。日本人に対して悪い感情は持っていない。私が会った中国の方は皆、温厚で親切だった。また、台湾と中国とは仲が悪いと思っていたが、そうではなかった。台湾の人たちも気軽に貴州省を観光していた。最後に、中国の水は飲料水には向いていない。北京の水圧は弱く、貴陽は水圧が強かつた。水の豊かさの違いを感じた。

「資質を伸ばす教育」とは 新井 崇矩

私は自分自身の中国に対する理解を深めるとともに、その成果をより多くの人(子ども・教職員・地域)に伝えたいと考え、本プログラムに参加した。私はそのために、中国の歴史や文化(食べ物・人との交流など)、外国語(英語)教育や「資質教育」の実際、教育環境など、視点を絞り、中国の教育施設を視察した。その中でも、特に知り得て有意義であった点をまとめていく。

- (1) 中国の歴史や文化(食べ物・人との交流・街の様子など)に触れ、中国の生の姿を感じる。

訪中は3度目である。15年前に広州へ、6年前に上海や揚州、南京を訪れたが、今回の北京・貴州は初であった。中国は以前から、大気の問題がメディアで大きく取り上げられており、とりわけ最近は「PM2.5」などの単語で知られている。現在担任している6年生の子供たちも、「中国ではマスクをした方がいいってTVで放送しているよ。」と言うほどだ。また、反日デモや領土問題などについても、子供たちは気にしていた。まるで、中国人全員が日本や日本人に対して良い印象をもっていないという見方であった。

今回、訪中し、最初に訪れた都市である北京。私たちが訪れた数日間は、天候に恵まれていた。太陽が差し込むことや青空がのぞくこともあった。少し靄がかかることがあったが、地元の人の話によると、ひどいときは、数メートル先が見えなくなることもあるそうだ。大気の問題については、地元の人たちも意識しているようであった。

次に人との交流であるが、反日感情をあらわにするような人は、北京であれ貴州であれ、全く

いなかった。むしろ、私たちに対して、親切にしてくれたり、笑顔で接してくれたりする人が多かった。それは、市場で働く人であったり、飲食店で働く人であったり、もちろん、訪問先の学校で接する子供たちや教職員の皆さんであったり、本当に数多くの人たちである。メディアは、事実の一部を伝えるが、それが全部ではないということを、今回の研修では身をもって、学ぶことができた。日本の子供たちにもそのことを強く伝え、両国がより良い関係を築けるようにしていきたいと思う。

最後に歴史や文化についてだが、何より驚いたことは、食文化の多彩さ・多様さである。市場や屋台を訪れるとき、日本では見たことのないような食材や食品がこれでもかというほど並んでいる。貴州省でお世話になったガイドさんに大変興味深い言葉(諺)を教えてもらった。「空の飛行機、海の船、そして陸の机・椅子。中国人は、これら以外のものは全て食べる」。まさに、その言葉通りで私たち訪問団も、中国政府及び教育部の方々に用意していただいた中華料理に舌鼓を打った。唐辛子を始めとする香辛料の利いた四川料理は、日本人の我々にとって、非常に辛みを覚え、思わず「ラー(辛い)」と叫んでしまうほどであった。貴州省教育局の方の話によると、「これは全然辛くないですよ。No ラーです。日本の皆さん用に辛さを少し抑えてあるのです。」とのことであった。本場の四川料理を体験することができたことも、教員である我々にとって良い経験だったと思う。一つ、北京で振る舞われた本場の北京ダックは好吃(ハオツー=美味しい)であった。

また、青岩地区の街並みやアジア最大の滝である黄果树の滝などの観光名所にも連れて行っていただいた。中国の少数民族である漢民族だけでなく、少数民族のミャオ族・トン族・ブイ族の方々を実際に見ることもできた。華やかな衣装や伝統的な楽器を用いた演奏は、私たち訪問団の心に残るものであった。大変貴重な体験をした。

このプログラムの間に、多くの中国の方々と触れ合う機会に恵まれた。必然的に、中国語を話す機会も多くあり、日本の子供たちにも簡単な会話表現を教えたいと思う。そこから、中国語や中国について興味をもってくれることを強く願う。

- (2) 初等教育段階で、国際理解教育(国際感覚・異文化理解)を、どのような形で進めているのか知りたい。また、国際理解のツールとしての外国語(英語)教育について、実施の頻度や何をねらい

として行っているのかを知りたい。

英語教育については、実施の頻度は週 2~3 時間ほどで、ねらいとしているものは、読み、書きより、「会話表現」に重点を置いていたことが分かった。今回訪問した学校での歓迎セレモニーで、英語で流暢に司会をする子供がいた。また、気さくに私たち訪問団に話しかけてきた子供たちも、簡単な会話表現を使いこなしていた。また、市場で話をした一般の子供(小学生)も、英語を臆せず話すことができた。これらの事実には感銘を受けた。

日本でも、今後、英語が週 3 回となり、教科化される方向である。中国の例を見ると、やはり、小学校段階で週 3 回ほど英語の学習があれば、それだけ会話力なども向上するのだと思った。一方、中国では、大学入試などで英語の配点を低くし、国語の配点を増やすという方向に転換することも分かった。国際社会で活躍する人材を育てるよりも大切だが、「英語を用いた仕事をしない人」にとっては、「英語の学習は時間の浪費」という考え方のようだ。至極合理的で、大胆な政策転換であると思った。

- (3) 中国の「資質を伸ばす教育」の実際を、教育環境など含めて知りたい。今回訪問した多くの学校で、課外活動(クラブ活動)を見学することができた。どの学校でも、子供の興味関心を尊重し、週に 1 回は課外活動を設けていた。見学した書道やダンス、理科、古典の暗唱、伝統的な楽器の演奏などに取り組む子供たちの姿は、本当に生き生きしていた。どの子も、日本の子供たちと比べると、「表現力」があった。プロのダンサーやチアガールなどは、どんなに苦しい状況でも観客に対し、笑顔を見せるというが、中国の子供たちは現時点できれいにできているし、意識しているという印象を受けた。盲聾啞学校で見た按摩の授業もそうである。義務教育終了後、すぐに自立し働く子供たちもいる。その意識をどの子ももつて、学校での活動に取り組んでいる姿が見えた。

もちろん、生き生きとした子供たちを支えているのは、教育環境が充実しているからであろう。訪問した学校は、グラウンド設備、理科室、家庭科室、音楽室、ダンス室、普通教室、どこを見ても設備投資に余念がない。また、それぞれの分野の第一人者を講師として学校に招き入れ、授業を行っていた。中国政府が国をあげて、教育に力を入れていることがひしひしと伝わった。

このように、目的意識がはっきりした国と子供た

ちと、これからの中華人民共和国で日本人は競争したり、パートナーとして仕事をしたりするわけである。いろいろと考える良い契機であった。

これらの視点以外にも、大きな収穫があった。それは、プログラムに参加した先生方との交流である。全国各地の教育の現状を知ることができた。また、本校のように、ユネスコスクールに申請予定の学校にとって、既にユネスコスクール登録をしている学校や何度も ACCU 事業へ参加をしている学校の先生方と話をすることができ、その内容や実際を知ることができたため、大変有意義であった。それにより、本校の ESD の取り組みがユネスコスクールの理念と一致することが分かった。帰国後、登録に向けて管理職と話し合っていきたいと思う。

隣国であり、最大の貿易相手国である中国。そこで見て、感じて、学んだことを子どもたちに伝え、中国という国への理解を深めていこうと思う。

国際社会を生きる子供たちに見聞きしたことなどを伝え、「自分も行ってみたい！もっと世界のことが知りたい！」という意欲に繋げていきたいと思う。

情熱あふれる「同志」との交流

藤野 明彦

ともかく全国にはいろいろなところで、様々な立場でご苦労されている「同志」がいるということ。また、各職場で教育のために、少なくとも「児童・生徒」のために努力を続けているという事実と、それを少しでも改善したいという情熱があるということを再確認させもらった。今後ともこのようなプログラムは継続していくいただき、単なる「観光旅行」ではない大きな意味があると思う。また、様々な年齢・職種の方と交流できたこともこのプログラムならではではないかと思う。

将来を見据えた教育の重要性

濱方 弥生

実は、プログラム参加前は、メディアからの発信を通しての中国しか知らないかったため、あまり良いイメージをもっていなかった。しかし、中国を訪れる機会をいただき、教育局の方々の話を伺ったり、実際に現地の学校を視察させていただいたりする中で、中国の国を挙げての教育に対する熱心さと、将来を見据

えた教育現場を見ることができて、やはり、「百聞は一見にしかず」だと感じた。

今回訪問させていただいた学校が特別だったのかかもしれないが、施設・環境においても視聴覚機器においても、非常に充実していて、日本の学校の比ではなかった。また、3年生からの英語教育も定着していて、街中の大人には通じない英語が、小学生や中学生には通じる実態があった。授業を受ける子どもの姿は、実に落ち着いていて、集中した様子だった。

受験することで高度な教育を受けられ、家庭の裕福さが教育レベルに関わると言われる日本と違い、中国では、義務教育に受験制度がなかった。地域の子ども達が地域の学校に入るという。本来あるべき姿だと思う。そう考えると、やはり、もう少し日本も、小中学校の教育を見直すべきなのではないかと考えた。

学校に行くのが当たり前で、何となく授業を受けている子どもが多く見られる日本と比べて、中国の子ども達は集中して目を輝かせて学習に取り組んでいるように感じた。将来、こういう教育を受けて育ってきた子ども達と、日本の子ども達は対等に渡り合えるのだろうかと、少々心配になった。日本の教育の在り方も、テストで良い点数をとるだけの学習ではなく、将来の自分を見据えての生きた学習に変えていかなければならぬと感じた。即ち、ユネスコスクールを中心となって推進しているESDの教育を進めていくべきだと実感した。

教育にかける力と可能性

浜中 真希

中国の学校を訪問すると、歓迎会で、すばらしい生徒の文化発表に触れることができた。どの学校にもそれぞれの特色があり、個性の伸長が図られていた。地域の文化を大切にし、誇りを持って取り組んでいた。訪問校では、子ども達が明るい表情で話しかけてきて、私たちが心から歓迎されていることを感じることができた。国と国との間にいろいろな事情があつても、人間同士が直接触れ合うことは大切なことであると改めて感じた。

また、今回のプログラムを通して中国の教育に掛けるを感じることができた。広大で立派な施設を持つ中学校や高等学校、そこで勉強に励んでいる生徒の様子や意欲的に発言する高校生の姿に大変刺激を受けた。

併せて、中国の教育の可能性を再認識した。特にさまざまな学習や体験を積み重ね、学習意欲の向上

を図り、自身の可能性を見出そうとしている生徒の姿は非常に参考になった。

一生懸命に学ぶ姿は尊いもの

井上 徹

貴陽市をはじめ様々な地区、学校種の訪問・授業観察を通して、中国の教育制度について理解を深めることができた。特に、貴陽市附属中学校での授業観察が印象に残った。中国語は理解できなかつたが、教師の所作に高い授業力を感じた。また、生徒の学ぶ姿勢から向学心の高さを感じた。どの国の子どもも「分かるようになりたい。」という一生懸命に学ぶ姿は尊いと実感した。

中国の教育行政関係者、教師との意見交換会は、相互理解と友好促進に有意義な時間であった。

他を知り、許容していく大切さ

川本 静

最も有意義であったことは、都市部と農村部、両方の小学校を観察させていただけたことである。設備や周りの環境に違いはあるとも、どちらの児童も目を輝かせながら生き生きと学んでいる姿に感動した。また、少しでも多くのことを学ぼうとする子どもたちの意欲に感心させられた。貪欲に学ぼうとする中国の子どもたちを見て、見習わなければならないと思った。「強制的」ではなく、ある一定のところまでは確実に教え、そこから先の専門性は子どもたち自身が学ぼうと決定すれば学べるという「自然」な教育カリキュラムも、ぜひとも日本の義務教育に取り入れていただきたいと感じた。

また、中国の食文化や国民性を実際に肌で感じ取ることができたこともとてもよかったです。自国の文化と比べて、「嫌だ。」「無理だ。」と否定することは簡単だが、それを許容し、理解することがいかに難しいことであるかを感じることができた。私は勤務校で外国語活動の専科をしており、特に「国際理解」に力を入れて取り組んでいるが、これまでの自分の授業や考え方を見直すいい機会となつた。このプログラムに参加させていただくまでは、小学校では、いろいろな文化や言語があることを知り、日本との違いに気づくことができればいいと考えていた。しかし今は、他国の文化や言語をただ「知識」として教えるのではなく、子ど

もたちにその「知識」を認め、違いを受け入れさせる(許容する)ことが本当の意味での「国際理解教育」につながるのではないかと考えるようになった。例えば授業の中で、「日本では○○だけど、中国では□□なんだよ。」と私が話したとすると、きっと子どもたちは「えー！なんで？うそー！変なの！」などと口々に言い、自分たちの文化との違いを知ることはできるだろう。しかし、その「違い」を受け入れ、理解しようとする態度を育むことはできていないのではないだろうか。これから外国語活動において、子どもたちが他国の生活や文化に触れたり慣れ親しんだりするなかで、知るだけでなく、その違いを受け入れ、さらに理解していく活動を考えていきたいと思う。

子どもたちの向上心を育む重要性

大西 敏之

日本では子どもたちが夢や希望を抱きにくい状況であるが、学校訪問で中国においても同じ状況であることを窺い知ることができた。しかし、授業を参観してみると、中国の子どもたちの向上心の高さを感じることができた。向上心の高さが学習意欲につながり、授業に集中して取り組むことにつながっていると思われる。これは中国の教育と社会の関係も大いにあると思うが、成績上位者や生活習慣の良い児童生徒を校内に掲示していたことも一因と考えられる。しかし、現在の日本の公教育において、そのような競争心に即した取組は難しいように思える。また、そのことによって学校・学級の運営が難しくなることも考えられる。

貴陽市第一高校において取り組んでいる子どもたちへの職場体験の推奨は大切なことであると思うが、それ以上に子どもたちが職場体験などに取り組もうとする意欲を育む授業を設定していることが重要なことと思われる。このような取組は日本の子どもたちにとっても必要なことであると考える。子どもたちが自分の将来について考え、希望を見出し、夢を広げていくことができる取組を創出していくことが必要であると思った。

また、中国において、今、古典(論語など)の教育に焦点が当てられている。このことは自国の文化に触れさせるとともに、子どもたちのアイデンティティを育んでいく一助になると考えられる。奈良市においても世界遺産学習という取組を実施しているが、その有用性を再認識することができた。

地域に根ざした伝統文化教育

山 理武和

7泊8日の本プログラムで義務教育機関、中等・高等教育機関など6つの学校を視察訪問し、中国の教育の現状や特色、そして視察見学で自然生活環境、歴史的事項について総合的に学ぶことができ、感謝している。

中国はめざましく経済発展を遂げている。その勢いが地方まで普及し、ビルや公共施設が急ピッチで建設されていて民衆の生活は全体的に向上していくが、一歩地方に行ってみると昔ながらの生活が営まれていた。平等教育を目指す中国の教育事情において、都市部と地方の教育の格差、地方の教育の特色、少数民族の子どもたちへの教育のあり方を特に見てみたかった。そういう意味で花溪青岩小学校への視察訪問は有意義であった。

花溪青岩小学校に訪問すると、まずそれぞれの民族の伝統舞踊が披露され、改めて日頃から民族のルーツや伝統を大切にする確かな伝統文化教育が行われていることを体感し、日本の私が勤務している学校においても、民族性や地域性を大切にしながらその地域に根ざした、生徒や保護者の願いを叶えられるような教育に努めていかなければならないことを強く感じた。その後校舎内の施設等見学をしたが、児童たちが瞳を輝かせ、学習に打ち込んでいた。特に印象的だったのが、2、3年生の書写の授業で、2年生の女子がちよこんと椅子に座り、黙々と硬筆をしている姿だった。どの児童・生徒も学習意欲がものすごく高く、活気があつて圧倒された。これから中国の教育がさらに発展していくであろう、そのパワーを垣間見た。日本の私の勤務する学校でも、さらに意欲的な学習が展開できるように生かしていく、工夫・改善を図っていきたい。

視察訪問した学校は、それぞれ教育方針や特色があり、学ぶべきところが随所にあり、有意義であった。特に、北京師範大学貴陽市附属中学校での「儒雅男生・優雅女生」コンテストには関心を持った。意識を高め健全育成のため、日本の私の勤務する学校でもコンテストやコンクールなど定期的に企画していく。また、中国の児童・生徒たちは授業において自分の考えや思いをしっかりと表現できていて、夢や目標を持ち上昇志向が強かった。そういった点で日本の児童・生徒たちも見習うべきところが多いと思うし、日本の私が勤務している中学校の生徒に不足している部分なので、育成に努めていきたい。日本の私が

勤務している中学校の特色を生かし、持続発展教育(ESD)の推進を図っていきたい。

今後も日中両国の教育の質的向上並びに日中両国、両国民の相互理解と平和友好を促進する本事業が継続・発展していくことを期待している。

有意義な現場視察と教員との交流

山名 和樹

観光では行くことができない、中国の教育現場の視察は大変有意義なものであった。それに加えて、日本全国から参加した教員達と接し、様々な情報交換が出来るという面で、このプログラムには 2 重の価値があると感じた。

今後も中国の学校と交流を続けるという観点からみると、1 校あたりの滞在時間が短く、相手校と具体的な話をすることも難しかったため、進展させていくのは簡単ではないように思えた。

プログラムは概ね順調に日程を消化できていたようだと思うが、情報共有会に関しては日程遵守という意識が出すぎていたように思う。有意義な情報共有を行うのであれば、例えば、最終日に予定されていた孔子廟の見学ではなく、上海に朝から移動し、上海で時間をかけて情報共有を行うといった取り組みが良かったのではないかと思う。

B1 グループ

成長の過渡期を迎える学校教育

秋山 繁治

高校での教育経験しかないので、小学校、中学校での公教育の在り方について、自分自身が再考する機会を与えていただき感謝している。小学校の訪問では、日本からの教職員の歓迎ということもあって演奏や踊りを鑑賞させていただく機会が多かったが、どの学校も教員の指導が行き届いていて完成度が高いものであった。また、高校では、知識重点型の授業が中心で、寄宿舎制の学校が多く、日本より多くの学習時間が設定されていて、高いレベルの進学校では、外国の大学への進学まで視野に入れてカリキュラムが組まれていることがわかった。

僕自身の経験では、中国は今まで一度も訪問した

ことのない国であった。国民服、自転車を連想していたが、現実は高層ビル、高級外車、電動のオートバイ、建設中の高速鉄道などを目の当たりにして、北京から飛行機で 3 時間を要する地方都市の貴州でも、高度成長の真っただ中にあるのだと感じた。学校教育の面でも、中国は急速に発展する途上にあると感じた。他国と比較することで、日本の学校教育を客観的に見るという視点をもてたことが最も大きな収穫であった。

手を取り合い、友好関係構築を

樋上 睿夫

「最も有意義であった内容」を特別に書くことができないくらい、全体にわたって大変有意義な交流事業であった。行く前は正直言って、政治問題、環境問題等、私が持っている中国に対するイメージはあまり良くなかった。しかし、中国大使館教育処を訪問し、中国の方々と交流する中で、私の考えが徐々に変わっていた。そして、北京市や貴陽市の教育関係者や通訳の方々、空港、ホテル、お店等で中国人の人と直接関わる中で、「一衣帶水」両国の人たちが手を取り合って、友好的な関係を築いていかなければならぬことを本当に強く感じるようになった。

訪問先の学校でも、驚かされたことがたくさんある。まず、私達訪問団を熱烈歓迎してくれたことである。特に訪問した小学校では、目頭が熱くなるくらい嬉しくなった。そして、どの学校でも子どもたちの表現力のすごさに脱帽した。また、どの学校にも共通して教師のプロフィールが掲示されていること、教室や廊下にカメラが備え付けられていること等にも驚かされた。カメラについては、ある学校の校長先生は「防犯上カメラを付けているが、カメラに映し出された授業の映像は、農村部の先生が活用している。本校の先生も、自分の映像から授業を振り返っている。子どもたちも、映像をみて復習している。」と、述べられていた。日本でも、子どもたちや保護者の立場、教師の立場で有効活用できるような機器の整備が、教育現場で進むことを願う。

日本教育の良さと課題へのヒント

北谷 美希

今回の研修では、主に 3 つの成果が得られたと考

えている。

まず、中国の教育制度についての見識を深めることができたことである。北京市、貴陽市の各先進校の視察を通して、中国の教育事情を実際に目にし、体感することができた。グローバルな視野をもちながら、個性を大切にし、自国の伝統文化を大切にしている中国の教育がめざしているものは、日本の教育がめざすものと同じであり、共通点が多いこともわかった。実際に中国の教育現場を訪れ、子どもたちが学習する姿を見せてもらい、大変参考になった。特に感銘を受けたのは、中国の子どもたちの表現力の高さである。日本の子どもたちは、自尊心の低さ、自信のなさから、自分を表現することが苦手な傾向にある。日本では言語教育やコミュニケーション能力の育成に力を入れているが、中国の子どもたちの姿から学ぶ点があると感じた。また、中国の基礎教育の方向性の1つとして、中学からは、質の向上を目標に、興味に応じて専門的に音楽やスポーツ、言語を学べるようになっている点も興味深い。中国の教育制度の良さを学ぶことのできた今回の研修は、日本の教育の良さと課題について考える上で大きなヒントとなった。

2つめに、教育現場での教職員との交流、中国教育部の方々や、通訳の方々との交流を通して、友好を深めることができたことである。中国の人々と触れ合い、その温かい歓迎を受けることを通して、日中相互理解の一番の近道は、実際に顔を合わせて個人と個人が心を通わせることであると感じた。また、それゆえに、語学力、コミュニケーション能力の育成の必要性を改めて感じることができた。相手を理解したい、自分をもっと理解してもらいたい、という思いが言語学習の最大の動機付けであり、英語は他国の人々とのコミュニケーションにおいて、やはり強力な手段であることを、授業を通して子どもたちにしっかりと伝えていきたい。

3つめに、日本の訪問団のネットワークができたことである。日本全国から集まった団員から学んだことは多く、大きな刺激を得た。今回の貴重な出会いを大切にして、引き続き情報交換を続け、このつながりを今後の仕事に活かしていきたい。

自分の視点を顧みる機会

光行 泰子

学校現場を直接訪問できる貴重な機会であり、どの学校訪問もすべて有意義であった。特に、授業参観が出来たり、直接教職員の方々と意見交換できた

ことで、すぐに取り入れられそうなことを見つけたり、自身の視点を変えてみる必要性を感じたり、これまでの自分を顧みる機会となつた。

また、「日中両国の相互理解と友好の促進」という面では、多くの中国の方々の親切な対応に触れ、国としてまた中国人という括りで見るのではなく、個人個人の顔を思いうかべて、中国を語ることが出来るようになったことが最大の成果であると思う。ほんの一言でも、中国語での会話が通じたり、子どもたちに名前を呼んでもらったりしたことで、意思の疎通が出来た、という感覚を私が持てたことで、今後私が中国の事を語る時のニュアンスが変わってくるはずである。

その他特に有意義であったと感じたことは、日本各地の様々な校種の先生方と話す機会が得られたことである。特に私は一つの私立校にずっと勤めているため、様々な日本の学校の様子を知ることが出来たのも、貴重な体験であった。

交流による印象の変化

宮地 温美

- ・中国の教師、生徒との交流ができたことがよかったです。以前までの中国に対する印象が大きく変わった。
- ・歓迎セレモニーでの中国の生徒の様子から、中国人の意識の高さ、素晴らしい表現力に感動した。日本も学ぶべき点だと思った。
- ・学校設備や校内掲示物など勉強になった。環境作りから生徒の学びへの興味関心に繋がると感じた。
- ・自由時間に町を散策し、中国人の生活を実際に見ることができてよかったです。
- ・伝統的な観光地への訪問は、中国を知るという意味でとても有意義な時間となつた。

国際社会に向けた教育

森川 直美

国を挙げて国民の教育水準を向上させ、政治的にも経済的にも文化的にも国際競争力を高めていくとする明確な目的のもと、教育政策を遂行されていることに、大きな感動とともに、中国の底力を感じた。中でも、国際社会で通用する人材の育成を目指しているエリート教育の質の高さには、驚かされた。一方、近年では、教育における機会均等を目指し、都市部と農村部における教育格差を是正しようとする取り組み

も急速に進んでいることに、眞の意味での中国の国際化を感じることができた。

授業や発表では、子どもたちが夢に向かって瞳を輝かせて、何事にも真剣にそして精一杯取り組んでいる姿に自信と誇りを感じつつ、ある意味感動さえ覚えた。そして、この姿こそが今の日本の子どもたちに最も必要だと痛感した。

都市部と農村部の教育比較

村田 聖子

- ・都市部と農村部の学校について比較する話が説明の中でよく出てきていたが、両方を見学でき実際の様子を見ることができたことはよかったです。多民族国家で少数民族の多い地域訪問もあったので、少数民族の児童生徒への配慮などをもう少し知ることができたら更によかったです。
- ・孔子堂や黄果樹の滻訪問などは、帰国後児童へ中国の様子伝える時に活用できた。
- ・事前にどのようなことをしたいか、参加者の希望を聞いておき校内見学や活動内容に反映させてもらえると参加者の希望に沿ったプログラムになると思った。
- ・教育交流が目的のプログラムなので児童生徒と関わる時間がある更に良いプログラムになると感じた。
- ・説明の中出てくるものが見るチャンスがあれば実際にどのように行っているのか見られるとよかったです。(眼球運動や全校一斉運動など)

中国教員の指導力の高さを実感

櫻井 英子

貴陽市実験小学校訪問での、児童の演出がとても良かった。普段の姿ということで、先生方の指導力の高さを痛感した。

「百聞は一見にしかず」の体験

高橋 篤

本プログラムの中の後半に実施した第 2 回目の情

報交換会でも、多くの参加者が指摘した通り、日本における報道と、実際の中国で見聞きしたこととは、隔たりがあった。教育の現場で同様のことがいえ、農村部との格差や、問題解決型の授業、相手のよさを発表しあう発問など、教育行政も、一人ひとりの教師も、課題にまっすぐに向き合い、その解決に向けて、試行錯誤をしながら努力し続けている点を間近に見ることができたことは最も有意義であった。

中国という国を知るよい機会

山田 忠弘

台湾訪問の経験はあるものの、中国本土を訪れるのは初めてなので、訪問先だけでなく、中国という国をしっかりと見て帰りたいと考えていた。また、せっかく行くのだから中国の方ともお話をできたらとも思っていた。団体行動中はなかなか機会がなかったが、それでも通訳の方々にいろいろなことを教えていただくことが出来た。大学の教養課程で中国語を選択していたので、少しほ理解できたが、とても会話レベルまでは行かなかつたことに加え、英語もあり通じないこともあって、きちんと交流できたとは言えないのが心残りである。今後自分が訪問する機会があるかどうかはわからないが、日本でお迎えする機会は必ずあると思うので、今回の経験を生かした「おもてなし」ができるように気持ちを引き締めたいと思っている。

教育に対する教師の熱い底力

吉井 進

- ・中国は「恐い」というイメージがあったが、そんなことはなく、児童生徒の素直で熱心な姿、教師の熱い指導に中国の底力を見た。
- ・訪問させていただいた各学校において、児童生徒及び先生方と短時間ではあったが、有意義な時間を共有することができ、当初のねらいを達成することができたと考える。
- ・日本国内の地域・学校種が異なる先生方と、9 日間、ともに活動することができ、多種多様な情報交換と親睦をもつことができた。この点においても学ぶこと多く、意義があった。

B2 グループ

多くの刺激や意見を得られる場

秋山 誠

施設の説明や学校の取り組みについて説明を聞くこともたいへん勉強になったが、子どもやそこで働いている教職員と触れ合ったり、コミュニケーションを図ったりすることは、中国語が思うようにできなくても有意義だった。また、授業を1時間じっくり見ることで、授業を構成する担任の先生の考え方や中国での授業の行い方について理解することができた。また、授業を視察することで学習に取り組む児童・生徒たちの姿勢や活気、熱意というものもこちらに伝わってきて、とても有意義だった。

コミュニケーションの重要性

本間 洋一郎

北京師範大学貴陽市附属中学校の先生方と直接ディスカッションする時間を設けていただいたことが最も有意義だった。やはり学校視察では、生徒や現場の教師と直接コミュニケーションをとることが一番だと思った。

全体討議の形式だけでは、管理職の方や、一部の先生のお話しか聞くことができず、改まった質問は通訳の方や英語の先生の力を借りないと難しいと感じたが、少人数での会話では、互いに英語が苦手でも、ある程度の意思疎通をはかることができ、自分と同じ教科の先生にいろいろな質問をすることができた。歓迎のセレモニーも大変すばらしいものだったが、今後は、現地の教員や生徒に直接話しかけられる機会をさらに増やしていただけるとありがたいと思う。

また、普段はあまり接する機会のない、日本の異なる校種の先生方といろいろなお話をできたことも大変貴重な体験だった。

“日本人の課題”を痛感

堀川 利洋

グローバル化へと舵とりをしている今日、自国の文

化を再理解しながら相手国の理解をしていかなければいけないと考えている。プログラム参加にあたり、私自身の訪中テーマは①中国文化の理解②人材育成(各校の教育)方法の情報収集③中国のみならず国内の先生方との交流、であった。

①中国文化の理解

日本人(特に思春期の子供たち)は、周りの目を気にし始め人と違うことを嫌がる傾向がみられる。日本人の風習なのか“出る杭は打たれる”という言葉もあるように、周りに合わせる風潮がある。時にはそれが大事な感性なのだが、国際社会ではその感性が足を引つ張ることもある。国際社会では自己表現に長けたものが勝つ。

中国人は本当に積極的で、どんどん自己主張してくれる。自分が主導権を握りたいという姿勢が前面に出ており、“勢い”を感じた。中国へ視察に行かせていただき、子供たちや教育関係者と話をしていくうちに、“日本人の課題”を実感した。世界に目を向けるなら周りに合わせてばかりでは通用しない。

観光地、施設にも足を運ぶ機会をいただき、その中で中国の環境に対する取り組みも知ることができた。

②人材育成(各校の教育)方法の情報収集

計6校の学校見学を通して、改めて中国のエネルギーやマンパワーの源を実感した。勢いがある。

中国の人口は日本の人口の約10倍。ということは競争率も10倍となる。国内外で生きていくためのチャンスを得るために必死であり、そこにハングリー精神を肌で感じた。

学校教育のプログラムでは各学校で“全人教育”を体现しており、主要教科と芸術、スポーツ等の教科との両立を国として支えている。勉強だけできればいいという感覚ではない。知識と技能を身に付けている人間を育てている。また、全教科で学校理念を実現していることが伝わってきた。このような意識の高さや上昇志向こそ日本人に必要なものだと考える。

③交流について

相手と心を交わせるコミュニケーションを図るには通訳を介さずに直接会話ができることがある。授業で生徒に配布している資料に「通訳を介していては相手に与える印象が弱くなる。公用語は多くの人が理解できるのでメッセージがダイレクトに伝わり、心つながりが生まれる」と書かれていた言葉が腑に落ちた。改めて語学の重要性を痛感した。

学校到着し、教室より「こんにちは」とかわいらしい

声であいさつをしてくれた児童がいた。中国の方が一所懸命に日本語でコミュニケーションを取ろうとしてくれている姿が嬉しい。歓迎レセプションでは司会進行を見童が行なっていた。司会者に限らず、児童の堂々とした立ち居振る舞いに驚きと感動を覚えた。様々な訪問先で“熱烈”な歓迎を受け、中国政府の目指す全人教育の徹底を肌で感じた。“熱烈”を感じた理由は子供たちの我々に対する姿である。現地の子供たちとの触れ合い、かかわり方(レセプションを企画してくれた学校はすべて小学校である。)が印象に大きく影響することを学んだ。民族踊りをレセプションプログラムに取り入れ、我々訪問団も子供たちと手をにぎりながら一緒に輪を作ることで“仲間に入った”“距離が縮まった”印象を持つことができた。“相手を知る”うえで“一緒に”ということは必要なことだと考える。

国内外問わず同業である先生方との意見交換は大変貴重な時間であった。自分が持っていないかった視点、観点で物事を捉えること、気がつくことができた。

本プログラムに参加するにあたりエントリーシートに表記した“百聞は一見にしかず”というフィルタで中国視察を終え、今の胸の中には“障子を開けてみよ。外は広いぞ。”という思いが強い。今、自分が直接目にしている世界、生活している世界がすべてではない。情報過多の時代を生きていこうで、何が正しいのかは自分で判断しなければならない。その判断をするためには教養や知識だけでなく自分の経験という要素も必要であると強く感じている。

振り返ってみると、国際化、グローバル化といった表現を耳にすることが多くなったが、中国視察に参加する前の意識(視野)は国内のみだったと反省している。しかし、視察後は自分自身を含め視野を世界に向けることに意識がいくようになってきたと自分で認識できている。私自身の人間力や経験値がUPした喜びを日々の生活の糧にして子どもたちに伝えてていきたい。

積極的な教育制度の改革

星野 和江

今回の訪問で、最も有意義であったのは、様々な学校を訪問できたことであった。それぞれの学校で、児童、生徒の個性を伸ばし、確実に学力をつけるために、教育環境を整え、授業内容やクラブ活動など

で様々な工夫をしていることが理解できた。どの学校にもカウンセリングルームがあり、学習面だけでなく、メンタル的な面でもしっかりとサポートしているところにも、見習う所があると感じた。古くからある文化や伝統を重んじ、それぞれが特色ある学校作りをして、授業を受けている児童や生徒が真剣に学習に取り組んでいる姿も印象的であった。

中国は人口も多く、55の少数民族も生活している中、全民教育を目指し、教育制度の改革を積極的に行っていることが理解できた。また、町の発展や教育の様子から中国の活気を感じることができた。そして、格差社会を意識して、改善していく方法を模索しながら進めていることから、全民教育のために国を挙げて努力していることが理解できた。

交流に大切なことは「気持ち」

松山 美彦

中国国家教育部、省教育厅など一個人や一学校では訪問できない場所で、一教員が自由に発言できる機会をいただき、その質問に対しても中国側から真摯にお答えいただいたことに先ず感謝したい。更に小学校、中学校、高校の各校種から小中一貫校、中高併設校、全寮制の学校、特別支援学校など特色ある学校を訪問させていただいた中国側の配慮に感謝している。加えて、訪問した機関、学校の関係職員の遠方からの来客(私たち訪問団)をもてなす意識の高さ、そして学校訪問の際に来客に「良いところを見せるぞ」という子ども達の、姿勢、取り組みに中国の発展の原動力、自信というようなものを感じた。

日本と中国とは「一衣帶水」、「同文同種」であるがゆえ、教育制度なども日本と同じところが多いのだろうという先入観で理解しようと思っていたところがあつたので、今回、実際に様々な機関を訪問させていただいて、日本と違う点、異なるところがたくさんあり、参考にすべき点が多いということに改めて気づかされた。

また、日本からは全国各地の様々な校種の先生が参加していたので、それぞれの勤務校での国際理解教育等の取り組みなどを情報交換するだけでとても参考になった。参加者の本プログラムから学びとろうという意識は非常に高く、文化交流係、記録係など係活動においても手を抜く先生はおらず、大いに刺激になった。

私は勤務校で担当する国語以外に週に2時間、中国語を教えている。本プログラムは中国語の研修がメ

インではないが、プログラムに参加して得られた中国の学校事情や文化全般に対する知識は、中国語の授業で大いに生かすことができる。他の参加者の方は中国語のできる方は少なかったが、学校訪問の交流の時間等での皆さんの積極的な姿勢を見て、交流で大切なことはまずは「気持ち」であるということを再認識した。交流の際、いくら外国語ができる、「気持ち」がなければ、発した言葉は伝達に過ぎず、コミュニケーションには結びつかないということを強く思った。

これら、本プログラムで経験したことを今後、現場で生かせるよう尽力しなければ罰が当たると思ってしまうような充実した素晴らしいプログラムだった。

よりよい未来を切り開くための努力

西山 啓子

地図の上では、中国の広さや大きさは知っていた。実際に訪問すると本当に広くて大きくて、建物の高さ、道の幅の広さに驚いた。交通量もすごく多かった。建築中の大きな建物がたくさん並び、これからどんどん開発されていくと感じた。

中国教育部では、中国の教育制度や教育方針、今後の方向性について直接話を聞くことができ、子ども、教職員、学校、地域全体が、より良い未来を切り拓くために努力をし、実践を重ねていることがわかつた。教育に対する思いは同じであった。

日本語と中国語の同時通訳をしてくださる方々のすばらしさに驚いた。言葉を相手に伝えられるということは、国際交流の原点だと思った。

訪問させて頂いた各学校では、すばらしい教育環境の中で、目標に向かって真剣に活動している子どもたちの表情がとても生き生きとしていた。50人を超えるクラスの学習でも、集中力の持続と活気に満ちあふれていた。先生を尊敬し、教えられた内容を深く学習していた。学習の始まりと終わりが気持ちよく、学んだことに対する充実感が伝わった。

学校では、発表の場を大切にされていた。歌声も美しく響き渡り、身体が柔らかく、リズム感がはじけるような踊りができるのは、日々の積み重ねの成果に他ならない。伝統を大切にした芸術の高まりを感じることができた。

日本各地の先生方といっしょに、中国の先生方、子どもたちと交流することができ、たくさんの貴重な体験をすることができた。

時代のニーズに答える教育現場

野村 健太郎

このプログラムに参加したことで得ることができた最大の成果は、日本にいると知りえない中国の教育事情を間近に見ることができたこと、またそれによって日本のメディアで報道される一面的な中国観を私自身すべて払拭できたことだと思う。まず、「英語教育の改革」はすでに小学校3年生からの必修として10年以上の実績があり、またその成果も非常に出ていること、その一方で、中国の伝統的な価値観である漢字文化や儒教思想をもう一度、教育内容に反映させて、英語教育とのバランスを取ろうとする姿勢。中国の英語教育の後を追おうとする日本が取るべき施策に多大なヒントとなると思う。また、中国には55の少数民族がいる多民族国家であることは以前から知っていたが、ここ最近の報道ではテロなどに限られ、中国ではどのような状態にあるのかわからなかつたが、今回のプログラムで「少数民族の動向」が少しはあるが実感としてつかめたと思う。また、北京や上海のみならず貴州省の都市は、急速な近代化を遂げているが、他方で、道を一本逸れれば、そこは依然とした貧困街であり、今後のインフラなどの整備が期待されるところだろう。「環境教育の必要性」も、近年の中国の環境汚染の問題から見ると、緊急の課題なのかもしれない。学校によっては、さかんにエコ授業などを導入し、基礎教育から環境教育を意識させようとする動向がいくつも見られた。リサイクルを浸透させようとする取り組みなども今後の中国の教育現場へ期待されているようだ。

教育に対する共通認識の発見

大田 孝

教育部の訪問はとても有意義であった。中国の教育に関する方針や意見などを聞いた後、中国の教育制度と照らし合わせながら各学校の取り組みの説明をうけることができたので理解しやすかつた。また、日中の教育に対する考え方や共通点などを見いだすことができた。これからの中学生も達が中国との友好関係を作り出すことができるようにしていきたい。

また、日本全国の教職員との交流ができたことは、各地域それぞれの教育問題などの意見交換ができることは大変有意義であった。

尊厳を大切にする教育

大塚 基嗣

北京・貴州の小・中・高・特別支援学校訪問を訪問し、校内をめぐるだけでなく、教職員や児童・生徒と交流できたことが有意義であった。教育についての意識の共通点と相違点を多く学ぶことができた。中国教育部の目指す自信とゆとり、尊厳を大切にする態度が感じられた。

東京での事前研修で教育的課題の背景や、政府として目指すところと国民の実状などを把握してから学校訪問できたことは、理解が深まりたいへんよかったです。

また、寝食を共にした先生方との交流と出会いは貴重な財産となった。日本全国の取り組みを知る機会にもなり、中・高の取り組み、一貫校の取り組み、私立と公立など様々な校種での交流の在り方を探ることができた。

都市部・農村部の実態がよくわかる行程を組んでいただき、実り多い研修・交流となった。

教育の平等・教育の公平性を打ち出す教育施策が随所に感じられ、日本の教育も方向を改善できる点を考えられた。

交流によって得られた気づき

澤田 美樹

今回の観察では、たくさんの学校の様子を知ることができたので、大変有意義であった。その中でも良かったのは、生徒たちの学習している様子が見られたこと、そして中国の先生方と交流できたことである。中国の生徒や先生方との交流を通して、日本の教育の共通点や相違点などについて意見交換できたことが大変に良かった。

現在の交流が未来を築く

友田 俊司

「今の交流が未来を作る」特に、未来を作る子どもたちを育てる教職員が交流し、それぞれの国において、自分を信じ、他者を理解し、共に協力し合える子どもたちを育てれば、きっと今より素敵な世界が作れ

るものと思う。だからこそ、今回の中国の教職員や子どもたちとの交流には大きな意味がある。中国に対するイメージは、近いけど遠い国であり、他のアジア諸国とは少し違う位置にあった。そのような中、今回の機会をいただき、実際に中国の地に立ち、中国の教師や子どもたちと交流することで自分のイメージが大きく変わっていた。観察した全ての学校では、熱烈歓迎のもてなしがあった。子どもたちの笑顔と先生方の笑顔があった。思わず自分自身も笑顔になり、友好的な交流となった。また、中国の子どもたちの学ぶ姿を見た時に、自分の学校での教育をもう一度しっかりやらなければという意欲を持つこともできた。視野を広く持つことで、自分を振り返ることとなり、教員生活の終盤において、価値ある観察であった。

観察の期間中は、共に過ごした日本全国の先生方と深く交流することができた。ほんの9日間ではあつたが、今後もつながり合える仲間となることができた。

北京市では、飛行機の遅れのため時間不足となってしまったが、天安門広場だけは目にしたいと夜遅くに歩きで訪れた。ニュース等で知っている広場に立つことができたことは、今後のニュースの見方も変わってくるような気がした。貴陽市については、ほとんど認識がなかったのだが、発展する中国のすごさを感じることとなった。少数民族のすばらしい舞踊等にも感動をおぼえた。ただ、自分の語学力不足は、致命的であった。中国語も英語もできない自分にとっては、ちょっとしたことも伝えられず、残念であった。言葉の大切さを実感し、今後は、子どもたちといっしょに英語の学習にも励みたいと思う。

偏見の危うさと伝統の大切さ

山田 枝里子

1. 実際に肌で感じないと分からぬことがある。

もともと、「中国人は」「韓国人は」「日本人は」という言葉が嫌いだった。いろいろな個性や性格の人がいるはずなのに、どうしてひとくくりで偏見を持つのか。しかし、ニュースなどマスメディアからの情報だけみているとなんとなく「中国は…」と思いがちであった自分もいる。実際に行って、どのような様子か確かめてみたい、中国の良さを肌で感じたいという思いから本プログラムに参加した。結果、隣の国なのにこんなにも中国のことを知らなかつたのかと自分の知識のなさに驚いた。都市によって雰囲気が全然違うため、ここは本当に同じ国なのかと思うこともあった。通りすがりの中国人のおじさんに「日本人かい? 私たちは見た

目も服装も本当に似ているね」と笑顔で話しかけてもられた。中国の教職員と直接会話することで、中国の先生が「娘が日本を大好きで、なぜ好きなのか分からなかったけど、あなたたちと話をして、なぜ好きなのか分かった気がする」と言ってくれたし、彼女は最後の方は私と腕を組んで歩いてくれた。このような経験を通して、あらためて偏見を持つことの危うさを実感した。この思いを生徒に還元していかなければならぬという思いを強く持った。

2. 日本の、そして勤務校の強みは何か。

いつ海外からの訪問団が来ても披露できる、歓迎を示す出し物や伝統芸能があるだろうか、私たちは生徒にどのようなことを日本の文化・伝統として受け継いでいきたいのか、などということを考えさせられた研修でもあった。56 もの民族がいる中国で、それぞれの伝統文化を守ることが迫られている状況ではあると思うが、伝統文化を実際に見るとこんなにも感動するのかと思った。感動は人と人との心の距離を近づける。興味関心を持てば「知りたい、聞きたい」という思いが生まれ、直接の交流を持とうと思うことにつながる。これから、自分の勤務校に海外から訪問団が来たとき、どのように歓迎をすれば相手が喜んでもらえるか、そのとき限りの交流やそのとき限りの出し物にならず、持続可能なものにするには何をしていくべきか、校内で、また、今回一緒に参加した先生方と協力し、相談していくと思う。

7.

今後の活動予定

伝える

◆職場・職員に伝える

- ・職員研修などを通して、中国の教育政策の最新情報や現状の課題を伝える。また、中国の教育設備、教師の様子、子どもたちの様子を伝える。
- ・今回の訪問で自分自身が、中国に対するイメージが大きくかわったこと、肌で感じたこと、実際に現地で体験したことを職場へ持ち帰って報告し、国際理解教育や外国語活動の重要さを伝えていきたい。
- ・中国で実施中の授業の工夫や指導の好事例や教育環境など今後、日本の学校等でも取り入れが可能かを模索する。
- ・グローバルな視点からの次世代の人材育成と、子ども達の将来を見据えた学習の重要性を伝えていく。中堅・若手教員へは授業実践に意欲を高め、指導力の向上につながる糧にする。
- ・同僚の教職員に話をし、海外との交流の受け入れ体制の土壌を作りたい。同様に国際交流事業に前向きな教職員を中心に、異文化交流の相談や協力を仰ぐことができる環境づくりに尽力したい。
- ・教育委員の立場上多くの教職員と接する機会があるので、積極的に今回の体験・情報を発信し、国際理解をはじめとするESD活動に役立てたい。また、効果的な研修なども参画したい。
- ・「持続可能な交流」という言葉が今回の研修で最も多く聞かれた。他の都道府県の参加者も、訪問や手紙などの交流が一過性のものとなってしまい、その解決方法がわからないという課題を持っていた。その多くが、言語の問題であった。一方、中国では「言語以外によるコミュニケーション」に力を入れている学校があった。表情や歌、若者の興味関心が高い文化を積極的に活用することが、コミュニケーションをとりたいという動機付けにつながっていた。日本でも研修会などで、この取り組みについて、伝える機会を設けていきたい。

◆児童・生徒に伝える

- ・全体朝礼や全体集会の時間、授業の時間を活用して伝える。
- ・学校の様子、生活の様子をビデオや写真を使いながら子どもたちや教職員に伝え、教育を中心とした日中の交流促進に努める。
- ・中国という国の広大さ、人々の温かい歓迎や、生徒たちの学習への取り組みぶりなどを伝えたい。
- ・民族の違いによる偏見をなくしたい。報道の偏ったイメージに振り回されることがないように、写真や動画などを使って直接生徒たちに感じ取ってもらえるように工夫したい。また、それを見てどのように感じたか、中国の同世代の児童や生徒に対してどのように思うか、感想文として提出を求めていきたい。
- ・英語を使うことで、中国の生徒や先生方とコミュニケーションが取れた。英語を学びたい、学ばせたいというモチベーションにつながったことを伝えたい。また、お互いに言葉が通じたときの喜びや、訪問国の簡単な挨拶や数字、買い物に必要な言葉を覚えることで、旅行の楽しさやコミュニケーションがとれた時の感動を伝えたい。一方で、英語だけでは通じない場面もあり、その土地の言語も学ぶ必要性も感じたことを伝えたい。
- ・学習に向かう際の中国の生徒の姿勢について紹介し、今後グローバル社会の中で生きていく生徒に対して、実際に交流することの大切さを伝えたい。

- ・目中の文化の差異に気付くだけでなく、互いの文化の良い点や違いを認めることの大切さと、その困難こそが本当の「理解」であることを伝えたい。
- ・プログラムで撮った写真、中国で購入した国語や算数のノートや子ども向けの本を学校に展示し紹介していきたい。

◆保護者・PTA に伝える

放課後にPTA向けの中国語会話教室を開催したいと考えている。

◆その他の公共の場で伝える

- ・学校外に向けた取り組み方は、教育委員会と協業して進めていく。
- ・ユネスコスクールの集会や大会で視察の成果を発表する。またユネスコ協会へも報告する。
- ・市町村教育委員会主催の国際理解講座の講師を務めたいと考えている。
- ・国際理解教育担当として県内の学校に中国の教育事情等を伝え理解を促し、交流を推進していきたい。
- ・教育委員会に対し、教職員の人材育成並びに各学校のESD教育の充実の視点から、本プロジェクトへのメリットを伝えている。そして中国や韓国からの教職員団の受け入れを働きかけていきたい。
- ・今回のプログラムをきっかけに、中国からの留学生がいる学生寮の舍監から、留学生との交流会への参加をよびかけられている。現在調整中である。
- ・家族も含めて、中国に対するイメージが良い方ばかりとは限らないので、実際に訪れた者として、そのような先入観を変えられるように、広く伝えていく。
- ・仕事とは全く無関係だが、親戚の集まりで中国の話をして欲しいといわれている。

改善・新しい取組みに活かす

◆ESD 活動に活かす

- ・ユネスコスクールおよびスーパーグローバルハイスクールの活動が活発化するよう尽力する動機ができた。
- ・国際交流の幅を広げる。中国との交流は今回が初めてであったが、これをきっかけとしても交流活動をはじめる。
- ・今回のプログラムで全国の先生方と交流し、自身が勤務する学校の特色ある教育活動が ESD 活動であると強く感じた。今後も活動を推進し、その成果を市にも広めることで ESD の重要性をアピールしていきたい。
- ・大阪市全体でも国際理解教育や ESD、ASP ユネスコスクールの取り組みが持続・発展するよう推進していく。
- ・ESD 水源学習で今回訪問した貴州省の紹介をする。貴州省の美しい自然について学び、環境保全、少数民族の文化などとからめて学習する。

◆教科授業に取り入れる

- ・5、6 年生の外国語活動における国際理解教育に活用していきたい。
- ・本プログラムで訪問した首都北京の様子や機能、天安門(公式プログラム外)、貴州省の少数民族の伝統芸能(踊りなど)と生活の様子や雄大な自然環境、青岩の伝統的町並みと民衆の生活の様子など視察観光や歴史文化視察で学んだことを、担当する社会科の授業で生かして伝えたい。
- ・中学 1 年生の地理の授業で活用(例:帰国直後に中国語クイズ)。2 学期の中国についての学習ではさらに詳しく扱う。高校 2 年生の日本史の授業でも活用。その他、各学年の特別活動の時間などに話をする予定。
- ・児童生徒の発達段階に応じて、各教科・総合的な学習の時間で、中国の文化教育の現状や日本との違いについて学ぶ機会を設ける。
- ・学年集会や「総合的な学習の時間」等において本事業の経験を紹介し、異文化について考える機会を作る。特に「異文化理解」をテーマにした中学 3 年生の「総合的な学習の時間」では、実際の体験を話したり、現地での動画や画像を提示することにより、生徒の関心を高め、外国人との交流を身近なものとしてとらえられるようにする。そして、生徒が異なる言語や文化事象を学ぶことの意義に気づく学習過程を盛り込み、異国の考え方や価値観について、互いの違いを認めつつ相手の立場や考えを理解し尊重する態度を育成する。
- ・耳にした中国語や目にした中国文化の知識を、担当している語学(中国語)の授業や漢文の授業で生かす。
- ・自分が担当している世界史と、市民講師と共同で実施している「国際ボランティア」の授業で、中国事情として紹介していく。また、世界史 A の生徒 40 人に台湾からの生徒 40 人弱を合流させて、中国史と漢字での交流授業を実施した。

- 各学年のカリキュラムの中で特別活動や総合的な学習、道徳の時間を利用して授業を行う。

◆教材・指導計画に活かす

- 学校訪問の際に、中国の学校の良い点に気が付いた。集中力、きちんとした姿勢、個性豊かな表現力、柔軟な身体、歴史を大切にしているところ等である。その様子を日本の子どもたちに話し、「話を集中して聞くこと」を学校全体での取り組みとし、そのことが、どんなに自分を向上させることにつながるかが認識できるような体験を、より多くさせられるようしたい。
- 中国の子どもたちの学ぶ姿勢には、見習うべきものがあったように思う。授業への集中、はきはきした発言等、本校の子どもたちに欠けているところもある。その課題を本校職員と共有し、全力で改善に取り組んでいきたい。
- 中国学校の先生方と英語で交流、もしくは中国語で会話ができる日本の先生方のコミュニケーション能力を見習い、英語と中国語での会話が少しでもできるように、これから勉強していきたい。
- 中高 6 年間の国際教育・平和学習・環境教育などをより充実させていきたい。
- 中国語に限らず、新しい言語を覚え、積極的に使ってみるという経験をたくさん積みたい(自分も児童・生徒も)。
- ESD カレンダー(日本文化与中国文化の比較に活かす)
- 勤務校では「グローバル社会に生きる力を育む」をテーマにここ数年研究を進めている。日本人としてのアイデンティティをもち、自国の伝統文化を継承し、自信をもって発信していくことのできる力を育む場をカリキュラム化したい。
- 子ども達が興味をもっていることを選択して取り組めるカリキュラムを作成していきたい。
- 中国で見てきた中国の教育環境整備の良い点を生かし、問題点や課題点は見直しをして改善されたものを取り入れたい。生徒の健全な成長や進路の実現に向けて両国の先進技術や試みを取り入れるように努めたい。
- 全クラスの英語科の授業、または集会の場において、国際理解をテーマに今回の研修の成果についてプレゼンを行い、その前後にアンケートをとり、子どもたちの感想、意識の変容などを分析し、今後の国際理解教育に役立てたい。
- 長崎市が進めている国際理解教育に向けて、職員の理解を深め、実践意欲を高める手立てをしたい。
- 指導力の面において、向上を図るために自分自身も努力を惜しんではいけないことを再認識。今後は視野を広げ行動し、生徒とともに国際交流を進めたい。また、中国の国民性を知ることで道徳の在り方を考え直さねばならないと思った。
- 国際理解という観点では、自ら積極的に関わっていくことが大切であると思う。自分自身が常に国際理解の姿勢を示し、多角的な視点と自分の経験を踏まえて公私において行動していきたいと考えている。
- 音楽の授業で中国民謡の「まつり花」を深く教材研究し、児童・生徒たちのより豊かな歌唱表現につなげたい。そして世界の国々に親しまれている音楽をピアノで演奏するようにしたい。
- 掲示物は英語だけでなくできる範囲で韓国語、中国語表示を実現させていきたい。
- グループ学習の必要性が叫ばれているが、本校においてもその可能性を模索し、従来の授業スタイルに終止符を打ちたいと切に感じた。

◆その他の取組みに活かす

- 本校では各プログラムに何度か参加してきたことで国際交流を推進していく土壤ができつつある。その中で、学校もしくは生徒同士の交流の必要性を強く感じている。また、参加した先生方との情報交換を進めたいと考えている。
- 学校のクラブ活動の中の茶道・華道・日本料理などの分野があるが、もっと深みと幅を持たせようと考えた。(日本の文化の再認識)
- 伝統文化を教授できる教員、もしくは社会教育や保護者ボランティアの活用を進めたい。
- 中国からの転入生や留学生に対して、保護者も含め、適切な支援や助言ができるようにする。(異文化理解)
- 海外の国々の人とも、目と目を合わせて積極的に言語やボディーランゲージを用いて伝えようとする力を育てていきたい。また自分の夢や自分たちが住んでいる地域のよさをつたえられる力を養いたい。
- プログラムに参加することで得られたネットワークを活用し、学校間交流を推進する。具体的には中国語の授業の際にインターネットやスカイプを使っての交流を企画する。または、海外交流を授業で計画している先生へ、中国の学校との交流先探しに協力したい。
- 中国訪問で頂いた記念品を活用し、校内に記念品を中心とした貴陽の学校・子どもたちの紹介コーナーを設置する。
- あいさつはコミュニケーションの良いきっかけの一ひとつである。教職員も生徒も日本語以外にも複数の言語のあいさつができるよう身につけたい。そうすることで、国際感覚が芽生えてくるのではないかと考える。

- 世界各国の社会課題や地球課題に対して子どもたち自身が自分事として捉え、その背景と改善の方法を考える。ポケットティッシュの背面広告にそのメッセージを載せ配布し(小さな一步から大きな一步へのソーシャルアクション)、世界各国で多くの子どもたちが、社会を良くするためということに目を向けアクションを起こせるようにする。

今の活動を継続する

- 中国教職員を継続的に受け入れたい。
- 今回、参加された方とのネットワークを大事にして、情報交換や交流を継続していきたい。
- 代表者が参加者として見聞してきたことを、他の教員に伝えていくことも本プログラムの大切な趣旨の一つであると考える。研修1日目に昨年度の団長及び副団長より研修の経緯を聞く機会を設けていただいたが今後も前年度の参加教職員との交流の機会を設けていきたい。
- 国内外を問わず、教師という視点で同じ悩みを抱える仲間として、共に理解、切磋琢磨できる関係を継続していく努力をしたい。
- 今回のプログラムに参加した日本各地の教職員のネットワークも大切にして、情報交換をしていきたい。

中国との交流を実施する

- 継続交流に向けての相手校を見つけ、児童や教員の交流を進めたい。
- 貴州省の国際交流担当者と連絡をとり、具体的な交流へと発展していくようとしている。また、貴陽市付属中学の教員とも連絡を取っているため、そこから学校交流を進める計画している。
- 高校での発展科目(総合的な学習の時間)に「中国語」を設定しているので、語学学習の成果を中国の学校との交流に生かせるのではないかと考えた。
- 以前より本校の姉妹校である中学校があるが、今回の訪中をきっかけとして更に積極的に関わりたいと考えた。
- 長崎市には中国文化がいたる所に根付いており、いろいろなイベントが行われている。今回の研修をきっかけに、それらのイベントに参加し、長崎にいる中国の方との交流を深めたいと思う。
- プログラム以外でも、日常の、街中などで、中国の方と出会ったときに積極的に交流がもてるよう心がける。

受け入れに生かす

◆次回(2014年秋)の中国教職員招へいプログラムにむけて

- 訪問する側として感じたことを、今後の受け入れ時に生かしたい。
- 荒尾市は中国教職員訪問団受け入れ自治体として、今回の中国訪問の参加枠を貰っている。市教委を含む小学校、中学校、支援学の各種別の学校から参加できたので、受け入れ時の対応についても、今回の訪問を生かすことができるという大きなメリットがある。是非、中国教職員訪問団の方々には、日本のおもてなしの心を堪能していただけるよう、各学校創意工夫した受け入れにしていきたい。
- 中国の訪問機関や学校、地元の人々から受けたあたたかい対応に対し、歓待感謝の念とおもてなしの心を持って対応し、中国の先生方にとて実り多きプログラムになるよう心がけたい。日中両国の教育の質的向上と相互理解・発展と平和友好につなげていきたい。
- 誠意を持って中国教職員の受け入れに対応していきたい。その際には日本の学校教育・家庭教育・社会教育のすばらしさ、きめ細かさ、中国の教育に負けない日本の底を感じてもらえるような訪問をしていきたいと考えている。併せて、日中友好の架け橋となるような交流をしていきたい。

◆その他の取組み

- 中国流の受け入れ方やおもてなしの仕方を本校の国際交流プログラムにも応用する(異文化理解と活用)。また、それらの知識は本校が受け入れている様々な交流計画、米国、フランス、豪州及び区のユネスコ協会との共同事業などにも活用できると思う。
- 国際交流プロジェクト(部署)で、配布資料や写真を使って報告会を開く。海外への派遣や海外からの訪問団を迎える際には、この部署でプラン等検討するので、今回の経験を踏まえて意見やアイディアを出していく。

◆付録. プログラム写真



中国教育部の前で記念撮影(中国・北京市)



事前オリエンテーション(東京・国際連合大学本部エリザベスローズ国際会議場)



訪中前の中国大使館教育処主催の夕食会にて(右:公使参事官の白剛氏、左:日本教職員訪問団団長の坂本智典氏)



中国教育部での中国の教育概要説明



中国教育部との記念品交換(右:中国教育部国際協力交流司副司長の陳盈暉氏)



北京市趙登禹学校にて記念品交換(右:校長の徐唯氏、左:日本教職員訪問団副団長の友田俊司氏)



訪問のお礼に中国の歌を披露する参加者(北京市趙登禹学校)



貴陽市盲聾啞学校の生徒の作品を見学する参加者



貴陽市盲聾啞学校にて記念品交換(右:副団長の濱方弥生氏、左:貴陽市盲聾啞学校校長の但琪琳氏)



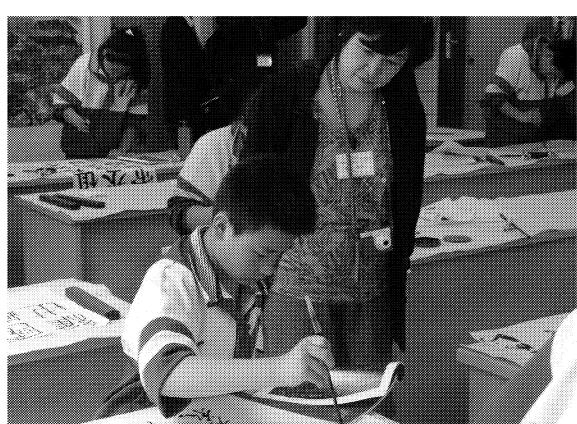
貴州省教育庁表敬訪問(左:副庁長の楊勇氏)



貴州省教育庁の教育概要説明を聞く参加者



児童らと一緒に苗族(ミャオ族)の踊りを踊る参加者(貴陽市実験小学)



習字の授業の見学(貴陽市実験小学)



児童らの手作り餃子の試食体験(貴陽市実験小学)



校長の鐘海燕氏(中央)と参加者の交流(貴陽市実験小学)



布依族(ブイ族)の踊りを披露する児童(貴陽市花溪青岩小学)



古典の授業の見学(貴陽市花溪青岩小学)



「黄果樹の滝」の前で集合写真



北京師範大学貴陽市附属中学にて記念品交換(左:校長の沈連柱氏)



積極的に交流が行われた日中教職員同士のフリーディスカッションの時間(北京師範大学貴陽市附属中学)



校長の沈氏と団長の坂本氏ら、管理職同士のフリーディスカッションも行われた(北京師範大学貴陽市附属中学)



大学並の広いキャンパスと整った設備を持つ貴陽市第一中学



貴陽市第一中学校長の周進氏(中央)からの学校説明。左は今回全日程同行してくれた中国教育部の王禹耕氏。



学生食堂の見学(貴陽市第一中学)



最後の訪問校見学を終えた晩に行われた第二回情報共有会



A1 グループ



A2 グループ



B1 グループ



B2 グループ

◆資料 1

国際連合大学
2012-2013年／2013-2014年 国際教育交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム

(2014年5月18日(日)-5月25日(日): 中国／北京市、貴州省貴陽市、上海市)

実施要項

1. 背景

国際連合大学は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)を委託機関として、「国際教育交流事業」のひとつとして、中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002年より開始されたこのプログラムにより、これまで1,364名の教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、日本の教職員を中国へ派遣していましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化35周年を記念する2007年からは中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
- (2) 教育現場での交流・意見交換を通じ、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
- (3) 中国の文化全般への理解を深めること
- (4) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 活動内容

- (1) 中国の教育政策の現状と課題についての研修
- (2) 中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
- (3) 学校および教育・文化施設の視察

4. 日程

出発前オリエンテーション: 2014年5月17日(土)

プログラム実施期間: 2014年5月18日(日)-5月25日(日) (8日間)

日付	日程	訪問先	活動
5月17日(土)	前日(午後)	東京	出発前オリエンテーション
5月18日(日)	派遣第1日目	北京市	東京(羽田空港)出発 北京首都国際空港到着
5月19日(月) 派遣第2日目	派遣第7日目	北京市 貴州省貴陽市	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問
5月24日(土)		上海市	教育・文化施設等見学
5月25日(日)	派遣第8日目		上海(浦東空港)出発 (成田、関西、福岡の各空港へ) 日本の各地へ到着

注:訪問先、活動内容については変更の可能性があります。スケジュールの詳細は追って通知します。

5. 参加者

下記の教職員、随行員、計50名程度の参加とする。

- (1) 2012-2013年中国教職員招へいプログラムの東京近郊受入れ校の教職員
- (2) 2013-2014年中国教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会が推薦する教職員
- (3) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
- (4) 2014-2015年中国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (5) 日中間の教職員交流に高い関心を持つ学校の教職員
- (6) 国際連合大学、文部科学省、ACCUの職員

6. 参加資格

- (1) 日本国であること。
- (2) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。特に、在職3年～15年程度の教員が望ましい。
- (3) 将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

7. 評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙によりACCUに報告書を提出する。

8. 渡航費等諸経費

- (1) 中国政府が下記について負担する。
 - 中国国内の移動に要する交通費
 - 中国滞在中の宿泊
 - 中国滞在中の食事 *中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
 - プログラムの運営に必要な経費(通訳等)
- (2) ACCUが下記について負担する。
 - 日本(往路:羽田空港、復路:成田・関西・福岡空港のうち最寄り空港)と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
 - 日本国内交通費:オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額(ACCUの規定に準ずる)
 - オリエンテーション当日(5月17日)の日当の定額および宿泊
 - 帰国日(5月25日)の日当の定額(ACCUの規定に準ずる)
注1:オリエンテーション当日、開始までに到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCUが前日の宿泊(手配と経費負担)および日当を負担します。
注2:帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCUが当日の宿泊および日当を負担します。
- (3) 各参加者の負担
 - 海外旅行保険料:プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
 - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について
 - 旅券(パスポート):入国時に1ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
 - 査証(ビザ):一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

プログラム期間中は、日本語・中国語間の通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流部 (担当:佐々木、外山)
〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498/4435 FAX: 03-3269-4510
E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆資料2.

国際連合大学
2012-2013年／2013-2014年 国際教育交流事業
中国政府日本教職員招へいプログラム

日程表

期日	予 定	
5月17日(土)	13:40	受付(国際連合大学 2F)
	14:00-17:00	オリエンテーション(国際連合大学 5F)
	18:30-	歓迎セレブション(中国大使館教育部)
	22:00	ホテル(東急ステイ蒲田)着・チェックイン、宿泊
5月18日(日) [第1日目]	05:50	集合
	06:00	ホテル出発、羽田空港へ (バス内で朝食)
		空路にて中国へ CA184 羽田 8:30-北京 11:20
	13:00	ホテルチェックイン(北京西西友誼ホテル)
		昼食
	17:40-19:00	第一回情報共有会(同ホテル 6階第一会議室) 夕食
5月19日(月) [第2日目]		朝食
	09:30-11:00	中国教育部表敬訪問
		昼食(教育部と会食)
	14:00-16:30	趙登禹学校訪問(小中一貫学校)
		夕食
5月20日(火) [第3日目]	06:00	ホテルチェックアウト、朝食
	06:40	ホテル出発 首都国際空港へ
		貴陽へ移動 CZ3682 北京 8:40-貴陽 11:45
	12:00	ホテルチェックイン
		昼食
	14:00-16:00	貴陽市盲聾啞学校訪問
	16:30-17:30	貴州省教育厅表敬訪問
	18:00-19:00	貴州省教育厅と会食
5月21日(水) [第4日目]		朝食
	09:00-11:30	貴陽市実験小学訪問
		昼食
	15:00-16:30	貴陽市花溪青岩小学訪問
	16:30-18:30	青岩の伝統的町並み視察
	20:00-	貴州少数民族踊り鑑賞
5月22日(木) [第5日目]		朝食
	08:00-18:00	「黄果樹の滝」見学

◆資料2.

5月23日(金) [第6日目]	朝食 09:00-11:30 北京師範大学貴陽市附属中学訪問（高等学校を訪問） 昼食 14:30-16:30 貴陽市第一中学訪問（高等学校を訪問） 夕食 19:00 第二回情報共有会(同ホテル 3階会議室)
5月24日(土) [第7日目]	朝食、ホテルチェックアウト 08:00-11:30 文化施設見学(孔学堂) 昼食 上海へ移動 CZ6351 貴陽 16:00-上海 18:20 夕食、ホテルチェックイン(上海南航明珠ホテル)
5月25日(日) [第8日目]	朝食、ホテルチェックアウト 07:30 上海浦東空港着 空路にて日本各地へ移動、帰宅 CA929 上海 10:00-成田 13:50 CA921 上海 09:10-関空 12:10 CA915 上海 12:10-福岡 14:40

【中国教育部】

同行・通訳:王禹耕

事務局・通訳:鄭哈

住 所:北京西单大木倉胡同 35 号

U R L : <http://www.moe.gov.cn/>

【宿泊ホテル】

◆北京

北京西西友誼酒店(北京西西友谊酒店:Xixi Youyi Hotel)

住 所:北京 西单北大街 109 号

U R L : <http://www.xixihotel.cn/>

◆貴州

貴州栢頓ホテル(贵州栢顿酒店:Trade-Point Hotel Guizhou)

住 所:貴州省貴陽市延安東路18号

U R L : <http://www.trade-pointhotel.com/>

◆上海

上海南航明珠ホテル(上海南航明珠大酒店:Shanghai Southern Airlines Pearl Hotel)

住 所:上海市浦東新区晨陽路 450 号

U R L : <http://www.nhpearlhotel.com/>

◆東京

東急ステイ蒲田

住 所:東京都大田区蒲田 4 丁目 23-1

U R L : <http://www.tokyustay.co.jp/hotel/KMT/>

◆ 資料 3. 参加者・関係者リスト

1. 参加者(45人)

A1 グループ

A1-01	彦坂 秀樹	HIKOSAKA Hideki	東京学芸大学附属竹早小学校	主幹	東京都
A1-02	廣松 隆広	HIROMATSU Takahiro	大牟田市立吉野小学校	教諭	福岡県
A1-03	堀 亜希子	HORI Akiko	和歌山県教育庁学校教育局学校指導課	指導主事	和歌山県
A1-04	石橋 明子	ISHIBASHI Akiko	長崎市立長崎商業高等学校	教諭	長崎県
A1-05	町田 恵理子	MACHIDA Eriko	大田区立大森第六中学校	教諭	東京都
A1-06	中村 昌子	NAKAMURA Masako	東京学芸大学附属大泉小学校	主幹教諭	東京都
A1-07	中司 康彦	NAKATSUKA Yasuhiko	総社市立総社西中学校	主幹教諭	岡山県
A1-08	坂本 智典	SAKAMOTO Tomonori	大牟田市立天領小学校	校長	福岡県
A1-09	更科 幸一	SARASHINA Koichi	自由学園高等科	高等科副部長	東京都
A1-10	佐々木 郁夫	SASAKI Fumio	千葉県立流山おおたかの森高等学校	教諭	千葉県
A1-11	谷口 和弘	TANIGUCHI Kazuhiro	熊本県立荒尾支援学校	教諭	熊本県

A2 グループ

A2-01	相浦 太	AIURA Futoshi	長崎市教育研究所	指導主事	長崎県
A2-02	秋山 満代	AKIYAMA Mitsuyo	静岡県立吉原工業高等学校	教諭	静岡県
A2-03	新井 崇矩	ARAI Takanori	町田市立小山田小学校	教諭	東京都
A2-04	藤野 明彦	FUJINO Akihiko	東京都立杉並総合高等学校	主任教諭	東京都
A2-05	濱方 弥生	HAMAKATA Yayoi	江東区立八名川小学校	副校長	東京都
A2-06	浜中 真希	HAMANAKA Maki	金沢市立泉中学校	教諭	石川県
A2-07	井上 徹	INOUE Toru	総社市教育委員会	指導主幹	岡山県
A2-08	川本 静	KAWAMOTO Shizuka	熊野町立熊野第四小学校	教諭	広島県
A2-09	大西 敏之	ONISHI Toshiyuki	奈良市教育委員会	指導主事	奈良県
A2-10	山 理武和	YAMA Rimukazu	荒尾市立荒尾第三中学校	教諭	熊本県
A2-11	山名 和樹	YAMANA Kazuki	聖徳学園中学・高等学校	国際交流センター長	東京都

B1 グループ

B1-01	秋山 繁治	AKIYAMA Shigeharu	ノートルダム清心学園清心女子高等学校	教諭	岡山県
B1-02	樋上 翠夫	HIUE Tokuo	和歌山県立古佐田丘中学校	教頭	和歌山県
B1-03	北谷 美希	KITAYA Miki	長崎市立茂木中学校	教諭	長崎県
B1-04	光行 泰子	IMITUYUKI Yasuko	恵泉女学園中学・高等学校	教諭	東京都
B1-05	宮地 温美	MIYACHI Atsumi	寝屋川市立第十中学校	教諭	大阪府
B1-06	森川 直美	MORIKAWA Naomi	荒尾市教育委員会教育振興課	指導主事	熊本県
B1-07	村田 聖子	MURATA Seiko	稻城市立稻城第二小学校	主幹養護教諭	東京都
B1-08	櫻井 英子	SAKURAI Hideko	足立区立興本扇学園扇中学校	教諭	東京都
B1-09	高橋 篤	TAKAHASHI Atsushi	多摩市教育委員会	指導主事	東京都
B1-10	山田 忠弘	YAMADA Tadahiro	筑波大学附属駒場中学高等学校	教諭	東京都
B1-11	吉井 進	YOSHII Susumu	総社市立総社西小学校	教諭	岡山県

B2 グループ

B2-01	秋山 誠	AKIYAMA Makoto	総社市立総社小学校	教諭	岡山県
B2-02	本間 洋一郎	HOMMA Yoichiro	横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校	教諭	神奈川県
B2-03	堀川 利洋	HORIKAWA Toshihiro	市川学園市川中学校・市川高等学校	教諭	千葉県
B2-04	星野 和江	HOSHINO Kazue	星美学園小学校	教務主任	東京都
B2-05	松山 美彦	MATSUYAMA Yoshihiko	北海道登別明日中等教育学校	教諭	北海道
B2-06	西山 啓子	NISHIYAMA Keiko	荒尾市立緑ヶ丘小学校	教諭	熊本県
B2-07	野村 健太郎	NOMURA Kentaro	桜美林中学校・高等学校	教諭	東京都
B2-08	大田 孝	OTA Takashi	長崎市教育委員会 日吉青年の家	社会教育主事補	長崎県
B2-09	大塚 基嗣	OTSUKA Motoshi	大阪市立関東小学校	教諭	大阪府
B2-10	澤田 美樹	SAWADA Miki	多摩市立東愛宕中学校	教諭	東京都
B2-11	友田 俊司	TOMODA Shunji	荒尾市立中央小学校	教頭	熊本県
B2-12	山田 枝里子	YAMADA Eriko	千葉県立千葉東高等学校	教諭	千葉県

2. 主催者代表(1名)

A1-12	秋葉 正嗣	AKIBA Masashi	国際連合大学	大学院 事務局長	東京都
-------	-------	---------------	--------	----------	-----

3. 日本側機関

B2-13	木曾 功	KISO Isao	内閣官房参与 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	理事	東京都
A2-12	菊池 智之	KIKUCHI Tomoyuki	文部科学省初等中等教育局国際教育課	国際理解教育専門官	東京都
A1-13	外山 紀子	TOYAMA Noriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都
B1-12	富本 ひろみ	FUMOTO Hiromi	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都

4. オリエンテーション参加者

新井 聰	ARAI Satoru	文部科学省 生涯学習政策局参事官付	専門職	東京都
住田 昌治	SUMITA Masaharu	横浜市立永田台小学校	校長	神奈川県
米山 宏	YONEYAMA Hiroshi	公文国際学園中等部・高等部	教頭	神奈川県
佐々木 万里子	SASAKI Mariko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部部長	東京都
有薗 佳子	ARIZONO Yoshiko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都

5. 中国側機関

陳 盈暉	CHEN Yinghui	中国教育部国際協力交流司	副司長	北京市
楊 勇	YANG Yong	貴州省教育厅	副庁長	貴州省
白 剛	BAI Gang	文部科学省 生涯学習政策局参事官付	公使参事官(教育)	東京都

◆ 資料 4.

過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003年3月2日～8日	北京市、浙江省杭州市、上海市	12名
2004年4月25日～5月2日	北京市、天津市、遼寧省大連市	15名
2005年5月22日～29日	北京市、新疆ウイグル自治区烏魯木齊市、上海市	14名
2006年5月21日～28日	陝西省西安市、天津市、北京市	14名
2007年5月20日～27日	北京市、海南省(海口市、三亞市)、上海市	22名
2008年6月15日～22日	北京市、青海省、上海市	22名
2009年6月21日～28日	北京市、内モンゴル自治区(呼和浩特市、包頭市)、上海市	25名
2010年5月30日～6月6日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	23名
2011年5月29日～6月5日	北京市、湖南省長沙市、上海市	25名
2012年5月27日～6月3日	北京市、内モンゴル自治区呼和浩特市	25名
2013年6月23日～29日	北京市、甘肃省蘭州市	25名
2014年5月18日～25日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	50名
		2012-2013年枠:21名 2013-2014年枠:29名

●国際連合大学 2012-2013 年/2013-2014 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2014 年 7 月

編集・発行

国際連合大学[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email exchange@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by Wako Inc. [200]

©2014 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)